山ケ鼻遺跡Ⅲ

一般県道高路古海線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2004.7

財団法人　鳥取市文化財団

山ケ鼻遺跡Ⅲ

一般県道高路古海線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2004.7

財団法人　鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した山ヶ鼻遺跡の調査は、一般県道高路古海地方特定道路整備事業に伴う発掘調査として、平成15年度に調査を行いました。この遺跡は山ヶ鼻集落の南東周辺に展開し、この平野一帯は条里制の施行など古くから歴史ある地域として知られています。圃場整備に伴う昭和42年の菖蒲廃寺の調査や大井手川改良工事に伴う平成５～７年の古海古墳群、菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡の調査など、縄文時代から中世にかけて数々の発掘調査成果が明らかとなっています。今回の調査は集落のすぐ南の県道沿いの細長い区域でしたが、弥生時代中期の土坑、中世の溝状遺構などが多くの土器とともに検出されました。これらの資料は、当地域の古代文化を明らかにする上で役立っていくものと思われます。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年７月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　石　谷　雅　文

例　　言

1．本書は、一般県道高路古海線地方特定道路整備事業の事前調査として実施した山ヶ鼻（やまがはな）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、鳥取県鳥取地方県土整備局の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成15年度に実施した。

3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市古海字三本松420−4 ～字二町田395−7である。

4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

5．現地実測・写真撮影、遺構・遺物図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、土器実測については杉谷美恵子氏の協力をいただいた。本書の執筆、編集は主として谷口恭子が担当した。

6．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。特に出土石製品の石材同定を鳥取市文化財審議会委員 山名 巌 先生にお願いし、お手を煩わせた。厚く感謝いたします。

凡　　例

1．本書における方位は、座標北の第１・２図を除いて磁北を示す。また、レベルは海抜標高である。

2．本書で使用した遺構の略号は、土坑；SK、溝状遺構；SD、ピット；Pである。

3．今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、遺跡名略号、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。
（例；2003　YMA　SK-15　№11　2003.12.25）

本　文　目　次

序　文
例　言
凡　例
第１章　発掘調査の経緯
　第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　調査の組織・体制 …… 2
第２章　遺跡の位置と歴史的環境
　１．山ヶ鼻遺跡の位置 …… 3
　２．遺跡の歴史的環境 …… 3
第３章　調査の結果
　第１節　調査区の立地と層序 …… 11
　第２節　調査の結果
　　１．土　坑 …… 12
　　２．その他の遺構と遺物 …… 27
　(出土遺物観察表)
　第３節　まとめ …… 33
写真図版

挿　図　目　次

第１図　山ヶ鼻遺跡周辺遺跡分布図 …… 5
第２図　山ヶ鼻遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ調査区全体図…7・8
第３図　調査区断面実測図 ……9・10
第４図　山ヶ鼻遺跡調査地位置図……11
第５図　SK-02実測図 ……12
第６図　SK-03実測図 ……13
第７図　SK-03出土遺物実測図 ……13
第８図　SK-04実測図 ……13
第９図　SK-05実測図 ……14
第10図　SK-06実測図 ……14
第11図　SK-06出土遺物実測図 ……14
第12図　SK-07実測図 ……15
第13図　SK-07出土遺物実測図 ……15
第14図　SK-08実測図 ……15
第15図　SK-09実測図 ……16
第16図　SK-10実測図 ……16
第17図　SK-10出土遺物実測図 ……16
第18図　SK-11実測図 ……17
第19図　SK-11出土遺物実測図 ……17
第20図　SK-12実測図 ……17
第21図　SK-12出土遺物実測図 ……18
第22図　SK-13・14・15実測図 ……19
第23図　SK-13出土遺物実測図 ……20
第24図　SK-14出土遺物実測図 ……20
第25図　SK-15出土遺物実測図 ……20
第26図　SK-16実測図 ……21
第27図　SK-17実測図 ……21
第28図　SK-17出土遺物実測図 ……21
第29図　SK-18実測図 ……22
第30図　SK-19実測図 ……22
第31図　SK-19出土遺物実測図 ……22
第32図　SK-20実測図 ……23
第33図　SK-20出土遺物実測図 ……23
第34図　SK-21実測図 ……24
第35図　SK-21出土遺物実測図 ……24
第36図　SK-22実測図 ……25
第37図　SK-22出土遺物実測図 ……25
第38図　SK-23実測図 ……25
第39図　SK-24実測図 ……26
第40図　SK-24出土遺物実測図 ……26
第41図　SK-25実測図 ……26
第42図　SK-25出土遺物実測図 ……27
第43図　土器群実測図……27
第44図　SD-01実測図 ……28
第45図　SD-01出土遺物実測図 ……28
第46図　P-01実測図 ……28
第47図　Ｂ区遺構外出土遺物実測図……29
第48図　Ｃ区遺構外出土遺物実測図……29
第49図　Ｄ区（トレンチ）実測図……30

図　版　目　次

図版１　調査地近景　調査前（北東から）
　　調査区全景（南西から）
図版２　Ａ区全景（南西から）
　　Ｂ区全景（北東から）
　　Ｂ区東端土坑群（北東から）
図版３　Ｃ区全景（南西から）
　　Ｄ区トレンチ（南東から）
　　Ａ区北西壁面SD-01付近（南から）
図版４　Ｂ区北西壁面（南から）
　　Ｃ区北西壁面（南から）
　　Ｂ区B2トレンチ（南から）
　　Ｂ区B3トレンチ（東から）
図版５　SK-01断面（南東から）
　　SK-02検出状況（南東から）
　　SK-03検出状況（南東から）
　　SK-04検出状況（南東から）
図版６　SK-05検出状況（北西から）
　　SK-06断面（南東から）
　　SK-06検出状況（南東から）
　　SK-07検出状況（北西から）
図版７　SK-08検出状況（東から）
　　SK-09検出状況（北西から）
　　SK-10検出状況（北東から）
　　SK-11検出状況（北東から）
図版８　SK-12検出状況（北東から）
　　SK-13・14・15検出状況（北東から）
　　SK-16検出状況（北東から）
図版９　SK-17断面（南東から）
　　SK-17検出状況（北東から）
　　SK-18検出状況（北東から）
　　SK-19検出状況（北東から）
図版10　SK-20・21検出状況（北東から）
　　SK-22検出状況（南東から）
　　SK-23検出状況（南西から）
図版11　SK-24検出状況（南西から）
　　SK-25検出状況（西から）
　　土器群検出状況（北東から）
　　SD-01検出状況（南西から）
図版12　SD-01完掘状況（南西から）
　　SD-01遺物出土状況（南西から）
　　P-01検出状況（南東から）
図版13　SK-03出土遺物
　　SK-06出土遺物
　　SK-07出土遺物
　　SK-10出土遺物
　　SK-11出土遺物
　　SK-12出土遺物
図版14　SK-12出土遺物
図版15　SK-13出土遺物
　　SK-14出土遺物
　　SK-15出土遺物
　　SK-17出土遺物
　　SK-19出土遺物
図版16　SK-19出土遺物
　　SK-20出土遺物
図版17　SK-21出土遺物
　　SK-22出土遺物
図版18　SK-24出土遺物
　　SK-25出土遺物
　　SD-01出土遺物
　　Ｂ区遺構外出土遺物
　　Ｃ区遺構外出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

山ヶ鼻遺跡は、鳥取市古海、菖蒲、本高に所在する。通称「山ヶ鼻」と呼ばれる丘陵南側に広がる標高７～９ｍの沖積平野に立地する。この地域一帯は天井石に巨石を用い切石の石棺式石室として古くから開口する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)をはじめ、律令体制下では因幡国高草郡に含まれ白鳳時代に菖蒲廃寺が建立、郡衙が置かれていたと推定されるなど歴史ある地域として知られる。この地域では昭和42年に圃場整備事業に伴う菖蒲廃寺の調査、平成２、３年にスポーツ関連施設建設に伴う釣山古墳群の調査、平成４～７年に大井手川改良工事に伴う古海古墳群、菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡の調査が行われている。特に山ヶ鼻遺跡では、縄文時代後期、弥生時代中期～古墳時代、平安時代～中世と各期の遺構や遺物が次々と明らかとなり、墨書土器を含む井戸や大形土坑など数々の調査成果が得られている。

今回の発掘調査の契機となった一般県道高路古海線地方特定道路整備事業は、カーブがきつい上道幅が狭く歩道も未整備であることなどから、道路整備として計画されたものである。工事範囲内の近くの水田で昭和55年に暗渠掘削時に弥生時代中期の土器、石斧、石庖丁が出土しており、山ヶ鼻遺跡の広がりも工事範囲内に及ぶことが予想されることから、鳥取市教育委員会が平成13年12月に試掘調査を実施した。調査の結果、山ヶ鼻橋側の第２トレンチでは弥生時代の土坑やまとまった土器が検出された。鳥取地方県土整備局と鳥取市教育委員会は協議を行い記録保存で対応することとなった。調査は鳥取地方県土整備局の委託を受け、財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが平成15年度に調査対象地内の調査を行った。

第２節　発掘調査の経過

今回の調査地は比較的交通量の多い県道南側沿いの水田部に位置し、最大幅７ｍ余×長さ約190ｍと細長い調査区である。民家への進入路や途中調査区内を横断する農道と用水路の確保、廃土や湧水の処理などを考慮し、分割して調査を行うこととなった。

調査は国道よりの北東側から開始し、それぞれ北東から調査区をＡ区、Ｂ区、Ｃ区と呼称した。民家への進入路以南西は民家や山ヶ鼻橋建設工事の際に撹乱されている可能性が高く、トレンチ(Ｄ区)掘り下げによる確認後判断することになった。

試掘調査の結果から、Ａ区では標高6.4ｍ付近に遺構面が広がる可能性があり、現地表面下30㎝程度の耕作土および床土を重機によって掘り下げ、これより下層については作業員による手掘りで対応することにし、順次Ｂ区、Ｃ区も同様に調査を実施した。また、Ａ～Ｃ区を通じて基準ラインを設定し、10ｍ毎に調査杭(Ａ～Ｎ杭)を設け測量基準とした。こうして12月24日から本格的に調査を開始した。

調査の結果、Ａ区では中世の土師器皿を出土したSD-01以外明確な遺構は検出されず、遺物も古墳時代前期や中期の土器細片がわずかに出土するだけであった。しかしSD-01の東側は元々小高い地形であり削平された痕跡が観察された。その両側は谷状地形になるものと見られ、特にＢ区にかけての南西側では深く落ち込む堆積が確認された。Ｂ区とＣ区はより山ヶ鼻集落に近く南へ張り出す標高30ｍ余りの尾根の流れから地形的に微高地であり土坑など遺構の内包が予想された。実際、Ｂ区南側からＣ区にかけて弥生時代中期の遺物を含む土坑群が検出された。土坑は土器が散在する程度のものから幾重にも重なって出土する土坑もあり、碧玉の玉未製品を出土する土坑がいくつかみられた。Ｄ区については、山ヶ鼻橋の北東10ｍ付近に５×５ｍのトレンチを設定し、重機による掘り下げを行った。その結果、現地表面下1.5～1.9ｍは真砂土を主体とするコンクリート混じりの客土がなされ、Ｃ区でみられた有機物の沈着著しい第16層や基盤層となる第28層緑灰色シルトに対応する層序が確認されたが、遺構、遺物の検出はみられなかった。よってＣ区以南については工事立会で対応することとなった。

こうして平成15年11月から調査準備にかかり、３月下旬で現地調査を終了した。検出した遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、各調査区で全体の遺構検出状況の写真撮影を行った。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、土器については水洗い、バインダー処理の後注記、接合作業を行った。また、平成16年４月より順次報告書作成作業にかかり、平成16年７月末に終了した。

第３節　調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成15年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理　事　長　石　谷　雅　文(鳥取市副市長)
副理事長　中　川　俊　隆(鳥取市教育長)
三　田　三香子
常務理事　小　谷　荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会　事務局庶務課文化財室
事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所　　長　前　田　　均
調査事務　秋　田　澄　世
白　岩　千　足
調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調　査　員　谷　口　恭　子
調査補助員　木　原　美　和
下　多　みゆき
濱　橋　博　子

平成16年度

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理　事　長　石　谷　雅　文(鳥取市副市長)
副理事長　中　川　俊　隆(鳥取市教育長)
三　田　三香子
常務理事　小　谷　荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会　事務局庶務課文化財室
事務局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
所　　長　前　田　　均
調査事務　秋　田　澄　世
白　岩　千　足
調査担当　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター
調　査　員　谷　口　恭　子
藤　本　隆　之
調査補助員　永田　りん太郎
杉　本　利　子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．山ヶ鼻遺跡の位置

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。地域の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には入り組んだ内湾状を呈していたと見られ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

山ヶ鼻遺跡は、JR鳥取駅の西南西約2.2㎞、千代川左岸の鳥取市古海、菖蒲、本高地内に所在する。周辺は千代川によって形成された味野地区から続く沖積平野と東郷谷から広がる平野とがぶつかり合う標高7.6～8.6m前後の沖積中位面に立地する。遺跡の中央部には南から北へ大井手川が流れ、南側には標高105mの釣山、北には通称「山ヶ鼻」と呼ばれる丘陵がある。また、現在、東郷谷を下る有富川は釣山の南を通り菖蒲村の北で千代川に合流しているが、以前は山ヶ鼻丘陵の南を流れていたとみられ、平成６年度の調査で旧河川が検出されている。上流からの堆積物で堰き止められ、流路を変えたものとみられている。また、平成７年度に遺跡中央部で岩盤が検出され、山ヶ鼻と釣山の中間部やや北側に孤島状に微高地が展開していたとみられる。このように現在では圃場整備され比較的なだらかな水田面が広がるものの古くは河川の氾濫を受けるなどして時代ごとで現在とはやや異なった微地形が展開していたものと想像される。

遺跡の周辺は元々はのどかな田園地帯であるが、1985年(昭和60年)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線南バイパス)遺跡の東側および菖蒲と服部集落間を通って南吉成が開通し、その沿線に店舗や各種事業所が、釣山の西側には東郷工業団地が進出するなど、開発の著しい地帯となっている。

２．遺跡の歴史的環境

【縄文時代】　鳥取平野周辺で最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代早期の遺跡として、平成14年、中国山地山間部に位置する智頭町智頭枕田遺跡が挙げられる。早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内６棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落として注目されている。鳥取平野周辺では、同年、鳥取市域の西端、白兎海岸から１㎞内陸の内海中所在遺跡で前期中頃磯ノ森式土器が後期の土器とともに採集されている他、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上の立地する美和古墳群下層遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡から微量ながら出土している。中期の遺跡としては断片的ながら砂丘地に立地する栃木山、追後、天神山遺跡が挙げられる。この他、砂丘後背地の低湿地に立地しそれぞれ前期、中期から始まる福部村栗谷遺跡、同村直遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡、布勢第１遺跡、湖山池に浮かぶ青島遺跡が後期を中心とする縄文遺跡として有名である。桂見遺跡ではこれまで数度に渡る調査で、平成６、７年度に相次いで全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。布勢第１遺跡では木組みをもった水路、漆塗りの木製広口壺・腕輪が出土し、高度な技術が示されている。この他に千代川左岸では、岩本第２、帆城、湖山第２、岩吉、大桷、里仁(仮称)遺跡などで少量の土器片が出土している。

山ヶ鼻遺跡周辺地域では、山ヶ鼻遺跡で山ヶ鼻丘陵と釣山の中間地点にあたる微高地から二次堆積ながら後期中葉から晩期前葉に比定される土器群が、山ヶ鼻丘陵の約20～30m付近で僅かながら突帯文土器が、千代川自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が、釣山南の有富川対岸山裾

に立地する本高円ノ前遺跡でも少量ながら突帯文土器が、山ヶ鼻遺跡から２km余り南の横枕低丘陵から落とし穴と推定される土坑群とわずかに後期の土器が検出されている。なお、古海遺跡や布勢第１遺跡では後期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移しており、弥生時代を迎えるにあたり遺跡は自然堤防上、平野中心部の微高地へと進出する傾向が窺える。

【弥生時代】　弥生集落の状況は、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるようで前期の遺物を断片的に出土し中期へ継続しない傾向がみられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では現在のところ県東部で最も古い要素をもつ弥生土器が出土しており、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。千代川平野の自然堤防上の砂洲を中心とした微高地に立地する。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里遺跡などがあり、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられる。中期後葉になると段丘状の微高地に進出する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第２、布勢第２、大桷、北村恵犠谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ遺跡数は飛躍的に増加しそれぞれ古墳時代へと営まれていく。また、近年の古墳に伴う調査から、丘陵上においても弥生遺跡の調査例が知られてきており、横枕集落背後丘陵の標高100m付近で弥生中期後半の土器、下味野丘陵の標高75m付近で弥生中・後期の遺物、同じく標高40～50mで弥生中期中葉～後葉の竪穴住居数棟、釣山の標高32m付近でも弥生竪穴住居１棟を検出している。山ヶ鼻丘陵の標高30m付近でも弥生時代中期後半の竪穴住居、貯蔵穴が検出されている。山ヶ鼻遺跡では前期から中期前葉までの遺物や遺構は確認されておらず、中期中葉になり突如土坑や溝状遺構が検出され盛期を迎える。隣接する菖蒲遺跡でも中期後葉が初源であり、縄文土器が出土した微高地一帯が平野での遺跡の中心部と考えられる。また、丘陵裾部の調査例として、山ヶ鼻遺跡の西400mの山裾に展開する北村恵儀谷遺跡では後期を主体とする竪穴住居や掘立柱建物などが、本高円ノ前遺跡では中期後葉の土坑、溝状遺構が検出されている。

弥生時代の墳墓については、山ヶ鼻遺跡の周辺では中期の土壙墓が下味野丘陵で、後期初めの甕棺が釣山で検出されているがこの時期については不透明な部分が多い。後期中葉になり、湖山池南東岸地域で布勢鶴指奥１号墳丘墓、西桂見墳丘墓、桂見墳丘墓など累々と墳丘墓が、千代川左岸では後期前葉に滝山猿懸平２号墳、中葉に紙子谷門上谷１・２号墓が造営される。この周辺では服部墳墓群で後期後半の墳墓３基が検出されている。弥生時代の墳墓について調査事例は徐々に増加しつつある。

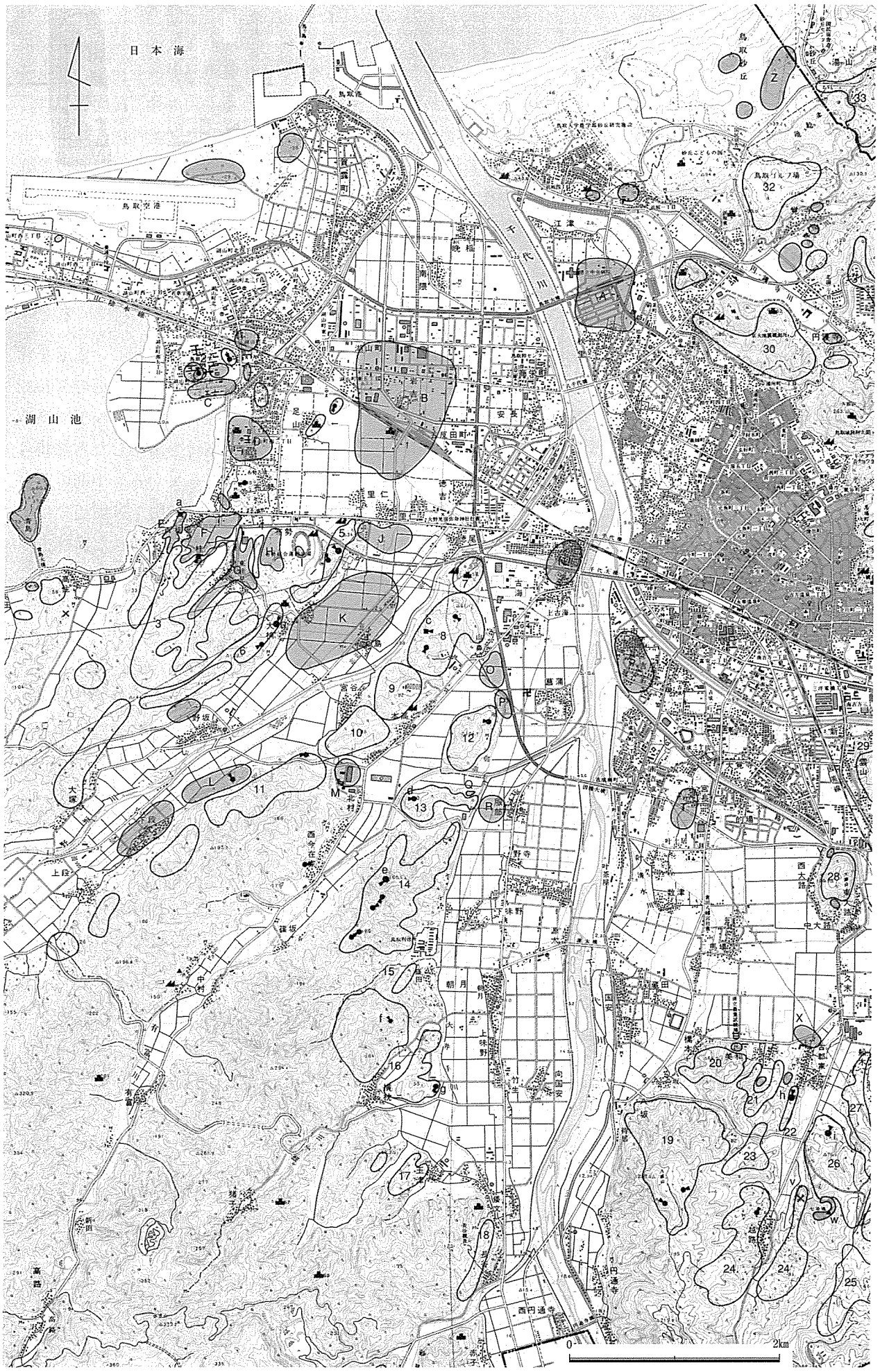
【古墳時代】　古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、丘陵裾の現集落と重なり営まれたと推察されている。弥生時代から続く布勢第２、桂見、帆城、湖山第１、湖山第２、天神山遺跡などがあ

―第１図　遺跡名称―

1．大熊段古墳群
2．三浦古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢鶴指奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．桷間古墳群
7．徳尾古墳群
8．古海古墳群
9．本高古墳群
10．宮谷古墳群
11．小森山古墳群
12．釣山古墳群
13．服部墳墓群
14．下味野古墳群
15．篠田古墳群
16．横枕古墳群
17．玉津古墳群
18．長谷古墳群
19．八坂古墳群
20．橋本古墳群
21．美和古墳群
22．古郡家古墳群
23．園原古墳群
24．越路古墳群
25．空山古墳群
26．六部山古墳群
27．船木古墳群
28．大路山古墳群
29．面影山古墳群
30．雁金山古墳群
31．円護寺古墳群
32．開地谷古墳群
33．湯山古墳群

A．秋里遺跡
B．岩吉遺跡
C．湖山第２遺跡
D．天神山遺跡
E．西桂見遺跡
F．桂見遺跡
G．東桂見遺跡
H．布勢第１遺跡
I．布勢第２遺跡
J．里仁遺跡
K．大桷遺跡
L．小森山遺跡
M．北村恵儀谷遺跡
N．古海遺跡
O．山ヶ鼻遺跡
P．菖蒲遺跡
Q．本高円ノ前遺跡
R．服部遺跡
S．古市遺跡
T．宮長竹ヶ鼻遺跡
U．橋本遺跡
V．越路銅鐸出土地
W．七谷須恵器窯跡群
X．古郡家・大路川遺跡
Y．西大路土居遺跡
Z．追後遺跡
a．西桂見墳丘墓
b．桷間１号墳
c．古海35号墳
d．服部23号墳
e．下味野23号墳
f．横枕55号墳
g．横枕13号墳
h．古郡家１号墳
i．六部山３号墳

―凡例―
集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡



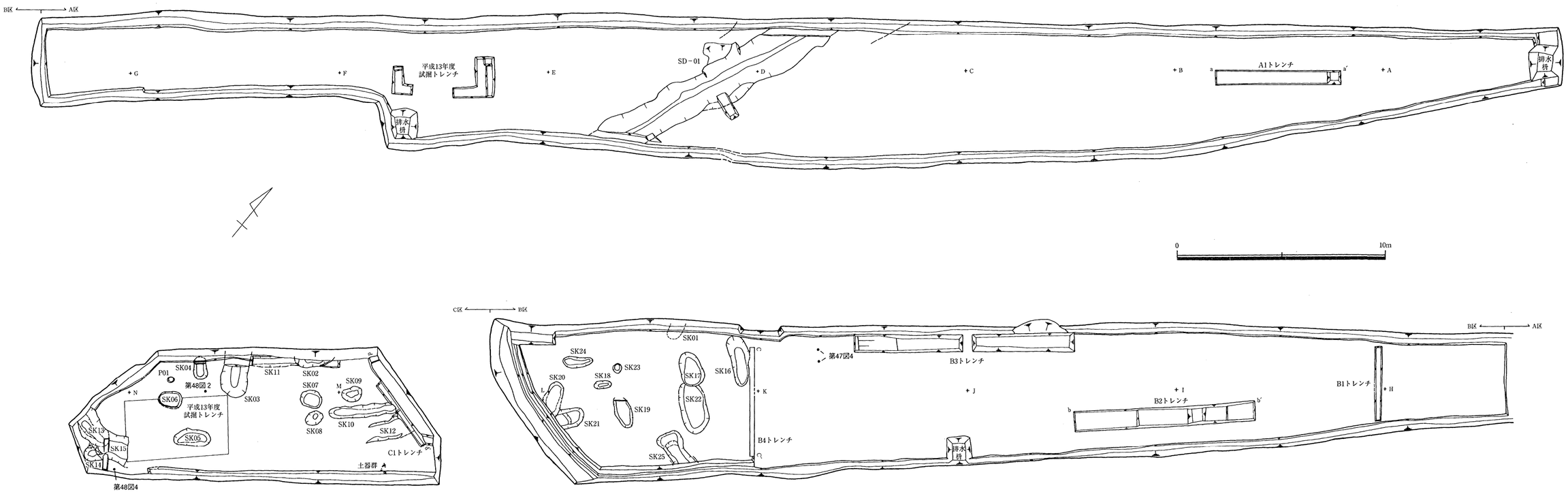
第１図　山ヶ鼻遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

る。いずれも大集落といかず微高地に住居が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。山ヶ鼻遺跡周辺では、岩吉、菖蒲、大桷遺跡などがある。菖蒲遺跡では釣山裾部の標高7.6mで前期の焼失住居が、対岸の古市遺跡で自然堤防上の標高５mに前期とみられる竪穴住居が検出されている。しかし菖蒲、服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中・後期に比定される遺構は７世紀に入るまで見られなくなるようである。この時期の特徴的な遺跡として秋里、塞ノ谷遺跡をあげることができる。前者が古墳時代を中心として祭祀色が強く、特に多量の土師器、各種模造土・石製品を出土する土器溜状土坑が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開し、分銅形土製品、舟、刀など各種木製模造品が注目される。

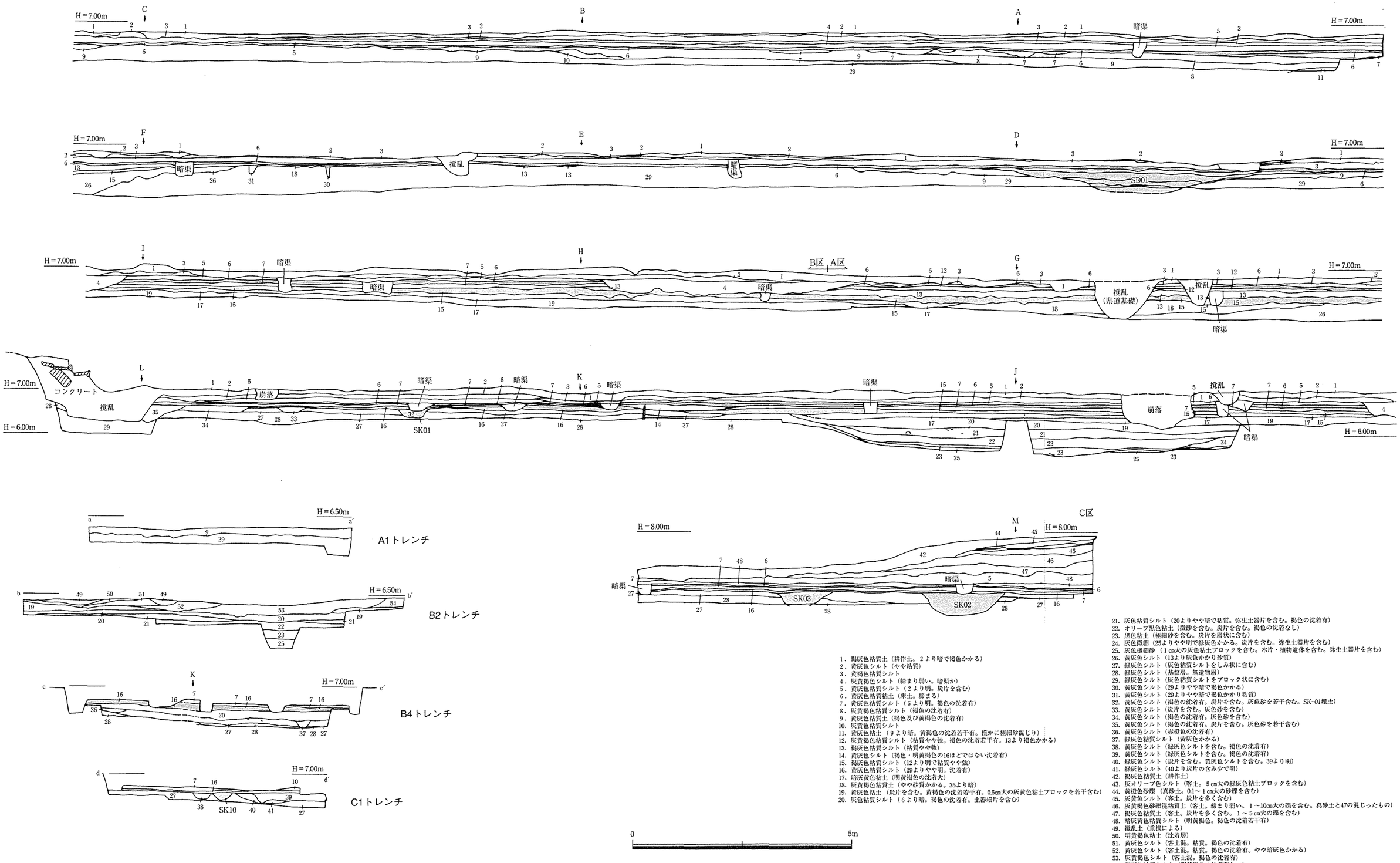
平野縁辺の丘陵上には、当初弥生時代の系譜を引く方(形)墳が営まれ、小地域単位で新しい要素を導入し展開していった様相が窺える。現在のところ、湖山池南東岸の桂見２号墳、鳥取平野南部の美和32号墳が当期の首長墓とみられる。畿内影響下の前方後円墳・六部山３号墳(全長63m)が前期後半の築造とされ、古郡家１号墳(全長90m)がその系譜を引く。山ヶ鼻遺跡の周辺では、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海、徳尾、釣山、服部、横枕、下味野古墳群などで前期古墳が調査されている。中期の前方後円墳は里仁29号墳(全長59m)、桷間１号墳(全長92m)が丘陵を隔てて展開するが、山ヶ鼻周辺では後期前半の釣山２号墳(全長26m)や未調査の服部23号墳(全長23m)が分布する。近年調査された横枕古墳群、倭文古墳群周辺では横枕13号墳(全長70m)の存在を絡め、湖山池南東岸地域や鳥取平野南部地域に匹敵するような地域勢力の存在が指摘されている。山ヶ鼻周辺はちょうどこれらの緩衝地域にあたるが、この地域での古墳の様相は必ずしも明らかとは言えず、今後に残した課題である。ただ、因幡地域唯一の前方後方墳である古海36号墳(全長67m)、７世紀中頃の築造とされ巨石を刳り抜いた石棺式石室をもつ山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は７世紀後半の創建とされる菖蒲廃寺へ繋がり、貴重な存在である。

【歴史時代】　７世紀に入ってからこの地域は、白鳳時代の創建とされる菖蒲廃寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衙、郡家の推定地でもあり、律令期に入り鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では菖蒲廃寺と時期の重なる７世紀の掘立柱建物や土坑などが検出されている。千代川対岸の古市遺跡では７世紀後半から平安時代の掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝７年(755)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山裾に８世紀大の総柱建物が検出されている。高庭庄の経営はうまくいかず、10世紀後半には完全に没落し、長保６年(1004)を最後に史料に見られなくなる。この間、山ヶ鼻遺跡では９世紀の牛骨や斎串、墨書土器が出土した井戸や９～13世紀にいたる多量の土器を出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では「草路」と記された墨書土器が出土している。また、岩吉遺跡では８～10世紀にかけて溜状遺構や自然流路から567点にも及ぶ墨書土器、人形、木簡などが出土している。また、山ヶ鼻遺跡で輸入陶磁器が、菖蒲遺跡で中世京都、近江産の緑釉陶器片とともに白磁、青磁片が多数出土しており、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

引用・参考文献
鳥取市『新修鳥取市史　第１巻古代・中世篇』1983年
平凡社『日本歴史地名大系第32巻　鳥取県の地名』1992年
㈶鳥取市教育福祉振興会『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』1996年
㈶鳥取市文化財団『服部墳墓群』2001年
㈶鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003年



第２図　山ヶ鼻遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ調査区全体図（Ｓ＝１：150）



1．褐灰色粘質土（耕作土。2より暗で褐色かかる）
2．黄灰色シルト（やや粘質）
3．黄褐色粘質シルト
4．灰黄褐色シルト（締まり弱い。暗渠か）
5．黄灰色粘質シルト（2より明。炭片を含む）
6．黄灰色粘質粘土（床土。締まる）
7．黄灰色粘質シルト（5より明。褐色の沈着有）
8．灰黄褐色粘質シルト（褐色の沈着有）
9．黄灰色粘質土（褐色及び黄褐色の沈着有）
10．灰黄色粘質シルト
11．黄灰色粘土（9より暗。黄褐色の沈着若干有。僅かに極細砂混じり）
12．灰黄褐色粘質シルト（粘質やや強。褐色の沈着若干有。13より褐色かかる）
13．褐灰色粘質シルト（粘質やや強）
14．黄灰色シルト（褐色・明黄褐色の16ほどではない沈着有）
15．褐灰色粘質シルト（12より明で粘質やや強）
16．黄灰色粘質シルト（29よりやや明。沈着有）
17．暗灰黄色粘土（明黄褐色の沈着大）
18．灰黄褐色粘質土（やや砂質かかる。26より暗）
19．黄灰色粘土（炭片を含む。黄褐色の沈着若干有。0.5cm大の灰黄色粘土ブロックを若干含む）
20．灰色粘質シルト（6より暗。褐色の沈着有。土器細片を含む）
21．灰色粘質シルト（20よりやや暗で粘質。弥生土器片を含む。褐色の沈着有）
22．オリーブ黒色粘土（微砂を含む。炭片を含む。褐色の沈着なし）
23．黒色粘土（極細砂を含む。炭片を層状に含む）
24．灰色微細（25よりやや明で緑灰色かかる。炭片を含む。弥生土器片を含む）
25．灰色極細砂（1cm大の灰色粘土ブロックを含む。木片・植物遺体を含む。弥生土器片を含む）
26．黄灰色シルト（13より灰色かかり砂質）
27．緑灰色シルト（灰色粘質シルトをしみ状に含む）
28．緑灰色シルト（基盤層。無遺物層）
29．緑灰色シルト（灰色粘質シルトをブロック状に含む）
30．黄灰色シルト（29よりやや暗で褐色かかる）
31．黄灰色シルト（29よりやや暗で褐色かかり粘質）
32．黄灰色シルト（褐色の沈着有。炭片を含む。灰色砂を若干含む。SK-01埋土）
33．黄灰色シルト（炭片を含む。灰色砂を含む）
34．黄灰色シルト（褐色の沈着有。灰色砂を含む）
35．黄灰色シルト（褐色の沈着有。炭片を含む。灰色砂を若干含む）
36．黄灰色シルト（赤橙色の沈着有）
37．緑灰色粘質シルト（黄灰色かかる）
38．黄灰色シルト（緑灰色シルトを含む。褐色の沈着有）
39．黄灰色シルト（緑灰色シルトを含む。褐色の沈着有）
40．緑灰色シルト（炭片を含む。黄灰色シルトを含む。39より明）
41．緑灰色シルト（40より炭片の含み少で明）
42．褐灰色粘質土（耕作土）
43．灰オリーブ色シルト（客土。5cm大の緑灰色粘土ブロックを含む）
44．黄橙色砂礫（真砂土。0.1～1cm大の砂礫を含む）
45．灰黄色シルト（客土。炭片を多く含む）
46．灰黄褐色砂礫混粘質土（客土。締まり弱い。1～10cm大の礫を含む。真砂土と47の混じったもの）
47．褐灰色粘質土（客土。炭片を多く含む。1～5cm大の礫を含む）
48．暗灰黄色粘質シルト（明黄褐色。褐色の沈着若干有）
49．撹乱土（重機による）
50．明黄褐色粘土（沈着層）
51．黄灰色シルト（客土混。粘質。褐色の沈着有）
52．黄灰色シルト（客土混。粘質。褐色の沈着有。やや暗灰色かかる）
53．灰黄褐色シルト（客土混。褐色の沈着有）
54．褐灰色粘質シルト（明黄褐色の沈着著しい）

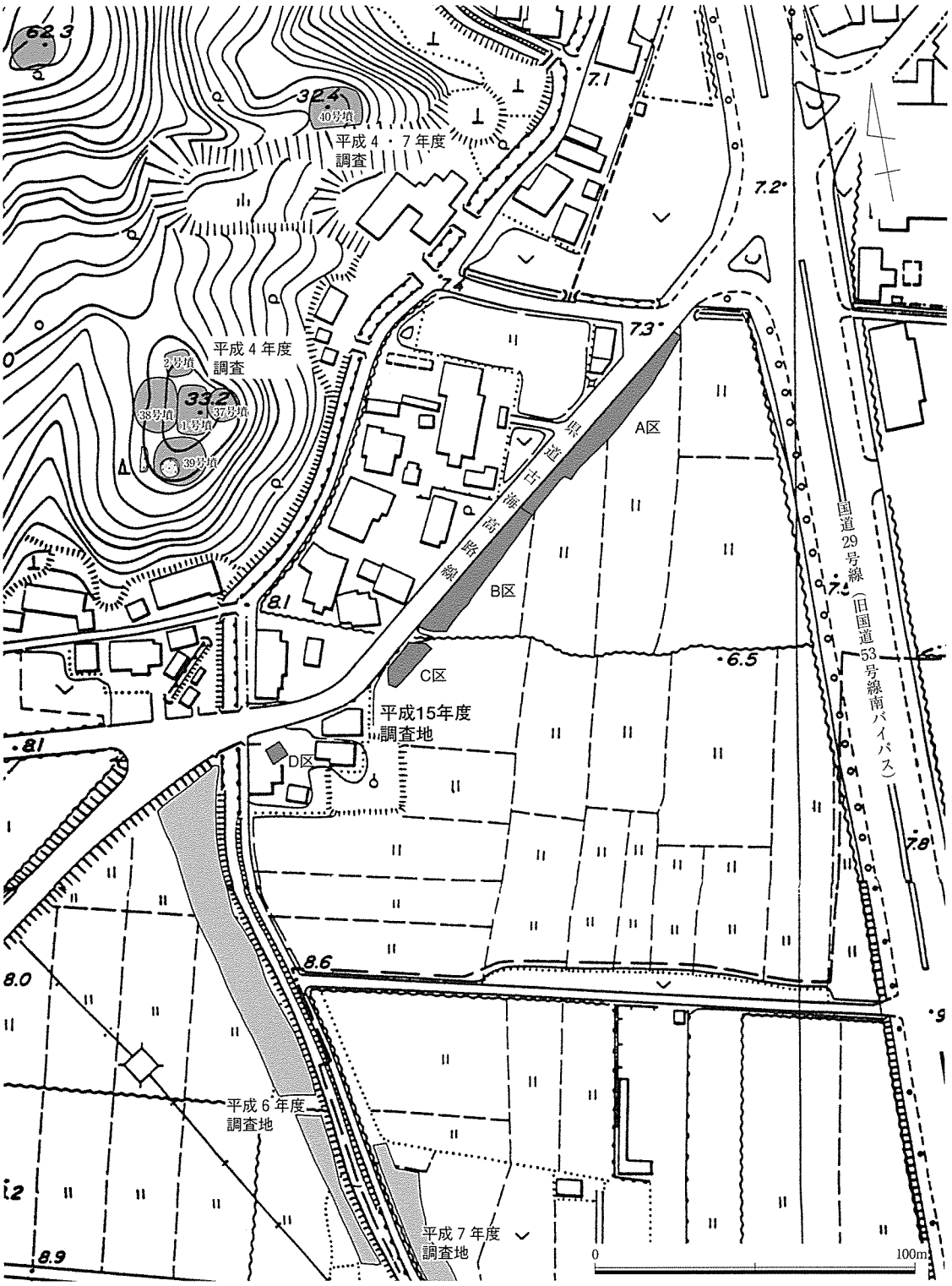
0　5m

第3図　調査区断面実測図（S＝1：80）

第３章　調査の結果

第１節　調査区の立地と層序（第２～４図、図版３・４）

山ヶ鼻遺跡は、釣山と山ヶ鼻丘陵間の平野、標高6.8～7.5m前後に広がる遺跡で、この平野は千代川によって形成された沖積中位面にあたる。平野中央部を江戸時代初期に開削された灌漑用水「大井手川」が北上し、山ヶ鼻丘陵から丘陵東裾を通り徳尾、里仁へと続く。今回の調査地は山ヶ鼻遺跡の北東地域にあたり、山ヶ鼻丘陵裾に広がる現集落の県道古海高路線を境えた南東側に位置する。一帯は圃場整備



第４図　山ヶ鼻遺跡調査地位置図（Ｓ＝１：2,000）

された水田が広がり、調査前の標高6.8～7.2mを測る。南西側は丘陵から延びる微高地が張り出して地盤が高く、北東方向の国道29号線交差点側へ徐々に下がっていく状況が認められる。

調査地は幅７m弱で北東―南西方向に細長く、廃土処理等の問題から分割して調査を行うため、各調査区のほぼ中央部を通る基準ラインを設定し、10m毎のＡ～Ｎ杭とラインと直交する調査杭を設けた。調査地の層序は、調査区の北西壁面で行い、適宜基準ラインに沿ったトレンチを設け観察を行った。

調査地の基本層序は、①第１層耕作土、②第６層床土、③第７層黄灰色粘質シルト、④第15層灰黄褐色粘質シルトおよび第16層黄灰色粘質シルト、⑤第20層灰色粘質シルト、⑥第27層緑灰色シルト(灰色粘質シルトをしみ状に含む)、⑦第28層緑灰色シルトである。耕作土は複数に分層でき、それに伴う暗渠も断面から二時期があり、用材も竹や広葉樹、瓦、川原石など様々な種類が認められた。調査区のほぼ全面で②第６層のオレンジかかった黄灰色の床土が広がり、それを除去すると③第７層黄灰色粘質シルトが広がり、遺構面といった状況である。遺構は床土下の第９層上面で中世の溝状遺構が、第27層上面で弥生時代中期の土坑群を検出している。ただ、床土およびその下層では羽釜や土鍋、管状土錘、底部糸切り須恵器片や土師器片が出土しており、第14層中には６世紀中葉の須恵器、土師器片を含む。また、細長い調査区中には谷状となる部分が認められ、Ｆ杭～Ｊ・Ｋ杭中間の区間は谷状に深く落ち込む区間であることが判明した。逆にSD-01東側のＣ杭周辺は床土下は緑灰色シルトのしっかりした地盤が広がっており、この一帯の上面は削平されたとみられる。

また、基盤層となる緑灰色シルトは南西側ほど緑かかり、北東側へ行くほど灰色かかる傾向が観察される。おそらくこの緑灰色シルト層が平成７年度調査区全体で検出された基盤層黄褐色シルトに対応するものとみられる。

第２節　調査の結果

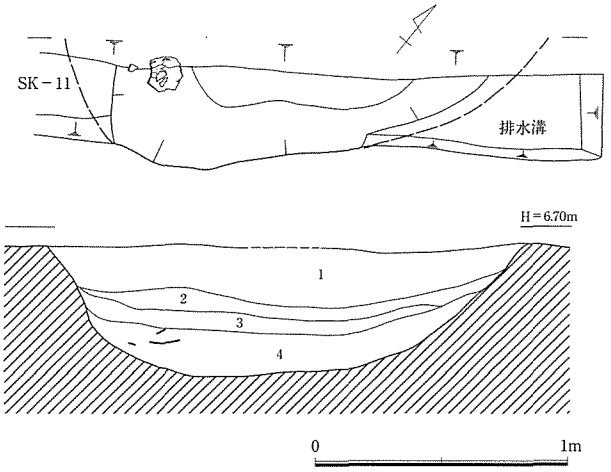
１．土　　坑

SK-01(第３・４図、図版５)

Ｂ区南西寄り、第16層下の第27層上面、標高6.55mで検出した。排水溝に掘削され、調査区壁面の土層断面で確認した。南西80cmにSK-17が位置する。遺構の北西部は調査区外であり、平面形や規模は不明である。遺存幅70cmを測る。現況では南北やや西寄り方向に軸を振る。断面は椀状である。検出面からの深さ20cm、底面は標高6.37mを測る。埋土は黄灰色シルト１層である。遺物はわずかに土器底部細片２点が出土している。

SK-02(第３～５図、図版５)

Ｃ区北西壁面沿い、第16層下の第27層上面、標高6.61mで検出した。南西側でSK-11を切る。遺構の大半は北西調査区外へ延び、平面形や規模、主軸など不明である。断面は椀状である。検出面からの深さ51cm、底面は標高6.10mを測る。埋土は４層に分かれ、第３層は炭化層で炭片を多く含む黒褐色シルトである。遺物は第５図中の胴部片以外にも壁面の崩落土中から出土している。



1．黄灰色シルト（褐色の沈着有。炭片を含む。灰色シルトを含む）
2．黄灰色シルト（１より暗。炭片を１より多く含む）
3．黒褐色シルト（炭片を多く含む）
4．黄灰色シルト（炭片を含む。緑灰色シルトブロックを含む）

第５図　SK-02実測図

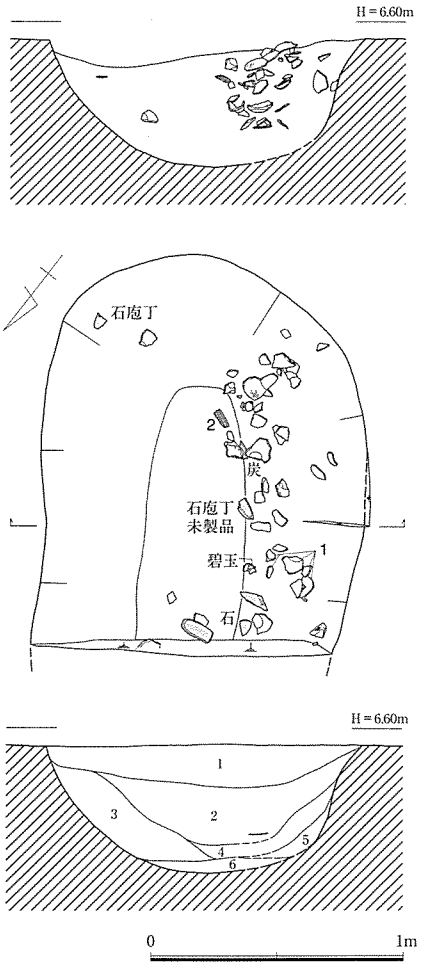
SK-03(第３・４・６・７図、図版５・13)

Ｃ区北西壁面沿い、第16層下の第27層上面、標高6.53mで検出した。調査区北西壁面から、本来遺構の上面は6.63mまで上がる。北東側でSK-11を切る。遺構の北西側は調査区外へ延びるが、遺存する南西側より壁面での底面が上がってきていることから調査区外へはさほど大きくは延びないと考えられる。遺存状況から、平面形は長楕円形で、遺存長1.76m、幅1.29mを測る。主軸はN-35°-Wを振る。断面はやや不整な椀状である。検出面からの深さ52cm、底面は標高6.02mを測る。埋土は６層に分かれ、第２層黄灰色シルトは炭片を多く含み、遺物の多くはこの層中の出土である。

遺物は西壁寄りに集中し、54×34×20cmの容量をもつコンテナ約半箱分の土器の他、黒色千枚岩の石庖丁片、石庖丁未製品片各１点、碧玉材１点、川原石が出土している。石庖丁未製品は中央部で割れているが形状はほぼ石庖丁形に成形されており、研磨を施す以前の段階のものである。碧玉材は岩肌を残す荒割り段階のもので擦切溝は見られない。土器には甕、底部、高杯片がある。このうち図化した甕(1)は口縁端部は上方へ摘みやや受口状の丸味をもつ。端面は後にヨコナデされたのか浅い凹線状の凹みをもつ。肩部には縦ハケ目以前の横位の叩き目が明瞭に観察される。高杯(2)は肥厚してほぼ水平面をもつ口縁部外面に独立した３条の凹線を確認する。全体に風化がすすむが内面にヘラ磨き痕が観察される。

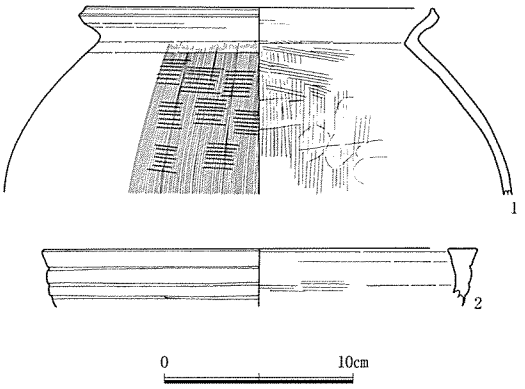
SK-04(第３・４・８図、図版５)

Ｃ区北西壁面沿い、第27層上面の標高6.51mで検出した。北西側を排水溝で掘削したが壁面に遺構を観察せず、排水溝内で終結する。60cm東にSK-03が配置する。平面は長楕円形を呈し、遺存長85cm、幅

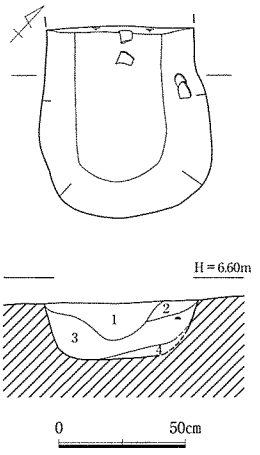


1．黄灰色シルト（炭片を僅かに含む）
2．黄灰色シルト（１より暗。炭片を多く含む）
3．黄灰色シルト（緑灰色シルトをブロック状に含む）
4．灰色シルト（３に似る。炭片を含む。緑灰色シルトを含む）
5．灰色シルト（炭片の含みなし。緑灰色かかる）
6．緑灰色粘質シルト（炭片の含みなし）

第６図　SK-03実測図



第７図　SK-03出土遺物実測図



1．黄灰色シルト（明黄褐色の沈着若干有。炭片を僅かに含む）
2．黄灰色シルト（１より暗。炭片を含む）
3．黄灰色シルト（２より暗。炭片を１、２より多く含む。緑灰色シルトを含む）
4．緑灰色シルト（炭片を含む。黄灰色シルトを含む）

第８図　SK-04実測図

68cmを測る。主軸はN-43°-Wを振る。断面は椀形である。検出面からの深さ22cm、底面は標高6.29mを測る。埋土は4層に分かれる。

遺物は第3層を中心として出土しており、甕、底部片、石鏃基部片1点が出土している。石鏃は幅2.1cm、基部は緩やかな凹状を呈し周縁は両面加工される。

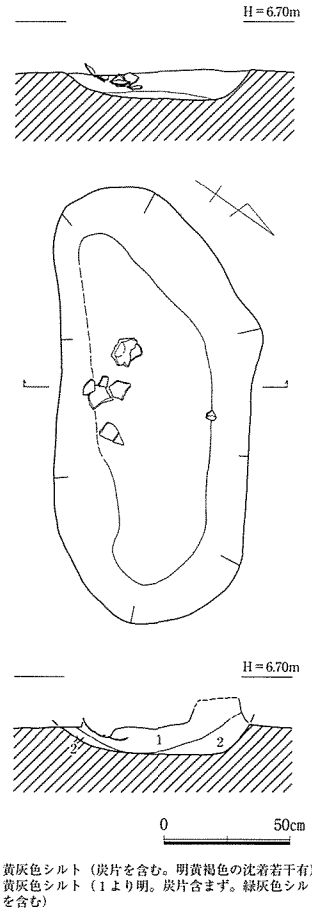
SK-05(第3・9図、図版6)

C区南東寄り、第27層上面の標高6.62mで検出した。平成13年度試掘トレンチの浅掘部分にあたる。1m西にSK-06が配置する。平面は不整な長楕円形を呈し、長さ1.74m、幅76mを測る。主軸はN-54°-Eを振る。断面は不整な椀状である。検出面からの深さ22cm、底面は標高6.39mを測る。埋土は黄灰色シルトで2層に分かれ、第1層に炭片を含む。

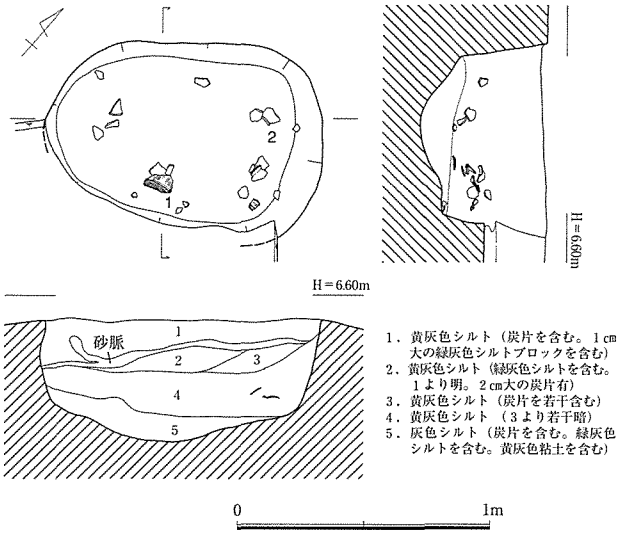
遺物は第1層中の南東壁面寄りから出土しており、甕、底部、紡錘車片1点が見られる。このうち図化していないものの、甕は上方へ摘みわずかな端面をもつ口縁部を含むが、凹線を施すほどの肥厚は見られずすべて凹線はみられない。紡錘車は体部片の転用で径4.9cmを測り、中央に径0.5cmの円孔が両面穿孔される。

SK-06(第3・10・11図、図版6・13)

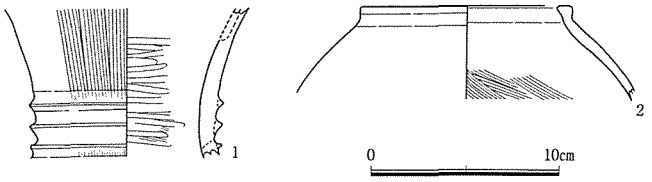
C区西寄り、第27層ほぼ上面の標高6.51mで検出した。平成13年度試掘トレンチの北西壁面で確認されていた土坑である。よって南壁側はトレンチで掘削される。北西40cm余りにP-01、北1mにSK-04、東1mにSK-05が配置する。平面はやや歪な楕円形を呈し、長さ1.11m、遺存幅74cmを測るが、現況から幅81cmが復元される。主軸はN-58°-Eを振る。断面は中央部が凹む不整な椀状で、壁面の立ち上がりは比較的急傾斜となる。検出面からの深さ49cm、底面は標高6.02mを測る。埋土は黄灰色シルトと灰色シルトの5層に分かれ、第4層に遺物が集中する。また、第1層、第2・3層間を砂脈がはしる。平



第9図　SK-05実測図



第10図　SK-06実測図



第11図　SK-06出土遺物実測図

成７年度の調査区でも同様に墳砂、砂脈が検出されており、今回、以前の調査ほど顕著なものはSK-06周辺においても検出されなかった。

遺物は第４層中心に土坑全体に土器が散らばるように出土しており、壺、甕、高杯脚部片、底部片が見られる。広口壺(1)は頸部に縦ハケ目調整後断面三角形の貼付突帯３条を施す。無頸壺(2)は(1)が乳褐色で焼成良好なのに対し赤褐色で焼成甘く剥落がすすむ。口縁両端部は内外から摘んで水平面を成す。内面にハケ目が観察される。図化していないが甕は口縁部しっかりした端面を持ち、わずかに凹線が観察されるものが確認された。

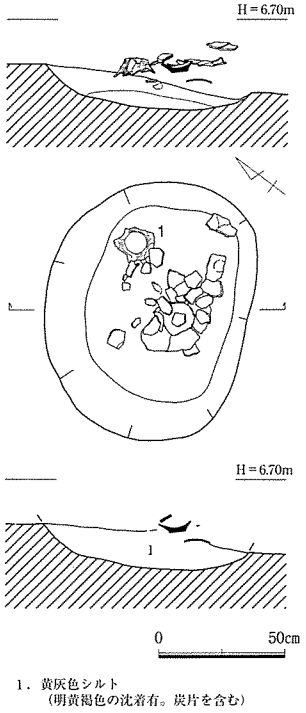
SK-07(第３・12・13図、図版６・13)

Ｃ区中央やや北寄り、第27層ほぼ上面の標高6.55mで検出した。南東隣にSK-08が、東50cmにSK-10が、北東１mにSK-09が配置する。平面はやや不整な楕円形を呈し、長さ1.04m、幅80cmを測る。主軸はN-66°-Eを振る。断面は皿状で、検出面からの深さ22cmを測るが遺物の出土状況などから本来深さはもう10数cm程度はあったと思われる。底面は標高6.34mである。埋土は黄灰色シルト１層である。

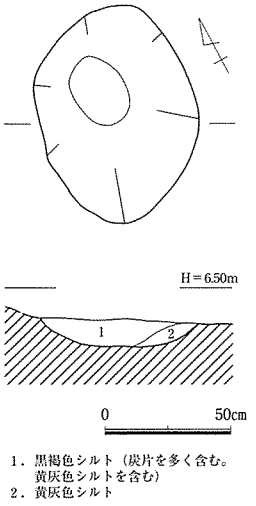
遺物は遺構底面に貼り付くものはなく、中央部に内面を上に向けた状態の底部が、その北側に外面を上に向けた底部(1)が出土している。この二つの底部は外縁部が打ち欠かれたような状態で表面が薄く剥離しており、二次焼成を受けたと考えられる。遺物は54×34×20cmの容量をもつコンテナ約３分の１箱分に相当する土器が出土しており、広口壺片、甕片、底部、石鏃１点がある。底部は底径５cm程度の甕底部も数種みられる。広口壺は頸部に指頭圧痕貼付突帯２条を施し、口縁端面に斜格子文がめぐる。わずかにみられる甕口縁部は拡張して平坦な端面をもち薄っすら凹線が認められる。底部(1)は外面丁寧なヘラ磨き、底面剥落不明。内面丁寧なナデ。石鏃(2)は長さ2.26cm、幅1.9cmを測り、無茎鏃で基部はほぼ直線的、全体的に雑な作りである。

SK-08(第３・14図、図版７)

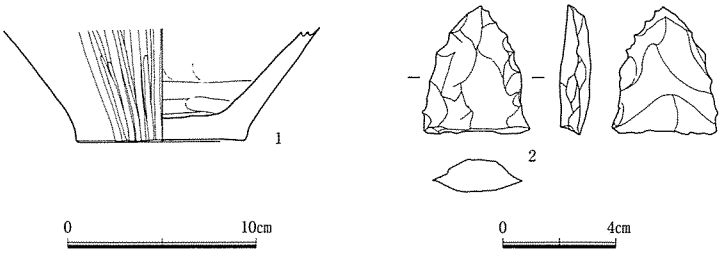
Ｃ区中央やや北東寄り、第27層中の標高6.38mで検出した。北西隣にSK-07が、北東30cmにSK-10が配置する。平面はやや角張った不整楕円形を呈し、長さ75cm、幅65cmを測る。主軸はN-４°-Wを振る。断面は皿状で、検出面からの深さ現況で11cmを測るが検出時の状況から本来深さはもう少しあったとみられる。底面は標高6.27mである。埋土は砂質の強い黄灰色シルト２層に分かれ、第１層は炭片を多く含み黒褐色となる。遺物は出土しなかった。



第12図　SK-07実測図



第14図　SK-08実測図



第13図　SK-07出土遺物実測図

SK-09(第３・19図、図版７)

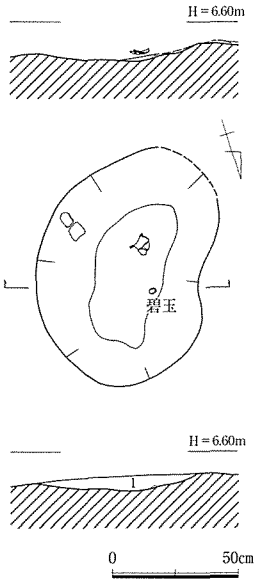
Ｃ区北寄りでＭ杭の東に位置する。第27層中の標高6.51mで検出した。南東隣にSK-10が、南１m程にSK-07、08が配置する。平面は不整な楕円形を呈し、長さ97cm、幅66cmを測る。主軸はN-32°-Eを振る。断面は皿状で、検出面からの深さ現況で６cmを測るが検出時の状況から本来深さはもう少しあったとみられる。底面は標高6.44mである。埋土は黄灰色シルト１層である。

遺物はわずかに甕口縁部片と碧玉玉材１点が出土している。甕は口縁端部は僅かに肥厚して丸味のある端面に薄い凹線が認められる。碧玉玉材は底面で出土しており擦面３面と擦切溝３が観察される。

SK-10(第３・４・16・17図、図版７・13)

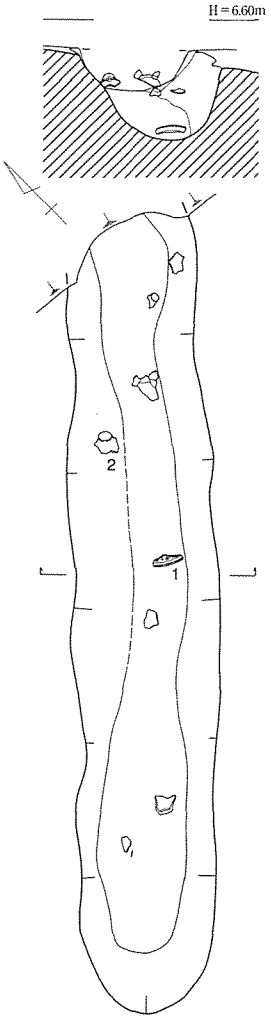
Ｃ区北東端、第16層下の第27層上面、標高6.57mで検出した。Ｃ１トレンチの北壁断面で観察され、南西側より底面の高さが上がってきている状況からそう大きく北東へは延びないものとみられる。西隣にSK-09が、東隣にSK-12が、南西隣にSK-07、08が配置する。平面は溝状を呈し、遺存長3.40m、幅59cmを測る。主軸はN-43°-Eを振る。断面は椀状で、検出面からの深さは現況で32cmを測るがＣ１トレンチの北壁断面を参考とすると本来40cm弱あったと考えられる。底面は標高6.11mである。埋土は４層に分かれ、第２、４層が黒っぽく最下層の第４層は炭片を含む。

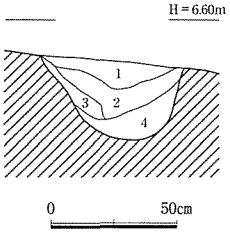
遺物は第２、４層を中心に土坑内に分散して出土する状況がみられ、甕で構成される。図化した甕(1)は肩部が張らず口縁部は屈曲して端部は肥厚してやや丸味をもつ端面をもつが凹線は施されない。これ以外にみられる甕口縁部は同様肩部は張らないが端部は肥厚せず丸くおさめる。底部(2)は底部下位から反り上がる形態で、ヘラ磨きによる調整が弱く、外面は縦ハケ目後やや幅広のヘラ磨きが施されるがハケ目が残る。底面ナデ調整。内面は丁寧なナデ仕上げである。紡錘車(3)は体部片の転用で長径3.82m、不整な楕円形を呈する。中央に径約４mmの円孔を両面穿孔する。



1．黄灰色シルト（緑灰色かかる）

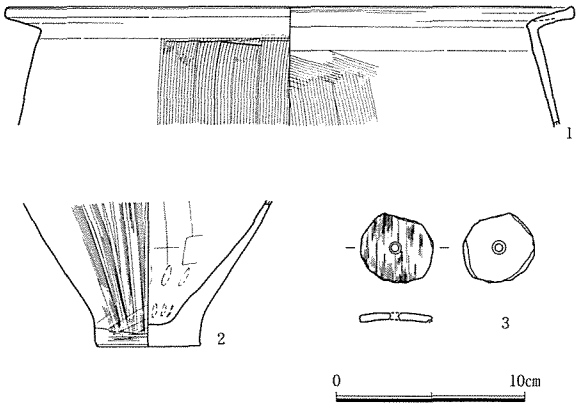
第15図　SK-09実測図





1．黄灰色シルト（炭片を僅かに含む）
2．黄灰色シルト（粘質。灰色がやや強い）
3．灰色砂（黄灰色シルトを含む）
4．黄灰色シルト（やや黒色かかる。炭片を含む。灰色砂を若干含む）

第16図　SK-10実測図



第17図　SK-10出土遺物実測図

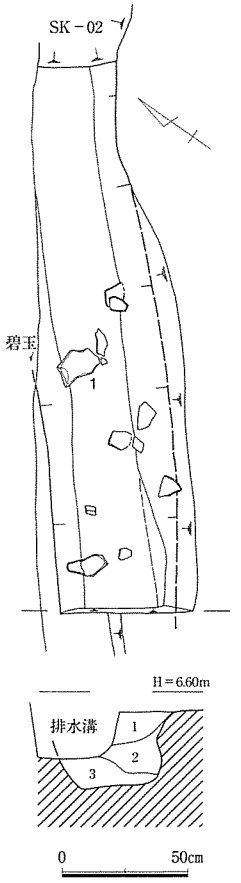
SK-11(第３・４・18・19図、図版７・13)

Ｃ区北西壁面沿い、第16層下の第27層上面、標高6.63mで検出した。北東側をSK-02、南東側をSK-03に切られ、上部を排水溝に掘削される。北西側壁は調査区北西壁面へ延びる。平面は溝状を呈し、遺存長2.18m、遺存幅52cmを測る。主軸はN-48°-Eを振る。断面は不整な逆台形状である。現況で検出面からの深さ30cmを測るが壁面での検出高を考慮すると本来40cm弱あったとみられる。底面は標高6.21mを測る。埋土は３層に分かれる。

遺物は南西側に分散して出土しており、54×34×20cmの容量をもつコンテナ約４分の１箱分に相当する土器が出土しており、甕、底部片、碧玉材１点がある。甕は口縁端部は上方への摘みがなくさほど肥厚もしないが端面に凹線がみられるものとそうでないものとがある。底部(1)は径8.8cmの底面から僅かに反り上がって外方へ大きく開く形態で、叩き目が観察される。縦ハケ目後縦ヘラ磨き及び工具ナデ。底面ナデ仕上げ。内面はハケ目後外面同様の弱い工具ナデが観察される。脚部(2)はハの字に開き、外面縦ハケ目後幅広の弱いヘラ磨き、内面丁寧なヘラ磨き調整。碧玉材は北西壁面の標高6.55mで出土し、やや風化して白味かかった石材としてはやや不良な部位である。擦面はなく擦切溝２が観察される。

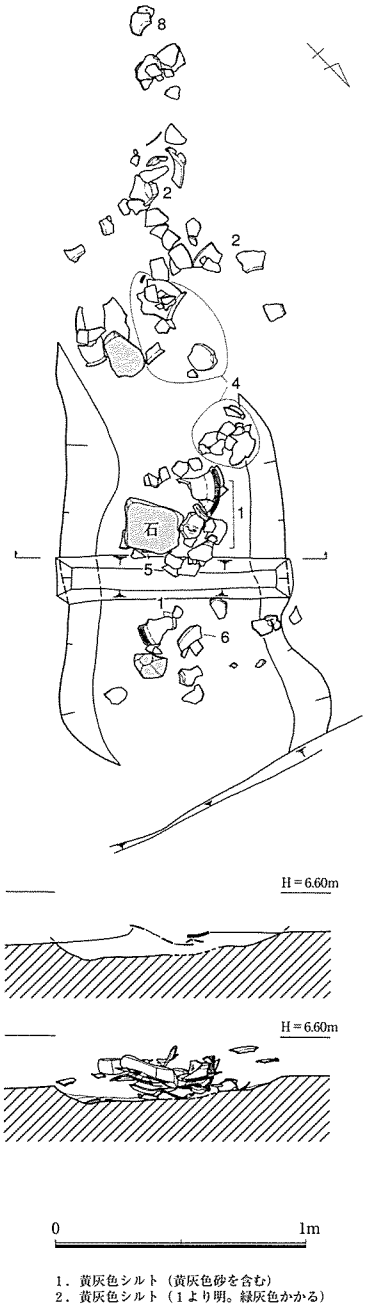
SK-12(第３・20・21図、図版８・13・14)

Ｃ区北東端、第16層下の第27層上面、標高6.56mで検出した。Ｃ１トレンチの北壁断面で観察され、南西側とで底面の高さがさほど変わらないことから北東調査区外へ延びるとみられる。西隣にSK-10が、南東１m弱に土器群が配置する。当初土器が帯状に出土することから横断トレンチを掘り下げ、掘り込みが確認された。南西側は再度の冠水などで既に土器が露出している状態となり遺構の南西端は不明となる。平面は溝状を呈し、遺存長3.65m、幅1.06mを測る。主



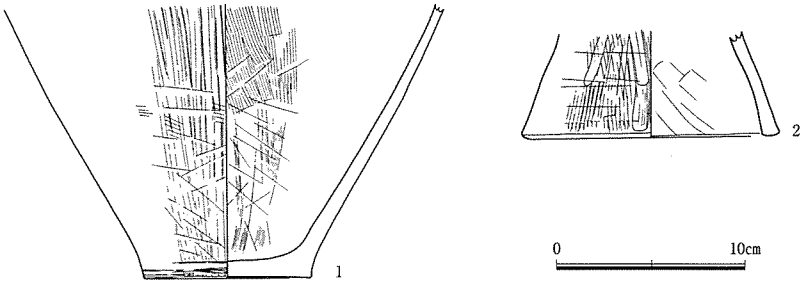
1．黄灰色シルト（炭片を含む。緑灰色シルトブロックを含む）
2．黄灰色シルト（１より暗で炭の含み多い）
3．緑灰色シルト（炭片を含む。黄灰色シルトを若干含む）

第18図　SK-11実測図



1．黄灰色シルト（黄灰色砂を含む）
2．黄灰色シルト（１より明。緑灰色かかる）

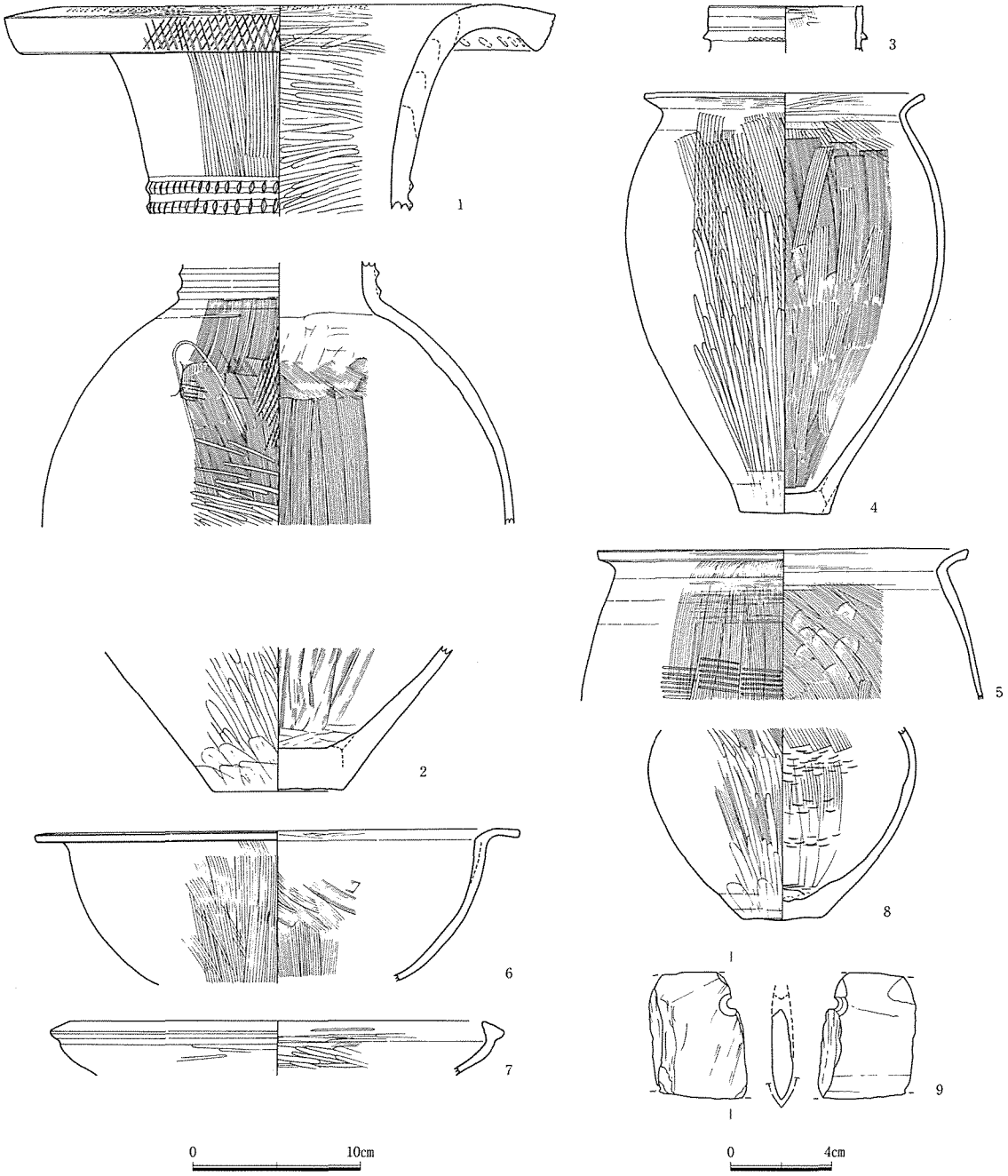
第20図　SK-12実測図



第19図　SK-11出土遺物実測図

軸はN-39°-Eを振る。断面は皿状で、検出面からの深さは現況で24cmを測る。底面は標高6.31mである。埋土は黄灰色シルト1層である。

遺物は土坑の主軸方向に沿って出土する状況がみられ、円礫、角礫、石庖丁片と土器が出土している。54×34×20cmの容量をもつコンテナ1箱弱に相当する土器が出土している。広口壺、小型壺、甕、高杯がみられる。広口壺(1)は頸部から上はほぼ完存する状況で、体部以下は検出されなかった。肥厚しやや下垂する口縁端面に斜格子文がみられ、口縁上面に2重の列点文がΩ状に注ぎ口を除いて施される。頸部は刻目貼付突帯2条がめぐる。頸部外面縦ハケ目、内面丁寧な横ヘラ磨き。広口壺(2)は頸肩部と底部は接合しないものの同一個体とみられ、頸部に2条の貼付突帯がめぐる。肩部に2種のハケ目、ヘラ磨きは斜位方向である。壺(3)は口縁端部は平坦面をもち、外面にやや突出度のある刻目貼付突帯が



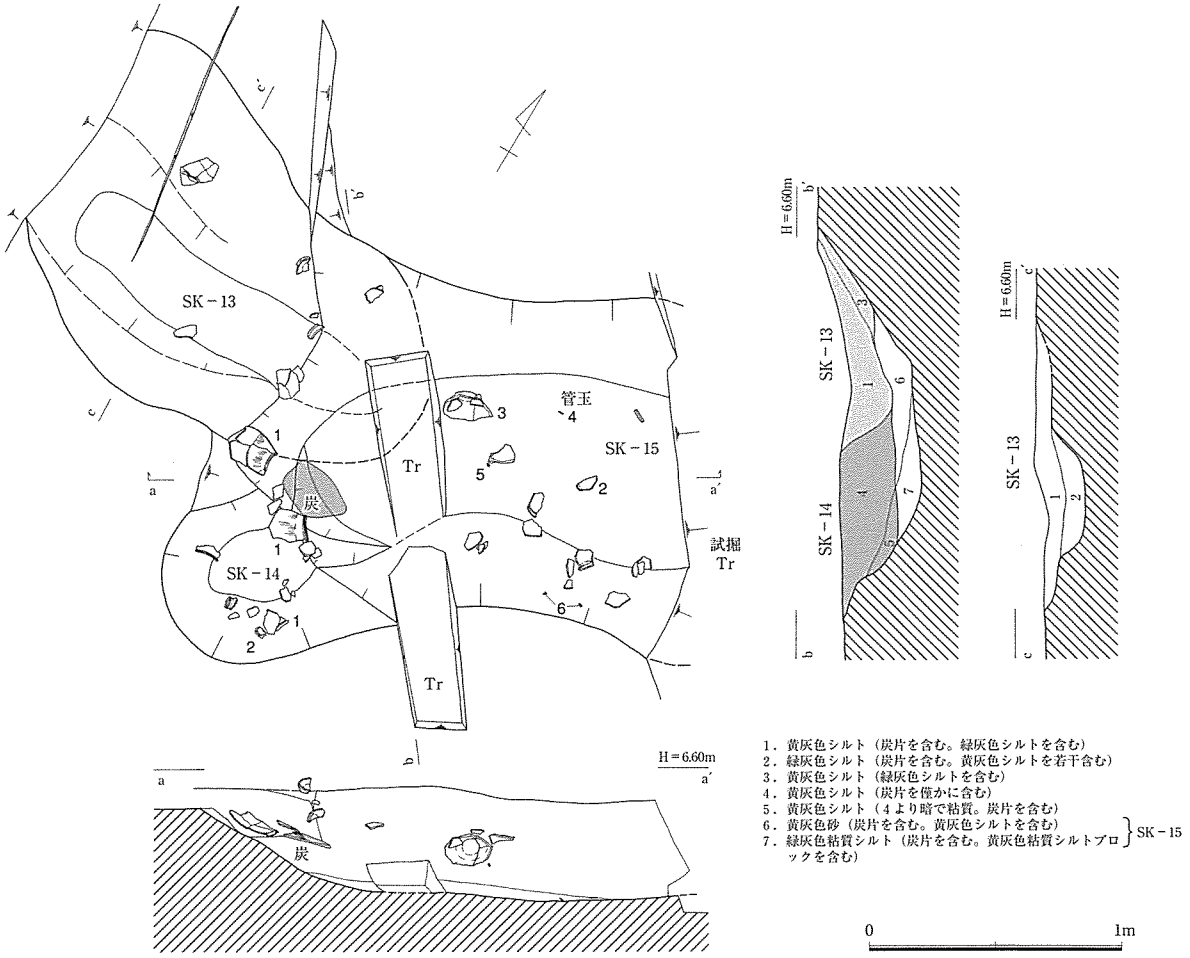
第21図　SK-12出土遺物実測図

めぐる。甕(4)は口縁は上外方へ伸び端部はさほど肥厚せず丸く納める。体部は最大径を中位やや上方にとりなだらかに底部へ続く。内外２種のハケ目、のち外面は縦ヘラ磨きをし上位へ及ぶ。甕(5)は20cm×20cm×６cm大の円礫の下でまとまって出土している。肩部が張らず口縁は端面をもつが凹線は施されない。内外ハケ目調整で肩部外面に明瞭な叩き目が観察される。甕はこの他にも複数出土しているが(4)(5)と同様な口縁で明確に凹線が認められるものはない。高杯(6)は口縁部は屈曲してほぼ水平に伸びる。杯部は深く椀状でない外面ハケ目調整である。高杯(7)は端部が肥厚して外傾する端面をもち、全体に剥落すすむが内外面にヘラ磨きを確認する。底部(8)は底部から内彎しながら立ち上がる。内面にハケ目のち板状および爪状の圧痕多数が観察される。石庖丁(9)は紐孔部の残存で、背側辺部も幅を減じ刃部状となる。黒色千枚岩製である。

SK-13(第３・22・23図、図版８・15)

Ｃ区南西端に位置する。標高6.52mで検出した。北西端は調査区外へ延び、南側でSK-14、南西側でSK-15を切る。平面は不整な長楕円形を呈し、遺存長1.55m、幅1.04mを測る。主軸はN-89°-Wを振る。断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ19cm、底面は東側で標高6.22mを測り西側でやや高くなる。埋土は黄灰色シルトと緑灰色シルトの３層に分かれ、第１、２層は炭片を含む。

遺物は径５～７cmの複数の底部を含め甕と高杯脚柱部片が土坑に分散して出土している。このうち図化した甕(1)はSK-14との境界部で出土している。口縁部は受口状で端部は上方への摘みがなされ丁寧なヨコナデ調整。丸味のある端面に凹線は施されない。器壁厚く、内面に粗いハケ目のちの指頭圧痕多数。外面はヘラ磨きが多用される。このに(1)より上方への拡張が強く端面にはっきりと凹線が認められるもの、やや大型の甕で僅かに肥厚した端面に凹線は持たないものとがある。



第22図　SK-13・14・15実測図

SK-14(第３・22・24図、図版８・15)

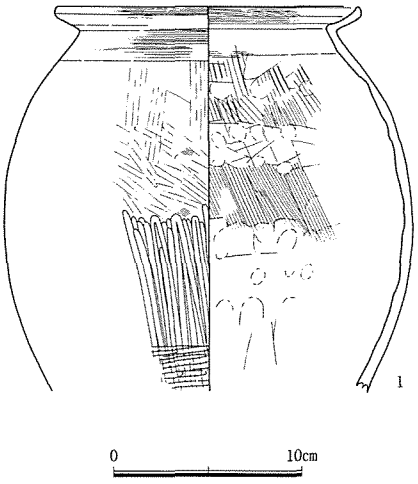
Ｃ区南西端に位置する。標高6.44mで検出した。北西側はSK-13に切られ、当初SK-15と同一遺構との認識から掘り下げをすすめたためｂ-ｂ′断面以北は不明である。平面は不整な長楕円形を呈するとみられ、遺存長1.01m、幅67cmを測る。主軸はN-27°-Eを振る。断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ23cm、底面は東側で標高6.21mを測り西側でやや高くなる。埋土は炭片を含む黄灰色シルト２層に分かれる。

遺物は土坑南壁沿いとSK-13寄りの25×18cm範囲の炭化層近くで出土しており、広口壺口縁部片、甕、底部がある。壺は僅かに肥厚する口縁端面および上面に凹線など装飾はない。図化した甕(1)は上下に肥厚した口縁端面に２条の凹線が施される。内外丁寧にハケ目調整され口縁部丁寧なヨコナデ。外面に弱いヘラ磨きを観察する。底部(2)は底部器壁薄く脚端部は短くハ字状に開く。

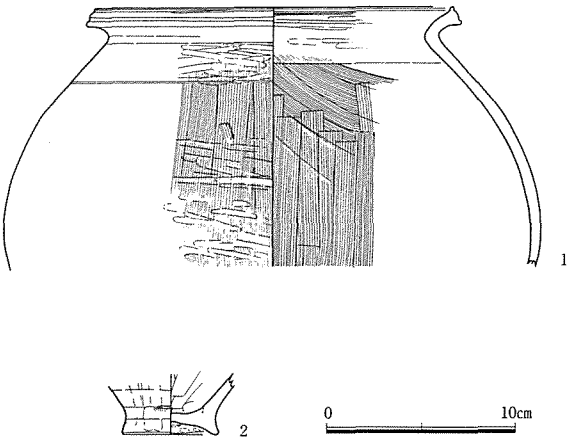
SK-15(第３・22・25図、図版８・15)

Ｃ区南西端に位置する。標高6.53mで検出した。平成13年度試掘トレンチ南西壁面で確認されていた土坑である。西側をSK-13に、南側をSK-14に切られる。平面は不整な長楕円形を呈するとみられ、遺存長1.77m、幅1.26mを測る。主軸はN-62°-Eを振る。断面は不整な椀状となる。検出面からの深さ43cm、底面は東側で標高6.06mを測る。埋土は上層は炭片を含む黄灰色シルトで下層は黄灰色砂と緑灰色粘質シルトに分かれる。

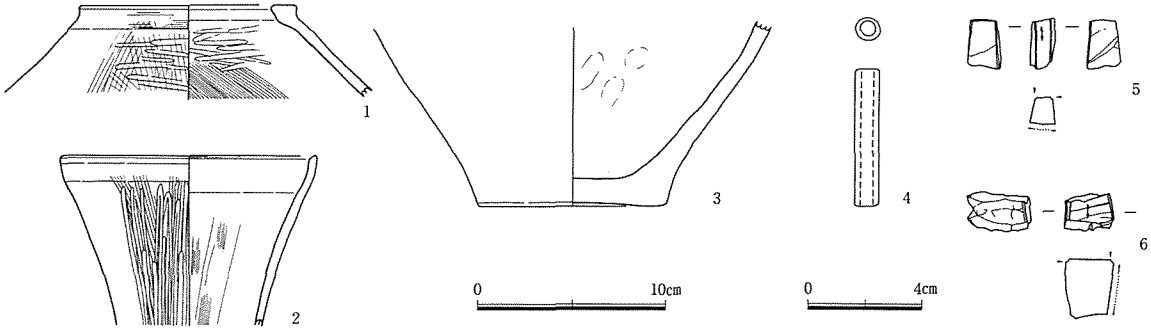
遺物は土坑南東側で出土する傾向があり、54×34×20cmの容量をもつコンテナ約２分の１箱分に相当する量が出土している。遺物は混入やSK-13、14の遺物の可能性をもつ土器片も認められたが、広口壺、無頸壺、甕、碧玉製管玉、碧玉玉材がある。壺には口縁部端面に刻目のち凹線１条を施すものや頸



第23図　SK-13出土遺物実測図



第24図　SK-14出土遺物実測図



第25図　SK-15出土遺物実測図

部に指頭圧痕貼付突帯があるものなどがみられた。図化した無頸壺(1)は肥厚してほぼ水平な端面を持ち、内外ハケ目調整のちヘラ磨き。口縁部(2)は、ハ字に開き端部で上方へ屈曲して僅かに内傾面を持ち、外ハケ目のちヘラ磨き。内面ナデ調整である。底部(3)は剥落がすすみ調整が不明瞭で、径9.85cmのどっしりした底部からやや反り上がり開く形態である。管玉(4)は長さ2.24cm、土坑の底面近くで出土しており、多面状の研磨痕も観察されず製品として完成した管玉である。碧玉玉材(5)(6)はそれぞれ擦切溝2を有する玉材で、完成品(1)に比べやや白っぽい部位で(6)には自然岩肌を1面残す。

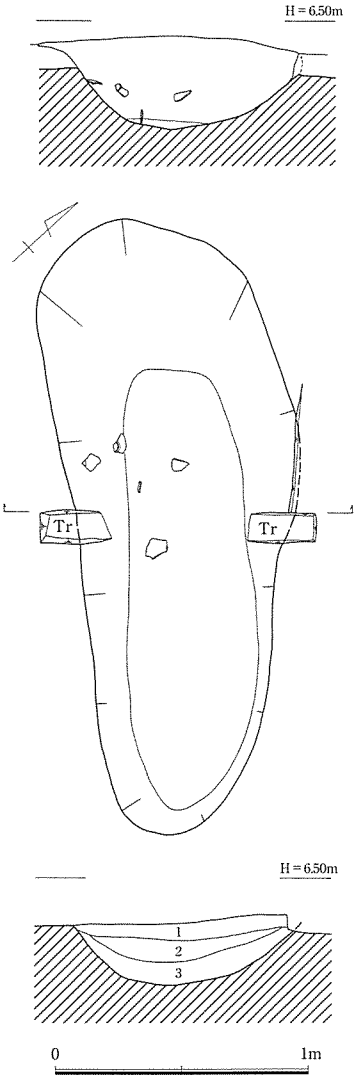
SK-16(第3・26図、図版8)

B区南西部、K杭西に位置する。標高6.44mで検出した。当初第16層下の第27層上面でそれらしき輪郭を観察したことから、本来は第27層上面まで土坑の上場は上がるものと思われる。1.4m南西にSK-17が配置する。平面は長楕円形を呈し、長さ2.45m、幅95cmを測る。主軸はN-53°-Wを振る。断面は椀形で、検出面からの深さ37cm、底面はやや南東側へ傾斜し、中央部で標高6.07mを測る。埋土はいずれも炭片を含む黄灰色シルト3層に分かれる。

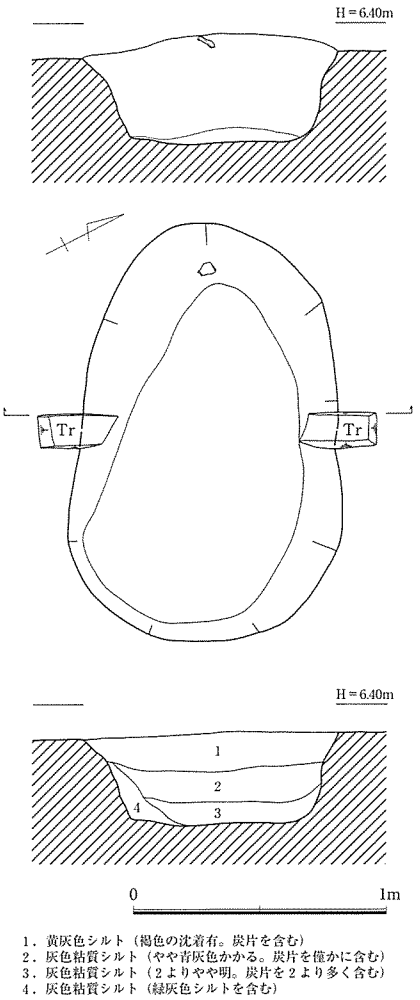
遺物はそれほど出土せず土坑中央部で分散して出土している。甕片、底部片、高杯口縁部片が見られる。高杯は杯部椀状で口縁部僅かに肥厚し外傾する端面にごく浅い2条の凹線を観察し、外端部に刻目を施す。甕は口縁部を僅かに含むがいずれも細片であった。

SK-17(第3・27・28図、図版9・15)

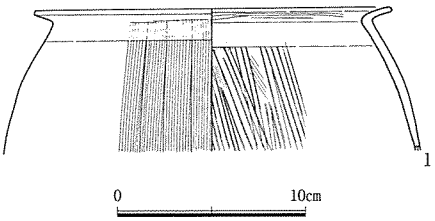
B区南西部、K杭南西に位置する。標高6.36mで検出した。当初第16層下の第27層上面でそれらしき輪郭を観察したことから、本来は第27層上面まで土坑の上場は上がるものと思われる。南壁でSK-22を切り、1.4m北東にSK-16が配置する。平面は長楕円形を呈し、長さ1.66m、幅1.09mを測る。主軸はN-56°-Wを振る。断面は逆台形状で、底面は平坦ながらやや南東側へ傾斜する。検出面からの深さ44cm、中央部で標高5.91mを測る。埋土は



第26図　SK-16実測図



第27図　SK-17実測図



第28図　SK-17出土遺物実測図

4層に分かれ、第3層で炭片を多く含む。いずれも炭片を含む黄灰色シルト3層に分かれる。

遺物はわずかに細片ばかりであるが、広口壺、甕、高杯、碧玉片1点が出土している。広口壺は下垂する端面に刻目を施すものと無文のものとがあり、図化した甕(1)は口縁端面は丸くおさめ凹線はみられない。口縁部を含め内外ハケ目調整、肩部外面に右上がりの叩目を観察する。高杯は2cmばかり外傾する無文の端面をもつ。碧玉片は埋土上層の出土で、長軸1.5cmを測る。擦切溝は観察されない。

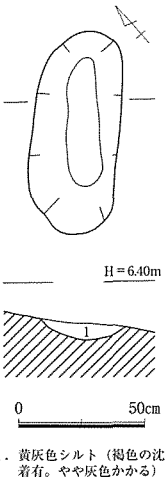
SK-18(第3・29図、図版9)

B区南西部、標高6.26mで検出した。当初第16層下の第27層上面でそれらしき輪郭を観察したことから、本来は第27層上面まで土坑の上場は上がるものと思われる。北東50cmにSK-23、西90cmにSK-24、東50cmにSK-19が配置する。平面は長楕円形を呈し、現況で長さ82cm、幅35cmを測る。主軸はN-46°-Wを振る。断面は皿状で、検出面からの深さ7cm、中央部で標高6.17mを測る。埋土は黄灰色シルト1層である。遺物は僅かに底部片、胴部細片が出土している。

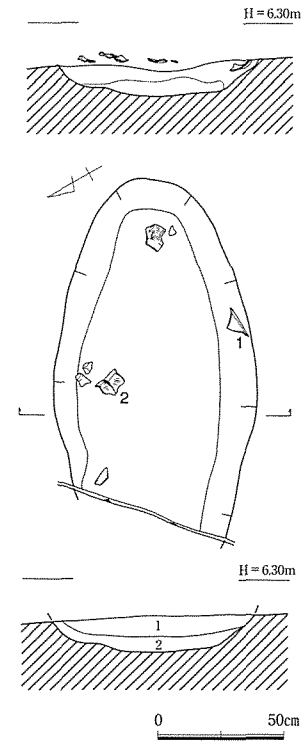
SK-19(第3・30・31図、図版9・15・16)

B区南西部、標高6.17mで検出した。北西壁をK—L杭トレンチによって掘削されるが、トレンチの北西壁面に遺構が観察されないことからトレンチ内で終結する。当初第16層下の第27層上面で不明瞭ながら遺構の輪郭を確認したことから、本来は第27層上面まで土坑の上場は上がるものと思われる。東50cmにSK-18、西1mにSK-25、南 西1mにSK-21が配置する。平面は長楕円形を呈し、遺存長1.31m、幅81cmを測る。主軸はN-58°-Wを振る。断面は不整な皿状で、検出面からの深さ15cm、中央部で標高6.02mを測る。埋土は灰色粘質シルトと緑灰色シルトに分かれる。

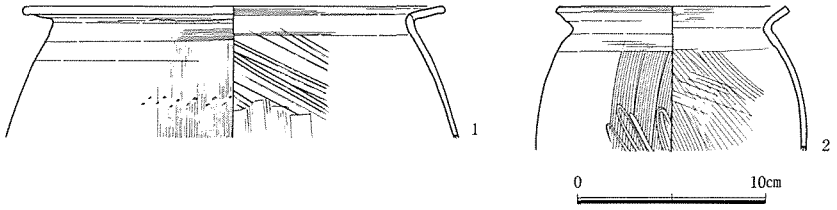
遺物は第1層中を中心として出土しており、図化した甕(1)(2)以外に壺肩部片と土器細片が僅かに出土している。甕(1)はやや橙色かかった乳褐色で器壁薄く焼成良好である。内外ハケ目のち口縁部丁寧なヨコナデ調整。口縁端部は丸くおさめる。肩部外面に連続刺突文。甕(2)はやや小形で、口縁部やや上方へ伸び上端沿いをヨコナデするが摘み出すには到らない。わずかな端面は丸味をもつ。内外ハケ目調整のち口縁部内面ヨコナデ、肩部にヘラ磨きの折り返し部分が観察される。



第29図　SK-18実測図



第30図　SK-19実測図

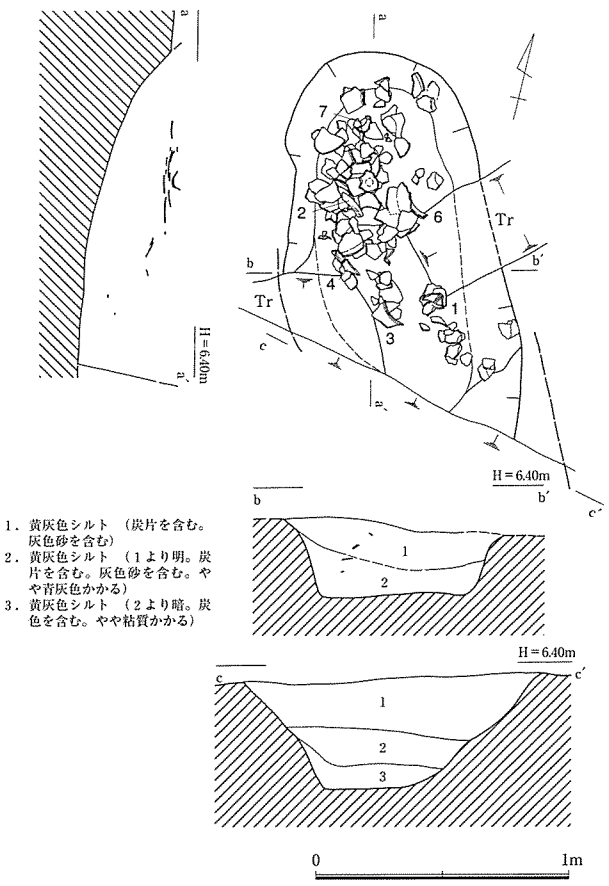


第31図　SK-19出土遺物実測図

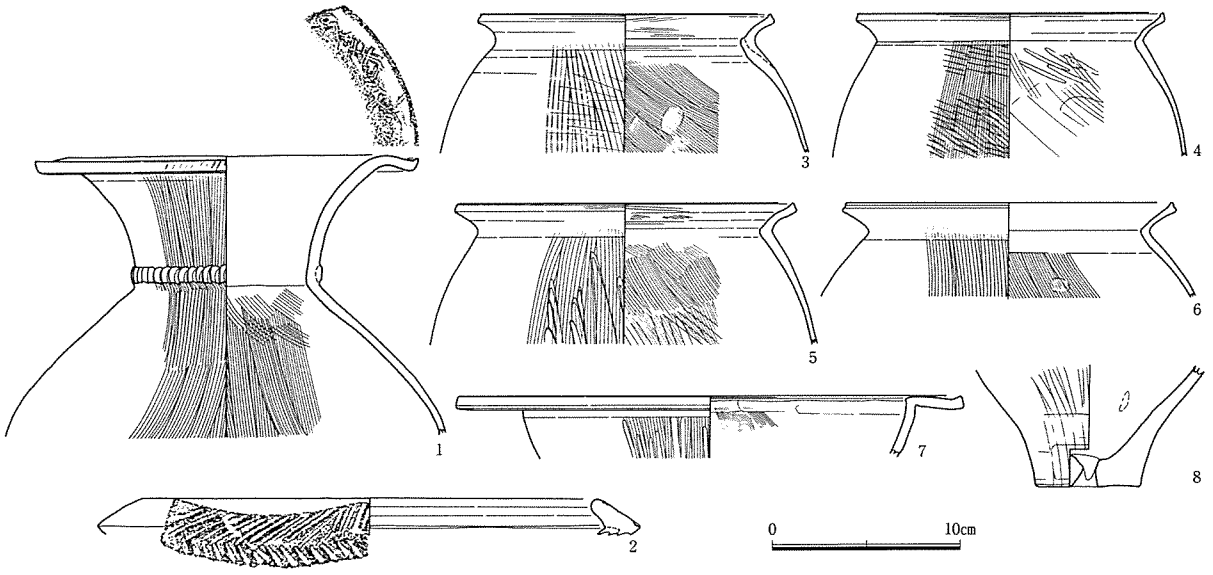
SK-20（第３・32・33図、図版10・16）

Ｂ区南西端に位置し、SK-21と東側を切り合い、南壁面は調査区外となる。標高6.28mで検出したが、調査区壁面の観察から遺構の上場は標高6.36mまで上がる。平面は長楕円形を呈するとみられ、遺存長1.42m、88cmを測る。主軸はN-19°-Wを振る。横断面は不整な逆台形状となる。検出面からの深さ44cm、底面は標高5.91mを測る。埋土は３層に分かれ、全体的に青灰色かかりSK-21とあまり埋土の大きな差は認められない。

遺物は、K―L杭トレンチや遺構確認の際のトレンチによって取り上げた遺物も多く、底面から10～20cm浮き土坑内に敷き詰まった状態で出土している。また土器も重なった部分が多く三重の部分もみられる。54×34×20cmの容量をもつコンテナ約１箱分に相当する量が出土している。壺、甕、高杯、底部片、棒状の敲石１点がある。広口壺(1)は頸部から開き口縁部で大きく屈曲、摘み上げた端面に刻目を施す。口縁上面には斜格子文が見られる。頸屈曲部に刻目貼付突帯がめぐる。口縁部内面は剥落不明、外面縦ハケ目、肩部外面に叩き目痕を観察する。壺(2)は内側に大きく肥厚する端面をもち、刻目を互い方向二段に施す。甕(3)～(6)は大きさや肩部の張り方もほぼ同様で、口縁部上端を摘み肥厚させ平坦な端面を作るが凹線は(6)のみにみられる。口縁部を含め内外面ハケ目調整で、(3)はヘラ磨き状の工具ナデ、(5)はヘラ磨きの折り返し部分が頸部近くに及ぶ。(4)は成形時の叩き目が



第32図　SK-20実測図



第33図　SK-20出土遺物実測図

明瞭に観察され、(6)は剥落不明瞭ながら、同一個体とみられる別片で明瞭な僅かに右上がりの叩き目を確認している。高杯(7)は口縁部ほぼ水平な面をもち端部は僅かに上方へ摘み上げ面をもつ。内外ハケ目調整で、外面は粗なヘラ磨き、口縁部内面は横位ヘラ磨き調整である。底部(8)は底部から急傾斜で反り上がり開く形態で、中央部に焼成前に穿孔された径1.5cmの円孔がみられる。この他にSK-22(第37図2)より直口する径7cm弱の壺口縁部や下垂して端面に斜格子文をもつ広口壺片、甕(3)～(6)より端面が肥厚せず丸くおえるものや逆にやや端面が広いが凹線は施さない甕口縁部がある。

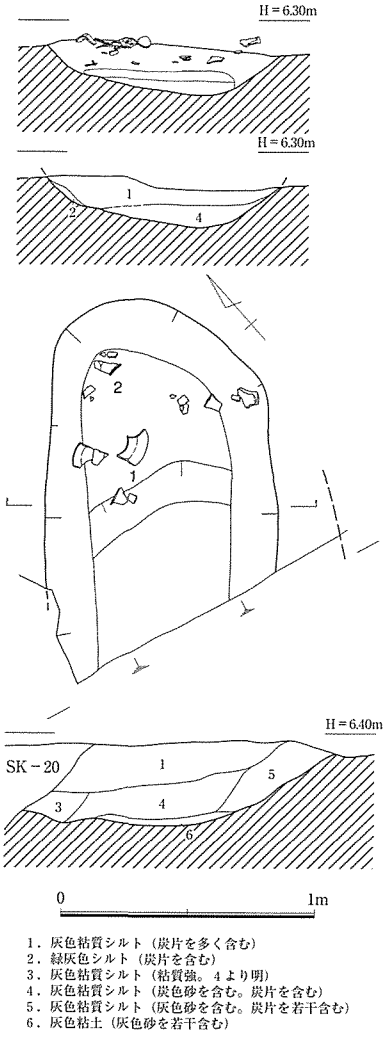
SK-21(第3・34・35図、図版10・17)

B区南西端に位置し、SK-20と西側で切り合い、南壁面は調査区外となる。標高6.20mで検出したが、調査区壁面の観察から遺構の上場は標高6.35mまで上がる。平面は長楕円形を呈するとみられ、遺存長1.44m、幅92cmを測る。主軸はN-39°-Eを振る。横断面は椀状で、検出面からの深さ33cmを測る。底面は北東で50cm幅ほどのテラスをもち、南西で一段、6cm程度深くなる。底面は中央部で標高6.00mを測る。埋土は6層に分かれ、上層の第1層灰色粘質シルトに炭片を多く含み遺物もこの層を中心として出土している。全体的に青灰色かかりSK-21とあまり埋土の大きな差は認められない。

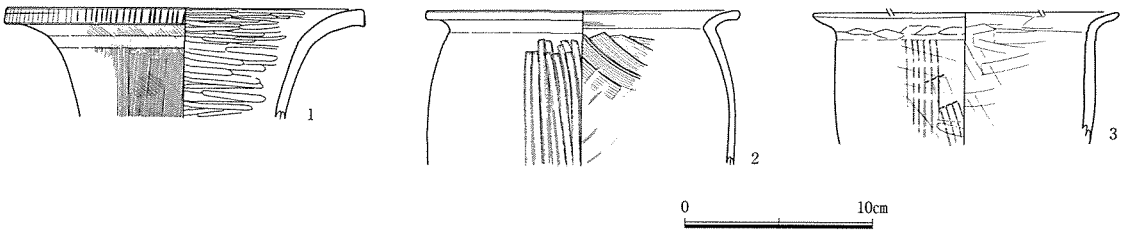
遺物は土坑北東側に集中し、隣り合うSK-20に対し遺物の出方は散漫である。壺、甕、底部片がある。広口壺(1)は口縁部は上部で大きく開いて徐々に厚さを増し端面をもつ。端面には直立気味な刻目がめぐる。頸部外面丁寧な縦ハケ目、下位に叩き目が観察される。内面は丁寧な横ヘラ磨きである。甕(2)は口縁部やや厚くぼってりした印象で端部も丸く終える。外面工具ナデ。甕(3)は肩部が張らず、頸部の屈曲弱く、口縁部は外上方へ先細りとなって終える。内外面工具ナデ、指おさえである。この他にみられる甕も端面が角張るものもみられるがこれらとほぼ同様な口縁部形態で凹線をもつものは認められなかった。

SK-22(第3・36・37図、図版10・17)

B区南西部、K杭南に位置する。標高6.18mで検出した。SK-17に北壁を切られる。北東40cmにSK-25が配置する。平面は長楕円形を呈し、長さ2.44m、幅1.23mを測る。主軸はN-48°-Wを振る。断面は椀状で、底面は平坦ながらやや南東側へ傾斜する。検出面からの深さ33cm、中央部で標高5.84mを測る。埋土は灰色粘質シルトと緑灰色シルトの4層に分かれ、第3層で炭片を多く含む。主軸方向や埋土の状況がSK-17と似ることなどからSK-17と同一の遺構である可能性も捨てきれない。



第34図　SK-21実測図

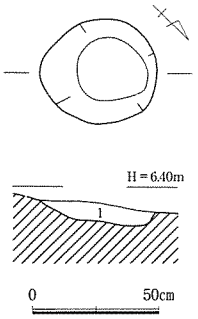


第35図　SK-21出土遺物実測図

遺物は54×34×20cmの容量をもつコンテナ約３分の１箱分に相当する量が出土している。甕(5)については、遺構を検出した状況から本来の土坑の上場はさらに上がると考え、遺構の遺物として取り扱った。上層で出土した遺物が目立ち、壺、甕、底部片、碧玉材１点がある。壺は図化した以外に頸部に断面三角形の貼付突帯２条をもつ広口壺片がある。壺(1)は頸部からなだらかに立ち上がり口縁部でやや開いて上端を摘み下端に刻目を、端面にごく浅い凹線を施す。頸部外面縦ハケ目のち一部ヘラ磨きの折り返し部分を観察する。壺(2)は大きく広がる肩部からすぼまって短く外方へ開き端部は丸く終える。肩部外面縦ハケ目で煤がべっとり付着する。甕(3)は広口で口縁部内面に連続する指おさえ、端面に凹線はみられない。肩部内面はハケ目のち丁寧な横ヘラ磨き。甕(4)は器壁薄く口縁部は水平方向へ伸び丸く終える。肩部外面細かな縦ハケ目。甕(5)は乳褐色かかり硬質で全体的に粗い調整である。口縁部端面はハケ目痕と横ヘラ磨きが部分的に観察され、肩部外面は勢いのある縦ハケ目で頸部に折返し部分認められる。この他にみられる甕もこれらとほぼ同様な口縁部形態で凹線をもつものは認められなかった。碧玉材は白っぽい脈がはしるような部位を含み、２面に磨面、擦切溝２を観察する。

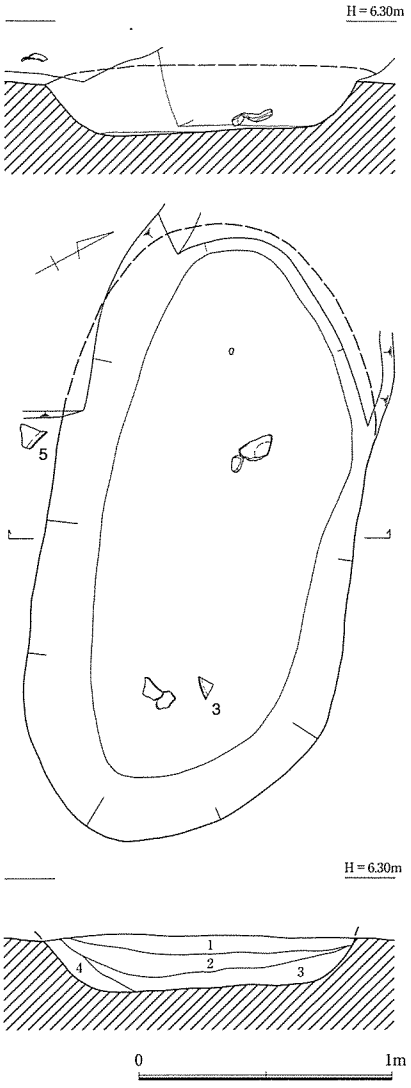
SK-23（第３・38図、図版10）

Ｂ区南西部、標高6.34mで検出した。南50cmにSK-18が、南西１mにSK-24が、南東１mにSK-19が配置する。平面は不整円形を呈し、長径47cm、短径41cmを測る。断面は不整な皿状で、底面はやや凹凸がみられる。検出面からの深さ７cm、検出時、第28層上面でそれらしき輪郭を



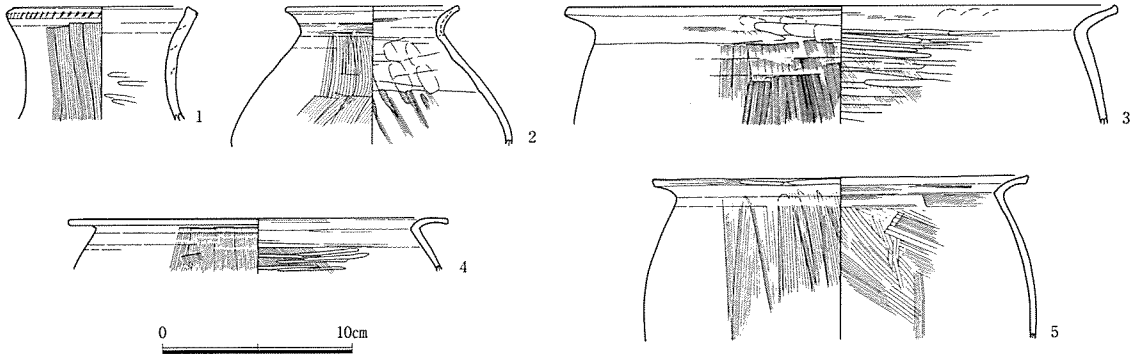
1．黄灰色シルト
（褐色の沈着有。炭片を含む）

第38図　SK-23実測図



1．灰色粘質シルト（炭片を含む）
2．灰色粘質シルト（１より明。炭片を含む。緑灰色シルトを含む）
3．灰色粘質シルト（１より暗。炭片を多く含む）
4．緑灰色シルト（炭片を含む）

第36図　SK-22実測図



第37図　SK-22出土遺物実測図

観察したことから本来土坑の上場は10cm程度上がるものと思われる。中央部で底面の標高6.25mを測る。埋土は黄灰色シルト１層で炭片を含む。

遺物は僅かに底部片と体部細片が出土している。

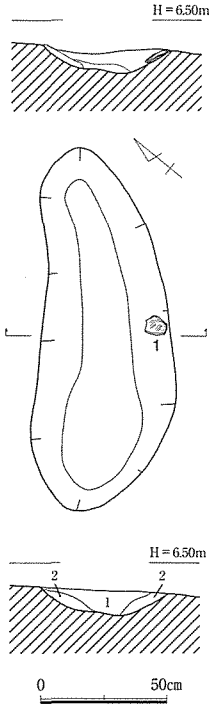
SK-24（第３・39・40図、図版11・18）

Ｂ区南西部の西寄り、標高6.40mで検出した。東90cmにSK-18が、南１mにSK-20が配置する。平面は不整な長楕円形を呈し、長さ1.44m、幅56cmを測る。主軸はN-57°-Eを振る。断面はやや不整な皿状で、底面はやや凹凸がみられる。検出面からの深さ９cm、検出時、第28層上面でそれらしき輪郭を観察したことから本来土坑の上場は10cm程度上がるものと思われる。中央部で底面の標高6.29mを測る。埋土は黄灰色シルトと灰色シルトの２層に分かれる。

遺物は土坑中央部東壁で脚部(1)の他、体部細片数点が出土している。脚部(1)はハ字に開きながら脚端部へ厚さを増し平坦な面をもつ。内外面ハケ目、脚裾部に４条の凹線を施す。

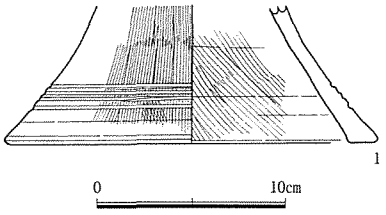
SK-25（第３・41・42図、図版11・18）

Ｂ区南西部の東端、標高6.06mで検出したが、調査区壁面の土層観察の結果、第20層下層の第27

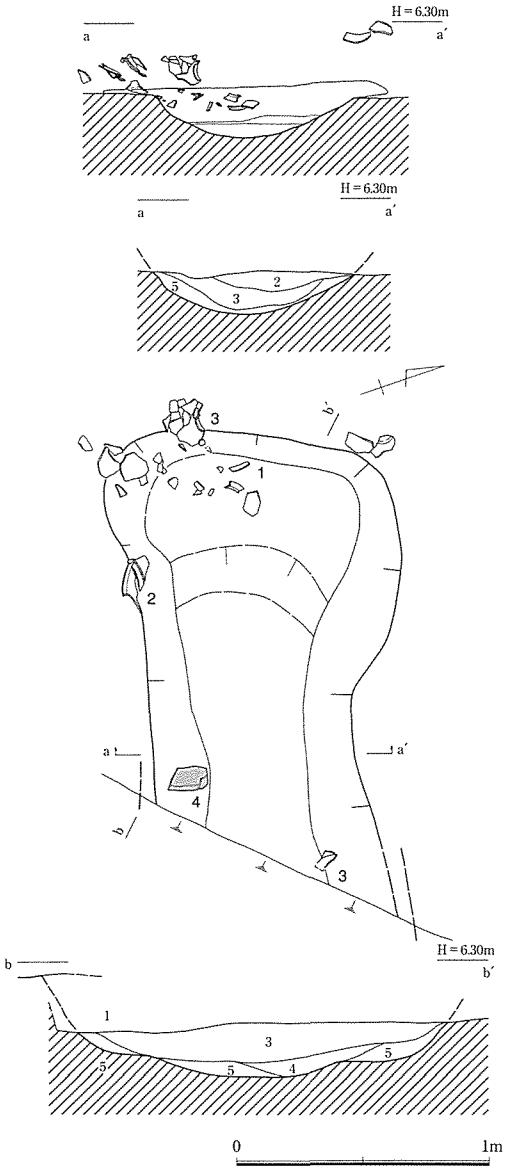


1．黄灰色シルト（褐色の沈着有。炭片を含む）
2．灰色シルト（褐色の沈着有。炭片を含む）

第39図　SK-24実測図

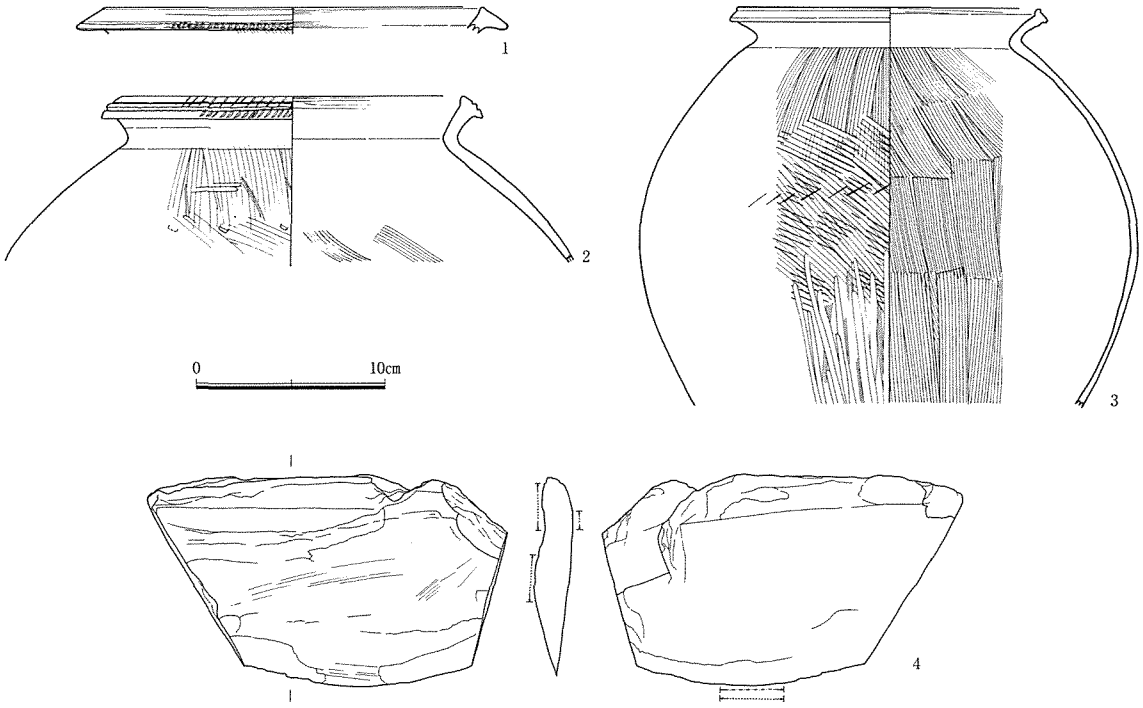


第40図　SK-24出土遺物実測図



1．黄灰色シルト（炭片を含む。褐色の沈着有。砂質）
2．灰色粘質シルト（炭片を含む）
3．灰色粘質シルト（２より暗。炭片を多く含む）
4．灰色粘質シルト（３より暗。炭片を多く含む）
5．緑灰色シルト（灰色粘質シルトを含む）

第41図　SK-25実測図



第42図　SK-25出土遺物実測図

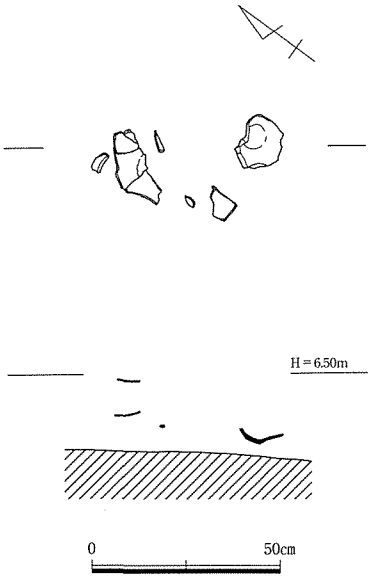
層上面の標高6.25mまで立ち上がることが判明した。東側は調査区外へ伸びる。北西40cmにSK-22が、南西1.2mにSK-19が配置する。平面は不整な長楕円形を呈するとみられ、現況で長さ1.70m、幅85cmを測る。主軸はN-74°-Wを振る。横断面は不整な皿状で、西端で幅35cm程の三日月状のテラスをもつ。検出面からの深さ41cm、底面は標高5.84mを測る。埋土は5層に分かれ、下層の第3、4層の灰色粘質シルトで炭片を多く含む。

遺物は西側テラス部周辺の第1層中に集中し、東側で出土している(3)(4)は第3もしくは5層の出土である。なお、甕(3)は土坑東西に分かれて出土している。遺物は壺、甕、高杯口縁部細片、刻目貼付突帯のある広口壺片、底部片、石庖丁の石材1点が出土している。壺(1)は下垂する端面下端に刻目を施す。内外丁寧なヨコナデ調整。壺(2)は厚手で、口縁部上下に肥厚して面をなし刻目2段と2条の凹線を施す。肩部内外面ハケ目のちナデ、肩部外面に鈍く間隔の空く刺突文を施す。甕(3)は(2)と同様に口縁部上下に肥厚して僅かな端面を成し浅く幅広の凹線1条を施す。体部外面は最大胴部周辺に重複する右下がりの叩き目痕が顕著で、体部下位はハケ目のちヘラ磨き、肩部にハケ目のちナデが観察され、目立たないながらも刺突文がめぐる。甕口縁部はこの他に(3)ほどの肥厚はないものの刻み目のち1条の凹線を施した口縁部片が出土している。(4)は緑色千枚岩で、石庖丁の石材とみられる。両端は切断面。両面成形割面で一部磨痕。片側辺は刃部状に尖り、一部刃状の加工痕が観察される。

2．その他の遺構と遺物

土器群(第3・43図、図版11)

C区北東端に位置し、標高6.47～6.22mで検出した。この周辺では地盤が砂質で、度々冠水した際土器が出土位置を保てず採集されたものがあり、土器群の周辺は炭片を含みやや黒色かかっていたこ



第43図　土器群実測図

とから、本来は土坑であった可能性が強い。径7.5cmの壺とみられる底部、端面は無文の広口壺口縁部、端部は丸くおさめる甕口縁部片、体部片がみられる。

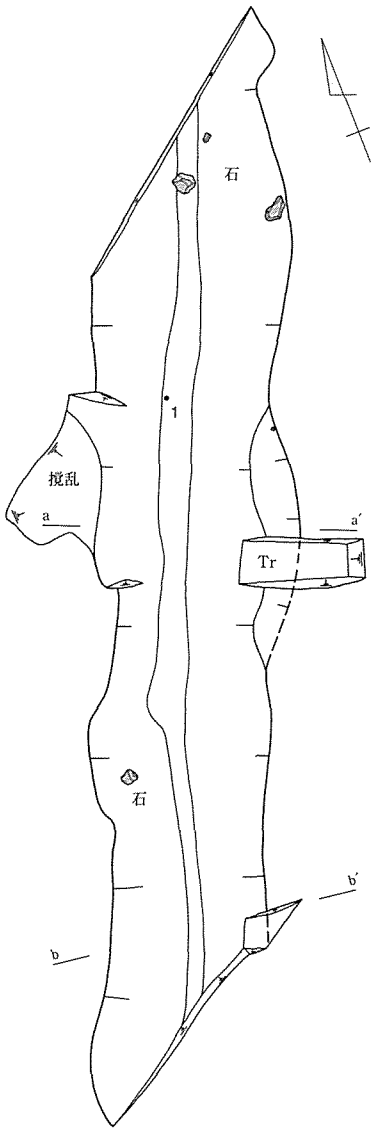
SD-01（第３・４・44・45図、図版11・12・18）

Ａ区中央部で調査区を斜めに横断する。調査区北西壁面から、第６層床土下層の第９層上面、標高6.53mまで上場が上がる。ほぼ直線的な溝で、遺存長11.5m、幅2.14mを測るが、壁面から本来４mほどの溝が復元される。主軸はN-21°-Eを振る。壁面はなだらかな立ち上がりで横断面はやや不整な皿状となる。底面は両端ではさほど比高差は認められず、僅かに北東側が４cm程度低くなり、北東端で標高5.96m、中央部のａ-ａ´断面付近でも底面の標高5.95mを測る。

遺物は角礫が４点と中央やや北寄りの底面近くで土師器小皿(1)が出土している。底径3.75cmの糸切り底部で、内外剥落がすすむ。

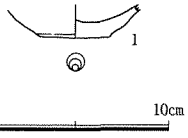
P-01（第３・46図、図版12）

Ｃ区西端に位置し、標高6.55mで検出した。北東90cmにSK-04が、南東45cmにSK-06が配置するが、周辺にＰ-01と同様な遺構はみられない。平面不整円形で長径29cm、短径28cmを測る。断面は不整な逆台形で、検出面からの深さ39cm、底面は標高6.16mを測る。埋土は３層に分かれ、土層断面から明確な柱痕跡は観察されなかった。土器などの遺物は出土していない。

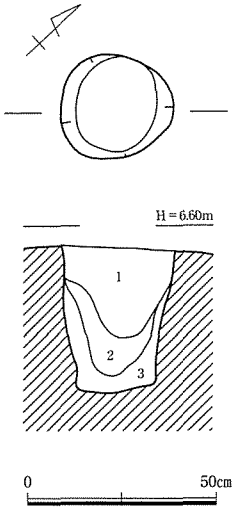


1．黄灰色粘質シルト
2．黄灰色粘土（極細砂を含む）
3．黄灰色シルト（粘質土を含む）
4．黄灰色砂（３より粗い１～２mm大の砂を含む。粘質土を若干含む。炭・有機物を若干含む）

第44図　SD-01実測図



第45図　SD-01出土遺物実測図

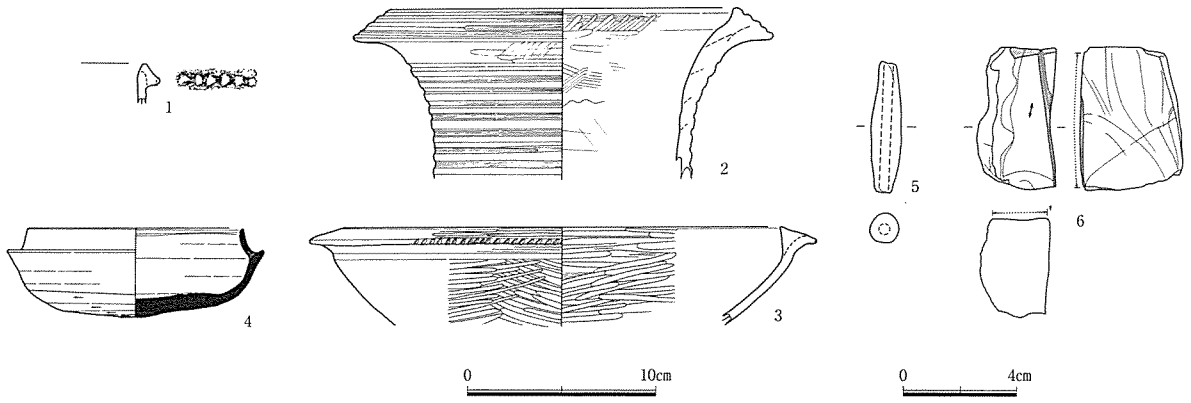


1．黄灰色シルト（炭片を多く含む。１cm大の緑灰色シルトブロックを含む）
2．黄灰色シルト（１より明で粘質）
3．黄灰色シルト（緑灰色シルトを含む）

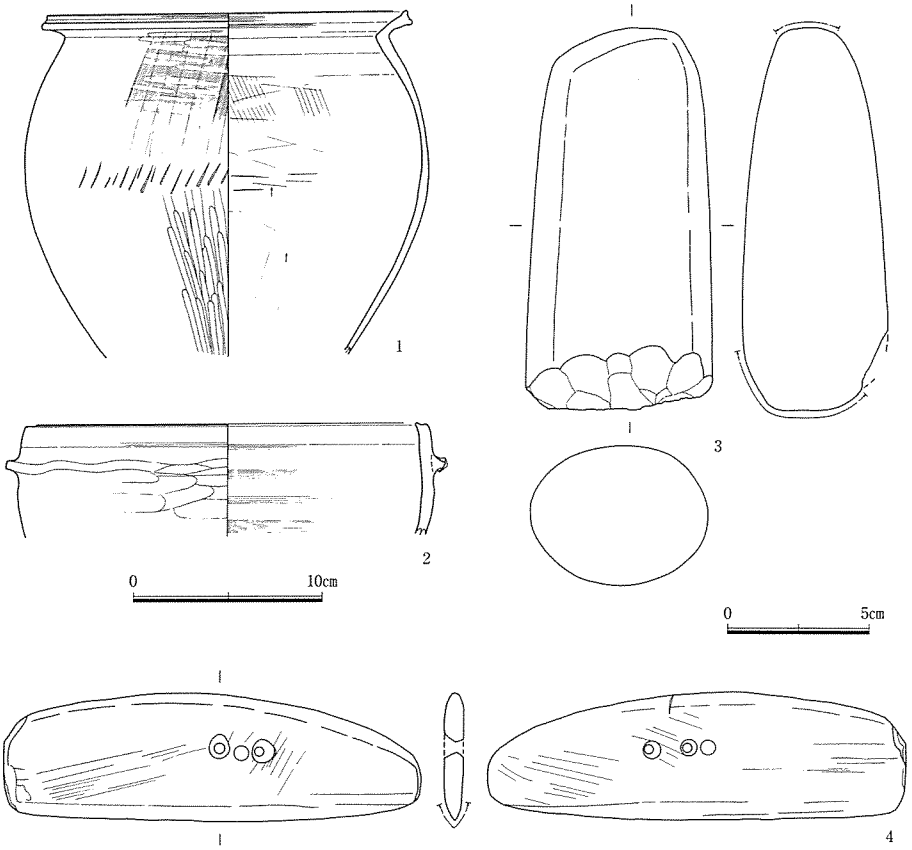
第46図　Ｐ-01実測図

遺構外出土遺物(第47・48図、図版18)

遺構外の出土遺物として、A区でコンテナ約6分の1、BおよびC区でコンテナ各2箱分に相当する量が出土している。また、B区の谷状に落ち込む部分、B1トレンチ、B3トレンチで各1コンテナ分の土坑群とほぼ同じ時期の遺物が出土している。A区での遺物の多くは床土下の第7～9層の出土でほとんどが磨耗した土器細片である。中に古墳中期前半の甕片や、須恵器糸切り高台部、瓦質土鍋片などが含まれる。B区ではトレンチの遺物を除き壺(2)や高杯(3)などK～L杭間およびその周辺で出土したものが大半を占め、床土下の第7層から須恵器糸切り底部片、土師器片、管状土錘(5)などがある。また第14層で須恵器杯身(4)が出土している。この他の遺物は弥生中期の土坑を検出する際に第27層中で出土した遺物で、基本的に土坑の時期と重複する。今回出土した唯一の縄文土器、突帯文土器(1)は床土の下層



第47図　B区遺構外出土遺物実測図



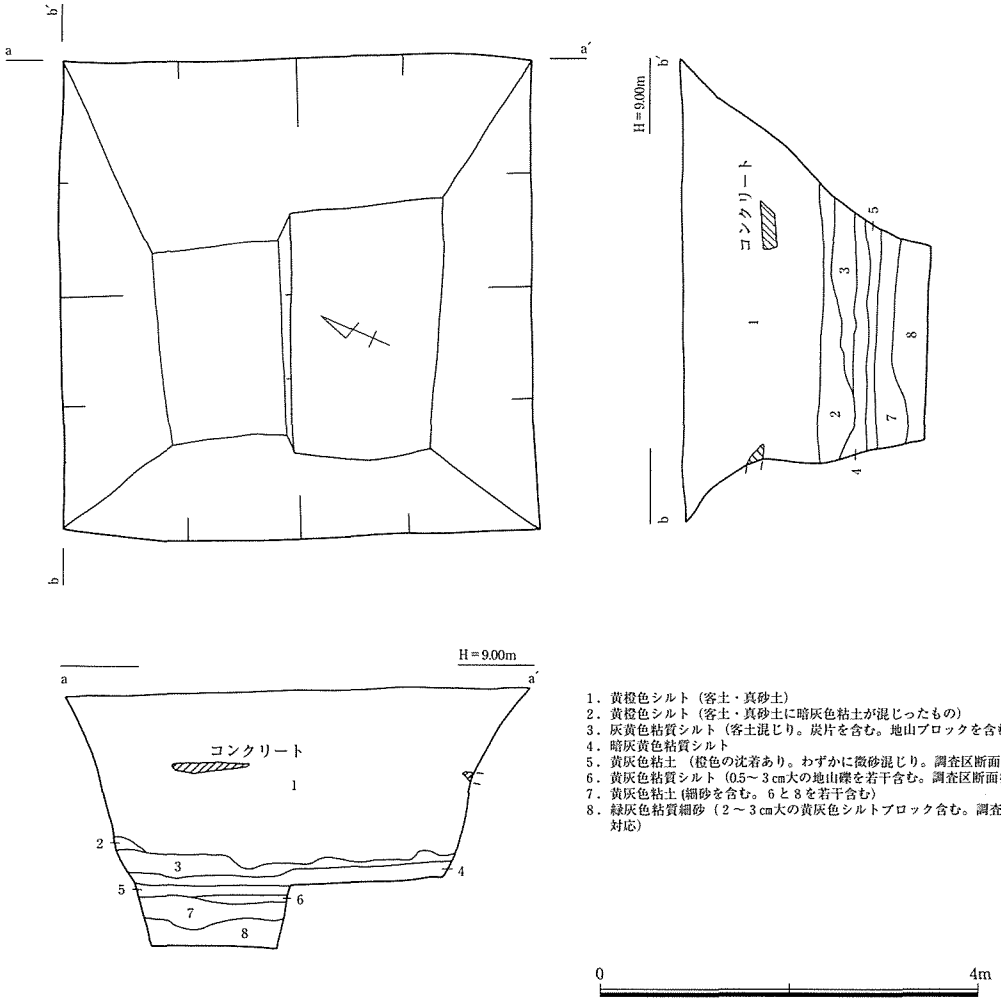
第48図　C区遺構外出土遺物実測図

で検出されたものである。この他Ｂ区では今回調査した碧玉製玉未製品の中で最大の(6)が出土しており、岩肌を残し擦切溝２を観察する。Ｃ区ではＢ区同様に第７層で須恵器片や瓦質羽釜(2)が、第27層で弥生中期土器を検出しており、石斧転用の敲石(3)や石庖丁(4)は甕(1)と同時期の所産と考えられる。

Ｄ区（トレンチ）の調査（第４・49図、図版３）

Ｄ区は今回の調査地の南西端、Ｃ区から約38m南西に位置する。この間は民家への進入路などがある。Ｄ区の南西は大井手川が北上し、対岸部は平成６年度に調査が行われている。立地は山ヶ鼻丘陵から続く微高地の南西斜面にあたると推測される。Ｄ区の南西約10mでは新しく付け替えられる山ヶ鼻橋の基礎工事がほぼ完了しており、調査区付近まで一面に砕石が厚く敷かれている状況であった。また、調査地には以前建物があったと聞き、後の橋梁工事の影響も加え撹乱の可能性も懸念された。

厚い客土で遺構面の確認まで１m以上の掘り下げが想定されることから、工事対象区幅のほぼ中央に５×５mのトレンチを設定した。調査前の標高は8.75m、6.04mまで掘り下げを行った。検出面から1.5～1.8mの深さまでコンクリート片を含んだ真砂土である第１層黄橙色シルトが、その下層に暗灰色粘土混じりの真砂土である第２層黄橙色シルト、さらに客土混じりの第３層灰黄色粘質シルトが続く。耕作土は後世に除去されており、第４層暗灰黄色粘質シルトからが本来の堆積層である。第４層下には沈着層である第５層黄灰色粘土がみられＡ～Ｃ区調査区断面の第16層に対応すると考えられる。標高6.7m付近に広がりＣ調査区南端よりやや標高を下げる。この第５層下が遺構面であり、第６層は遺構の可能性も考えられるがはっきりしなかった。第７、８層はそれぞれ第27、28層に対応する基盤層であるが粘土および細砂であり、北東側の調査区に比較し軟弱な地盤となる。遺物は第６層中から磨耗した土器細片１点が出土している。



第49図　Ｄ区（トレンチ）実測図（Ｓ＝１：80）

出　土　遺　物　観　察　表

（　）復元値　〈　〉推定値

遺構名	挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
SK-03	第7図1	甕	〈18.4〉	—	—	口縁は上方に摘み、端面に凹線上の凹み。肩部に縦ハケ目以前の叩目。	1㎜以下の砂粒多	やや不良	褐色	(口)1/12 (体)上半1/10	煤炭化物付着	14
SK-03	第7図2	(口縁部)	〈19.8〉	—	—	肥厚する口縁は水平面を持つ。外面に3条の独立した凹線を確認。	1㎜前後の砂粒多	不良	(外)淡灰褐色 (内)橙褐色	(口)1/8	黒斑有	4
SK-06	第11図1	壺	—	—	—	縦ハケ目調整後頸部に断面三角形の貼付突帯3条。	1㎜以下の砂粒含	良好	乳褐色	(頸)1/3		2
SK-06	第11図2	(口縁部)	(9.9)	—	—	風化剥落進む。 口縁は内外を摘み水平面を作る。	0.5㎜以下の砂粒含	不良	赤褐色	(口)1/5	二次焼成？	3
SK-07	第13図1	(底部)	—	8.9	—	外面ヘラ磨き、底面剥落不明。 二次焼成で剥落部多。	1㎜前後の砂粒含 3㎜の砂粒有	不良	(外)赤橙色・淡褐色 (内)淡赤灰色 (底)黒褐色	(底)完存	黒斑有 二次焼成	1
SK-07	第13図2	石鏃	L2.26	W1.90	T0.58	やや雑なつくり。基部はやや直線的な無茎鏃、周縁部は両面加工、断面は三角形状。				完存	讃岐石 重量 2.3g	7
SK-10	第17図1	甕	(29.9)	—	—	肥厚しやや丸みを持つ端面に凹線無。肩部内外ハケ目、口縁内外丁寧なヨコナデ。	1㎜以下の砂粒含	良	黒褐色	(口～肩)1/6		4
SK-10	第17図2	底部	—	5.45	—	外面ハケ目後幅広の弱いヘラ磨き。 底面ナデ。内面丁寧なナデ。	1㎜以下の砂粒を含	良		(底)完存	炭化物着付 黒斑有	5
SK-10	第17図3	紡錘車	L3.82	W3.70	T0.40	土器体部を再加工。歪な楕円形。 両面穿孔。	0.5㎜以下の砂粒含 1㎜の砂粒有	やや良	(外)灰褐色	ほぼ完形 (一部欠)	重量 6.6g	10
SK-11	第19図1	(底部)	—	8.8	—	外面叩目後縦ハケ目後ヘラ磨き、工具ナデ。底面ナデ。内面ハケ目後ナデ、工具ナデ。	1～2㎜の砂粒含 3㎜の砂粒有	やや不良	褐色	底面1/2 底部1/4	煤、炭化物付着	9
SK-11	第19図2	(脚部)	—	〈13.8〉	—	ハの字に開く脚部。外面ハケ目後幅広の弱いヘラ磨き。内面丁寧なヘラ磨き。	1㎜以下の砂粒僅か含	良好	淡褐色	(脚裾)1/8		15
SK-12	第21図1	壺	32.8	—	—	口縁上面に列点文2重を注口を残し施す。端面に重複する斜格子文。頸部に2条の突帯貼付後刻目。内面丁寧なヘラ磨き。	1㎜前後の砂粒多	不良	橙色、橙褐色	(口)4/5 (頸)ほぼ残存		8 11
SK-12	第21図2	壺	—	7.8	—	頸部2条の貼付突帯。外面2種のハケ目。 中位以下ヘラ磨き。内面ハケ目。底部肉厚。	1～2㎜の砂粒含	良	(外)淡褐色 (底)黒褐色 (内)黒褐色	(頸肩)1/4 (底)3/5		3 4
SK-12	第21図3	壺	〈8.6〉	—	—	細片ながら口縁端面に凹線。 中位に刻目貼付突帯。	1㎜前後の砂粒含	良	淡褐色	(口)1/8		13
SK-12	第21図4	甕	16.55	—	25.25	屈曲して外方へ開く口縁は端部は丸みを持ち凹線無。体部内外2種のハケ目。肩部外ハケ目は粗く鋭利。ヘラ磨きは一部上位へ及ぶがやや粗雑。	0.5㎜以下の砂粒含 1㎜の砂粒有	良	褐色	(口)1/2 (体)上半1/4 欠失	煤、炭化物付着	5 7
SK-12	第21図5	甕	(22.0)	—		端面に凹線無。体部中位に右下がりの叩目。内外ハケ目。2種のハケ目？	0.5㎜以下の砂粒含 1㎜の砂粒有	良	淡褐色	(口肩)1/4		9
SK-12	第21図6	高杯	〈26.6〉	—	—	屈曲して水平方向に伸びる口縁。 体部内外ハケ目。	1㎜以下の砂粒含 3㎜の砂粒有	良	淡褐色	(口)1/8	赤彩の可能性	11
SK-12	第21図7	高杯	〈24.6〉	—	—	外傾する平坦面をもつ。剥落すすむがヘラ磨き確認。	0.5㎜以下の砂粒含 3㎜の砂粒有	やや不良	褐色	(口)1/10	黒斑有	13
SK-12	第21図8	(体部)	—	4.9	—	平底部から大きく開いて窄まる体部。内面板状工具痕及び爪状の圧痕多。	1㎜前後の砂粒含 2㎜の砂粒有	やや不良	(外)褐色 (内)黒褐色	(底)完存 (体)1/2		1
SK-12	第21図9	石庖丁	L(3.9)	W5.05	T0.82	粗な磨製で成形剥離痕残す。両刃。断面は扁平凸レンズ状で、刃部寄に最大厚を持つ。背側寄に紐孔1残存。両面穿孔。紐孔外径0.9cm。背側辺も幅を減じ刃部状となる。			暗灰色・灰黄褐色	約1/4	黒色千枚岩 重量 22.5g	14
SK-13	第23図1	甕	(16.0)	—	—	やや受口状の口縁。端面に凹線無。器壁厚く内面指頭圧痕多数。外面ヘラ磨き多用。	0.5㎜前後の砂粒を多く含	良	淡褐色・褐色	(口)1/5 (体)1/4弱	煤、炭化物付着	5
SK-14	第24図1	甕	(18.9)	—	—	肥厚する端面に2条の凹線。内外丁寧にハケ目。後外面弱いヘラ磨き、ナデ。	0.5㎜以下の砂粒を多く含・2㎜の砂粒有	やや不良	(外)淡灰褐色 (内)褐色、淡褐色	(口～体)1/6	黒斑有 炭化物付着	3
SK-14	第24図2	底部	—	5.0	—	短くハの字状に開く脚台部。外面縦ヘラ磨き。内面ナデ。	1㎜前後の砂粒を含	やや不良	(外)暗褐色、 淡灰褐色 (内)褐色	(底)ほぼ完存	黒斑有	1
SK-15	第25図1	(口縁部)	9.1	—	—	無頸壺。ほぼ水平な端面。体部内外ハケ目後ヘラ磨き。	0.5㎜前後の砂粒を含	やや不良	赤褐色	(口)1/2		15
SK-15	第25図2	(口縁部)	13.5	—	—	ハの字に立ち上がり端部は内傾する面をもつ。外面鋭利なハケ目後ヘラ磨き。	0.5㎜以下砂粒含 4㎜の砂礫を含	良	黄褐色、淡褐色	(口)1/4	黒斑有	1 3
SK-15	第25図3	(底部)	—	9.85	—	どっしりした底部。剥落すすむ。	2㎜前後の砂粒を多含 5㎜の砂礫有	やや不良	黄褐色、淡赤褐色	(底)完存		7
SK-15	第25図4	管玉	長2.24	径0.44	—	両面穿孔。孔径最大0.24cm、最小0.20cm。完成品。			暗緑灰色	完存	碧玉 重量 0.71g	1
SK-15	第25図5	玉材	L2.3	W1.7	T1.35	摩切溝長軸方向に2。磨面2他割面。			緑灰色		碧玉 重量 7.75g	2
SK-15	第25図6	玉材	L1.75	W1.20	T0.90	摩切溝2、全面割面。一面に岩自然肌残し中央に未完の擦切溝1。			暗緑灰色		碧玉 重量 2.73g	8
SK-17	第28図1	甕	(18.8)	—	—	丸く納める端面に凹線無。内外ハケ目、肩部に叩目観察。	0.5㎜前後の砂粒を含	やや不良	淡灰褐色	(口肩)1/6	煤付着 黒斑有	2

遺構名	挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
SK-19	第31図1	甕	(22.0)	—	—	口縁部は丸く納め、内外2種のハケ目後口縁丁寧なヨコナデ。肩部に連続刺突文。	0.5㎜以下の砂粒多	良好	乳褐色	(口)1/5 (肩)1/10		2
SK-19	第31図2	甕	(12.0)	—	—	僅かな口縁端面をもつが凹線無。内外ハケ目後口縁ヨコナデ。肩部外面ヘラ磨き。	0.5㎜以下の砂粒を含	良	褐色	(口肩)1/4	煤、炭化物付着	4
SK-20	第33図1	壺	(16.8)	—	—	口縁上面に斜格子文、端面に刻目。頸部に刻目貼付突帯。肩部外面ハケ目、肩部に叩目か。	1㎜以下の砂粒多	良	淡褐色	(口)1/6 (頸)1/2 (肩)1/8		20
SK-20	第33図2	(口縁部)	(24.2)	—	—	内側に大きく肥厚し端面に互い方向の刻目2段を施す。	1㎜以下の砂粒含	良	灰褐色	(口)1/6	黒斑有	10
SK-20	第33図3	甕	(15.3)	—	—	口縁端部は摘み、端面に凹線無。頸部は丁寧なヨコナデ。肩部外面ハケ目後ヘラ磨き状の工具ナデ。	1㎜以下の砂粒含	良好	淡橙褐色	(口肩)1/4	煤付着	21
SK-20	第33図4	甕	〈16.2〉	—	—	口縁端部は摘み上げ、端面に凹線無。肩部外面叩目、後縦ハケ目。	1㎜以下の砂粒含	良好	淡橙褐色	(口)1/8	煤付着	21
SK-20	第33図5	甕	17.8	—	—	口縁端部は摘み、平坦な端面に凹線無。外面縦ハケ目後ヘラ磨きの折り返し部観察。内面2種のハケ目。	1㎜以下の砂粒含	良好	褐色	(口肩)4/5	煤付着	27
SK-20	第33図6	甕	(17.2)	—	—	口縁端部摘み上げ、端面に明瞭な1条の凹線。剥落すすむ。	0.5㎜以下の砂粒含	不良	(外)褐色、赤褐色 (内)赤褐色	(口)1/5		15
SK-20	第33図7	高杯	〈26.7〉 〈20.9〉	—	—	口縁はほぼ水平な面をもち端部は摘み端面に凹線無。外面ハケ目後ヘラ磨き。	1㎜以下の砂粒を含	やや不良	茶褐色	(口)1/16	黒斑有	2
SK-20	第33図8	(底部)	—	5.5	—	底面ほぼ中央に径1.5㎝の円孔を焼成前に外面から穿つ。	1㎜以下の砂粒含	やや不良	淡褐色	(底)完存	煤、炭化物付着	25
SK-21	第35図1	壺	18.8	—	—	口縁は上位で大きく開いて徐々に厚さを増し刻目を施した端面をもつ。頸部丁寧な縦ハケ目、下位に叩目を観察。	1㎜以下の砂粒含	やや不良	灰褐色 淡橙褐色	(口)3/5	二次焼成 煤、炭化物付着	3
SK-21	第35図2	甕	〈16.5〉	—	—	口縁はぽってり鈍く丸く終える。肩部は張らず外面工具ナデ。	0.5㎜前後の砂粒含 3㎜の砂礫有	良好	淡褐色	(口)1/8 (体)上半1/10	煤付着	2
SK-21	第35図3	甕	〈16.2〉	—	—	頸部の屈曲甘く、口縁外上方へ伸び終える。内外面工具ナデ、指押え。	1㎜以下の砂粒含	やや不良	淡褐色	(口)1/7 (体)上半1/8	煤付着	6
SK-22	第37図1	壺	(9.2)	—	—	口縁端面にごく浅い凹線。端部に刻目。頸部外面ハケ目後一部ヘラ磨き。	1㎜以下の砂粒含	良	淡褐色	(口)1/4		11 29
SK-22	第37図2	甕	〈9.1〉	—	—	口縁部は短く外方へ開き端部は丸味をもって終える。肩部外面縦ハケ目。	0.5㎜以下の砂粒含 3㎜大の砂粒有	良	褐色	(口)1/7	煤、炭化物付着	8
SK-22	第37図3	甕	〈29.0〉	—	—	広口で肩張らず端面に凹線無。肩部内面ハケ目後丁寧な横ヘラ磨き。	1㎜前後の砂粒含	良好	(外)淡橙褐色 (内)橙褐色	(口)1/12 (肩)一部	煤付着	2
SK-22	第37図4	甕	(18.2)	—	—	器壁薄く口縁は水平方向に伸び端部は丸い。外面細かな縦ハケ目。	0.5㎜以下の砂粒含 1㎜の砂粒有	良好	淡褐色	(口肩)1/4	煤付着	4
SK-22	第37図5	甕	(19.9)	—	—	口縁端面にヘラ磨き、ハケ目痕。肩部粗い縦ハケ目で折り返し部分有。硬質。	1㎜前後の砂粒を僅に含	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡灰褐色	(口肩)1/6	口縁部不整円	1
SK-24	第40図1	(脚部)	〈19.4〉	—	—	ハの字状に開く脚部。内外ハケ目。脚裾部に4条の凹線。	1㎜前後の砂粒多	良	褐色	(脚)1/10	黒斑有	1
SK-25	第42図1	(口縁部)	〈20.1〉	—	—	口縁端部は肥厚して面をなし下端部に刻目。内外に丁寧なヨコナデ。	0.5㎜以下の砂粒含	良	褐色	(口)1/8		3
SK-25	第42図2	壺・甕?	(18.0)	—	—	口縁は上下に肥厚し端面に刻目2段後2条の凹線。肩部内外ハケ目後ナデ。	1㎜前後の砂粒含	やや不良	淡褐色	(口)1/3	黒斑有	2
SK-25	第42図3	甕	(15.8)	—	—	口縁は上下に肥厚して僅かな面をもち浅く幅広の凹線1条。体部外面は最大胴径部に重複する叩目。連続刺突文有。	1㎜前後の砂粒含	良好	褐色	(口肩)1/4 (体)下半1/8	煤、炭化物付着	6
SK-25	第42図4	石材	L 19.2	W11.3	T1.9	石庖丁の石材か。両端は切断面。両面成形剥離面、部分的に磨痕。片側辺は刃状に突り一部に刃状の加工痕。			緑灰色 暗灰色		緑色千枚岩 重量 569g	1
SD-01	第45図1	土師質皿	—	3.75	—	底部糸切り。	1㎜以下の砂粒含	不良	橙褐色	(底)完存	黒斑有	1
B区遺構外	第47図1	縄文鉢	—	—	—	口縁端部に断面三角形の刻目1条突帯文。	2～3㎜の砂粒多	良	褐色	(口)一部		17
B区遺構外	第47図2	壺	(18.3)	—	—	端面に4条、頸部に9条の凹線。	1㎜前後の砂粒多	やや不良	(外)褐色、赤褐色 (内)褐色	(口)1/6		5
B区遺構外	第47図3	高杯	(23.2)	—	—	口縁端部外面に整った刻目。内外ヘラ磨き。丁寧な作り。	0.5㎜以下の砂粒含 3㎜の砂粒有	良好	淡灰褐色	(杯口)1/6		30
B区遺構外	第47図4	須恵器蓋杯杯身	(11.3)	—	4.8	体部下半底部中心部までヘラ削り。受部やや厚く丸い。	1～2㎜の砂粒含 3,5㎜の砂粒有	やや不良	淡茶褐色 (淡セピア色)	(口)1/6 (杯底)完存	体部歪	9 10
B区遺構外	第47図5	土錘	L4.65	W1.10	—	手捏ね成形後ナデ。孔径約3.3㎜。	0.5㎜以下の砂粒多	良	淡黄褐色・濃橙色	ほぼ完存	4.4g	41
B区遺構外	第47図6	玉材	—	—	—	自然岩肌面あり。磨面に直交する2方向の擦切溝。他割面。2色の層。			緑灰色・明緑灰色		碧玉 重量73.01g	24
C区遺構外	第48図1	甕	19.1	—	—	肥厚する端面に1条の凹線。肩部非常に細かなハケ目。中位に刺突文。	1㎜以下の砂粒含 3㎜の砂粒有	良	(外)褐色、赤褐色 (内)褐色	(口)3/4 (体)1/2	煤付着	24
C区遺構外	第48図2	羽釜	〈20.2〉	—	—	口縁内外及び突帯上部ヨコナデ、以下外面ナデ。突帯は歪む。	1㎜以下の砂粒含 2㎜の砂粒有	良	(外)暗灰色 (内)灰色	(口)1/12	煤付着	29
C区遺構外	第48図3	敲石	L(13.5)	W6.6	T5.2	石斧を利用。基部四面に横位の装着痕。			灰色～オリーブ灰色	一端部欠	閃緑玢岩 重量 762g	23
C区遺構外	第48図4	石庖丁	L 14.65	W4.50	T0.68	磨製、両刃で背は弧形。断面は背側に最大厚をもち刃を研ぎ出す。少々背側寄に紐孔2を両面穿孔。紐孔外径5.1㎜。両面に未貫通の紐孔各1。両面に使用痕。長軸片側は切断未処理。紐孔外径7.0㎜～6.0㎜。				完存	緑色千枚岩 重量 80.4g	4

第3節　ま　と　め

今回の調査地は、従来山ヶ鼻遺跡の主要部分として周知されてきた山ヶ鼻丘陵から釣山間の中央部、現在主に畑として利用されている微高地一帯とはやや離れた地域であり、山ヶ鼻丘陵南東裾部の現集落外縁部にあたる。現県道はもともと集落を迂回するように山ヶ鼻集落の南東外縁を通っており、この県道の更に南東沿いに今回の細長い調査地が位置する。調査地は地形的にC区→B区→A区と北東へ向けて標高を下げており、唯一、C区とD区間一帯の山ヶ鼻丘陵が大きく南東へ張り出した裾部外縁付近に主要遺構の検出などが期待された。調査の結果、B区南西部・C区を中心とした標高6.25～6.6mで土坑25基、土器群1、溝状遺構1条、ピット1基、谷状落ち込みを検出した。

出土遺物は、コンテナ(容量54×34×20cm)約22箱分である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土錘、紡錘車、石鏃、石庖丁、石庖丁未製品、敲石、碧玉製管玉、碧玉製玉未製品がある。これまで行われた山ヶ鼻遺跡の調査で出土した遺物と時期的に符合するものである。今回の調査で注目されるのは、弥生時代中期の土坑からまとまった土器資料が検出されたこと、同時に石庖丁や管玉が未製品を伴い出土しより集落の本体部分に近い遺物を得られたことであろう。これまで不明であった山ヶ鼻丘陵裾部周辺の様相が一部ではあるが明らかとなり、山ヶ鼻遺跡解明への一助となった。

弥生土器について

今回出土した遺物の大半は弥生土器である。弥生時代中期中葉から後葉にかけてと時期も比較的限定される。器種組成としては広口壺、甕、高杯があり、無頸壺、直口壺は極めて少なく、器台はみられない。また、各器種を通して全体のプロポーションが判るものが少ない。広口壺も量的には少なく、口縁部が大きく下垂するものはわずかで、端面に斜格子文や刻み目を施すが、のちに1条の凹線を施すものは1点のみで円形浮文をあしらうものは認められなかった。また、壺頸部には断面三角形の貼付突帯や貼付刻目突帯を施す。波状文など櫛描で装飾された肩部片はみられなかった。甕はく字状口縁で口縁端部はそのまま丸く終えるものと、端部を上に摘みその僅かな端面に1条の凹線をもつものともたないものとが混在し、口縁端部が上下に肥厚する所謂繰り上げ口縁は(第42図2)(第47図2)を除き皆無に近い状況である。また、端面に刻み目をもつものは数点見られるが、凹線や円形浮文はなく、頸部に貼付突帯をもつものは1点もみられなかった。調整も体部内面はハケ目、ナデ調整、外面はハケ目後体部下半ヘラ磨き調整で、肩部を中心としてハケ目以前の叩き目が観察される個体が比較的目立つ。また底部は小形化する。高杯は様々なバラエティがみられる。今回検出した土器は、時期的あるいは地域的特徴であるのか、円形浮文や甕頸部の貼付突帯がみられず、全般的に装飾が控えめでより実用的側面が強いように見受けられる。包含層中に中期後葉の土器を若干含むが、土坑群を中心として検出した土器は凹線文の導入期にあたり、弥生時代中期中葉段階の後半期に位置づけられる[1]。

碧玉製管玉未製品について

B、C区で管玉未製品を12点検出した。0.43～73.01gとばらつきがある。いずれも土坑および土坑検出に伴う包含層の掘り下げに伴い出土したもので、土坑群と同時期の所産である。出方としては土坑埋土に流入するような状態で散在し、SK-15で管玉1点を含む4点が出土しているが一括して投棄されたような状況は見出せない。①自然岩肌をもつ母岩状のもの、②擦切溝を施し分割された直方体状のもの、③擦切溝のみられない破材状のもの、④完成品の管玉(SK-15・0.44×2.24

碧玉製管玉・未製品一覧表

	出土地	法量(cm)			重量(g)	擦切溝	擦面	形状	挿図番号
		長軸	短軸	厚さ					
1	SK-03	3.8	2.9	2.1	27.41	なし	なし	荒割段階・岩肌を残す	—
2	SK-09	2.6	1.7	1.4	10.33	3	3	長方体状	—
3	SK-11	2.2	1.8	1.6	11.44	2	なし	正方体状	—
4	SK-15	2.24	0.44	—	0.71	—	—	管玉完成品・暗緑灰色	第25図4
5	SK-15	2.3	1.7	1.4	7.75	2	2	長方体状	第25図5
6	SK-15	1.8	1.2	0.9	2.73	2	2	岩肌を残す	第25図6
7	SK-15	2.2	1.8	1.5	7.76	1	なし	三角柱状	—
8	SK-17	1.5	0.7	0.4	0.43	なし	なし	破材	—
9	SK-22	1.9	1.6	1.2	5.13	2	2	長方体状	—
10	B区包含量	5.0	3.6	2.4	73.01	2	1	長方体状	第47図6
11	C区包含量	4.8	2.7	1.5	18.91	1?	なし	三角柱状・風化すすむ	—
12	C区包含量	1.4	1.0	0.3	0.46	なし	なし	破材	—

cm・0.7g)がみられ、石鋸など直接生産に係った遺物は検出していない。また、諸般の事情により土坑埋土の水洗は行っていないものの、掘り下げた状況ではごく微細な剥片等は検出していない。工程としては荒割、形割段階のもので、擦切溝を施し分割後の材が多いが、中には擦切溝をもたない破材も含まれる。今回73.1gと最大重量をもつ(第47図６)から、岩肌をもつ段階から擦切溝を施して効率よく分割し、石材を有効に利用しようとした様子が窺える。なお、Ｃ区包含層から検出した(18.90g)には一面に穿孔痕かとも見られる径約１㎜の小孔が複数観察されるが、石材の質や風化がすすむことなどを考慮すると石に含まれる鉱物状のものが欠落した結果の産物と考えられる。

石庖丁および石庖丁未製品について

Ｂ、Ｃ区で石庖丁３点(SK-03、12、Ｃ区包含層)、石庖丁未製品３点(SK-03、Ｂ・Ｃ区包含層)、石庖丁石材１点(SK-25)が出土している。いずれも黒色および緑色千枚岩製である。石庖丁は全体の形状が判るものはＣ区包含層(第48図４)のみであるが、これはこの周辺でみられる石庖丁の形態に比べやや幅に対し長さがあり、背部分は通常緩やかな円弧状を描くがこれはカーブが弱い。一端が成形時のまま未調整でもある。他２点に関してはやや磨き残し部分もみられるが通常の仕上がりである。未製品３点についてはいずれも全体の２分の１ないし３分の１程度の片側端部の遺存で、周縁を細かく打ち欠いて弧状に成形している。SK-25出土の石庖丁石材(第42図４)は、背や刃部の形状ができており本来からすれば大形石庖丁の未製品とみられるが、何らかの事情で両端を鋭利に切断している。おそらく石庖丁の石材として利用される予定であったと推測される。また、石庖丁の石材として多用される千枚岩については必ずしも山ヶ鼻遺跡の周辺で容易に採取できるものではなく、この周辺では中国山地にそびえる氷ノ山の麓、若桜町不香田が産地として知られる[2]。石材の流通と消費に関する問題も今後大きな課題であるが、これまで石庖丁の未製品については鳥取平野地域では桂見遺跡、西大路土居遺跡など報告例は多くはない。いずれにせよ今回、未製品が狭い範囲内、限定される時期にある程度の密度で出土したことで出土地点がより生産域(工房域)に近いことへの証左と考えたい。

土坑群からみた遺跡の概観

今回の調査区で標高の高い微高地部分、標高6.2～6.6mで弥生時代中期中葉の土坑群を検出した。土坑は25基を確認し、うち石鏃の出土が２基に認められる。形態的に長楕円形の平面形をもつものが多く、土壙墓としての可能性をもつが土層断面で木棺状の落ち込みをもつものは認められず、ここでは「土坑」として扱った。この土坑群は地形的に山ヶ鼻丘陵から続く舌状微高地の南東斜面に立地すると考えられる。Ｂ区B3トレンチ～Ａ区平成13年度トレンチ南西付近が谷状に深く落ち込むが、今回残念ながらＫ杭～B3トレンチ間の遺構の分布状況が把握できず、谷状落ち込み部で検出される土器等からおそらく土坑は落ち込み手前付近まで分布を広げるとみられる。また土坑の切り合い関係が複数みられるものの土器にそれほどの時期差は認められないことから、ある時期に集中的に土坑が営まれた地域と言える。上層の包含層中に弥生後期の土器が一切検出されず、包含層遺物として中期後葉の遺物が僅かに見られるもののこの土坑群をもって一端廃絶したことが窺える。確認したB3トレンチ内標高5.53mまで、B2トレンチでも標高5.28mまで土坑群の時期と同時期の遺物で占められ、谷状の深い落ち込みがどっと埋没するような状況がこの一帯であったと言える。

土坑は平面形から①楕円形のもの、②長楕円形のもの、③溝状のものとがあり、Ｃ区で検出された③溝状土坑のSK-11、10、12は軸をＮ-39～48°-Ｅへ振り、逆にそれらの軸と直交する軸をもつ②長楕円形土坑はＣ区SK-03がみられるもののＢ区に多い。この平面形が長楕円形を呈する土坑については、平成６、７年度の大井手川両沿岸部の調査[3]をはじめ岩吉遺跡で、溝状土坑については岩吉遺跡、西大路土居遺跡で検出例が見られる[4]。この平面長楕円形および溝状土坑については中期的な特徴でもあり、主軸からある程度方向性が窺える。弥生中期、これまでの釣山～山ヶ鼻丘陵間中央の岩盤を内包する周辺地域では、斜面に対し直交する軸をもつ土坑が目立ち、未調査のため東西方向の状況は不明ながら、

検出遺構一覧表

遺構名	法量(cm) 長軸	短軸	深さ	底面標高(m)	平面形	断面形	主軸方向	出土遺物	時期
SK-01	—	(70)	20	6.37	——	椀状	——	土器底部細片	弥生時代中期中葉
02	—	—	51	6.10	——	椀状	——	土器胴部片	
03	(176)	(129)	52	6.02	長楕円形	不整椀状	N-35°-W	甕、高杯、底部、石庖丁、石庖丁未製品、碧玉材	
04	(85)	68	22	6.29	長楕円形	椀形	N-43°-W	甕、底部、石鏃	
05	174	76	22	6.39	不整長楕円形	不整椀状	N-54°-E	甕、底部、紡錘車	
06	111	(74)	49	6.02	不整楕円形	不整椀状	N-58°-E	壺、甕、高杯、底部（砂脈検出）	
07	104	80	(22)	6.34	不整楕円形	皿状	N-66°-E	壺、甕、底部、石鏃	
08	75	65	(11)	6.27	不整楕円形	皿状	N-4°-W	——	
09	97	66	(6)	6.44	不整楕円形	皿状	N-32°-E	甕、碧玉材	
10	340	59	(32)	6.11	溝状	椀状	N-43°-E	甕、紡錘車	
11	218	(52)	(30)	6.21	溝状	不整逆台形	N-48°-E	甕、底部、碧玉材	
12	(365)	106	24	6.31	溝状	皿状	N-39°-E	壺、甕、高杯、石庖丁、礫	
13	155	104	19	6.22	不整長楕円形	不整皿状	N-89°-W	甕、高杯	
14	(101)	67	23	6.21	不整長楕円形	不整皿状	N-27°-E	壺、甕、底部	
15	(177)	126	43	6.06	不整長楕円形	不整椀状	N-62°-E	壺、甕、碧玉製管玉・玉材	
16	245	95	37	6.07	長楕円形	椀形	N-53°-W	甕、高杯、底部	
17	166	109	44	5.91	長楕円形	逆台形状	N-56°-W	壺、甕、高杯、碧玉片	
18	82	35	(7)	6.17	長楕円形	皿状	N-46°-W	胴部細片、底部片	
19	131	81	15	6.02	長楕円形	不整皿状	N-58°-W	壺、甕	
20	142	88	44	5.91	(長楕円形)	不整逆台形状	N-19°-W	壺、甕、高杯、敲石	
21	144	92	33	6.00	長楕円形	椀状	N-39°-E	壺、甕、底部片	
22	244	123	33	5.84	長楕円形	椀状	N-48°-W	壺、甕、底部片、碧玉材	
23	47	41	(7)	6.25	不整円形	不整皿状	——	体部細片、底部片	
24	144	56	(9)	6.29	不整長楕円形	不整皿状	N-57°-E	体部細片、脚部片	
25	170	85	41	5.84	不整長楕円形	不整皿状	N-74°-W	壺、甕、石庖丁石材	
SD-01	1150	214	58	5.95	溝状遺構	不整皿状	N-21°-E	土師皿、角礫	平安時代後期
P-01	29	28	39	6.16	不整円形	U字状	——	——	(弥生時代中期中葉)

(　)は遺存値、推定

土坑は標高の高い岩盤中心部より外側周縁に帯状に群を成して営まれるものと推測される。岩盤北側で標高7.2m前後(平成6年度SK-13、18、28)、南側で6.9m前後(平成7年度SK-01、02など)と標高を下げる。今回明らかとなった土坑群についても、その性格づけの必要性もさることながら、土坑群が遺跡の主要部分の外縁部にあたる可能性は大きく、土坑が形成される地帯の内側に集落の主要部分である居住域や工房域が内包されていると考えられる。やや短絡的ではあるが、玉未製品や石庖丁未製品の出土はそれを裏付ける資料ともいえよう。

これまでの調査を総括すると、D区南西側の県道山ヶ鼻橋から70m南付近までは溝状遺構が幾重にも重複する地帯であり、その流れは東へ流路をとり、今回調査のC区およびB区南西部はこの流路の沿岸部付近にあたる。土坑群は山ヶ鼻丘陵から派生する微高地の流れの中で舌状に張り出した南東斜面にあたり、B区B3トレンチで確認した谷状の落ち込みはちょうど入り江状に入り込んだ部分、SD-01北東に

広がる基盤層は再び張り出した部分と考えられる。現在の集落の状況を観察すると、この舌状に張り出した微高地・地盤筋に現在も住居が建てられていることが判る。明確な根拠はなく推定の域をでないが弥生中期の土坑の分布状況、未製品の出土などから、山ヶ鼻丘陵の裾部に弥生中期の居住域が広がる可能性が大きいと考えられる。現集落背後の山ヶ鼻丘陵では、平成4年度の調査で丘陵頂部南斜面、標高30.0mで弥生時代中期後半の土器や竪穴住居が、やや下った28.5mで土坑が検出されている。丘陵上での住居が一般的なものなのかどうか調査が進まないと明らかとはならないが、中期後葉期に住居が丘陵上で一時的に営まれるようである。こうした中期に丘陵上で住居が検出される例は近年増加しており、千代川左岸丘陵では下味野丘陵標高40～50m・75mで中期中葉～後葉の竪穴住居、段状遺構、遺物散布地域が、横枕丘陵でも標高100m付近で中期土器の散布地域が確認されている[5]。このような状況の要因については平野全体および他地域との関連など総合的に考えていく必要があろうが、今回山ヶ鼻遺跡で検出された土坑群の突然の衰退は自然条件、自然環境にも起因するとみられ、河川帯が突如広がった可能性があろう。この時期、山ヶ鼻平野部の状況も中期後葉の遺構は激減し溝状遺構のみが散在する。弥生後期に入っても状況は変わらず、平野中央岩盤の南外周に完形の土器を多く含む断面V字状の溝状遺構(平成6年度SD-29・平成7年度SD-02)が検出される程度である。その後、平野部では古墳前期に土坑が散見され始め、中期、後期とわずかな足跡を残しながら7世紀中葉の掘立柱建物群、後半とされる菖蒲廃寺の創建を待つことになる。菖蒲廃寺の建立を頂とした9世紀頃までの山ヶ鼻地域の繁栄については記すまでもなく、それ以降中世期に至っても常に人の営みは途絶えることはなく、今回A区で検出したSD-01は13世紀頃の年代が与えられる。

山ヶ鼻遺跡は鳥取平野地域の集落を考えていく上で縄文時代～中世と断続的に様相を追うことが可能ばかりか弥生中期に大きな画期をもつ重要な遺跡である。今回を含めこれまでの山ヶ鼻遺跡の調査成果については、鳥取平野地域での集落の動向、立地、形態、消長などを探っていく上で重要な役割を担い、更なる分析・検討が必要であるように思われる。山ヶ鼻遺跡周辺地域の遺跡の動向も合わせ、今後の調査および調査成果の深化が期待される。

註

(1) 今回、時期区分については以下の文献の編年観に従った。清水真一氏の編年ではⅢ-3様式段階に比定できると考える。弥生時代中期の時期区分については今後流動的な部分を含む。
清水真一「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編』1992年　木耳社

(2) 石材の鑑定および産地等について山名　巌先生(元鳥取県立博物館、現鳥取市文化財審議会委員)から様々なご教示をいただいた。

(3) ㈶鳥取市教育福祉振興会『山ヶ鼻遺跡』1995年
㈶鳥取市教育福祉振興会『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』1996年

(4) 弥生時代中期の土坑は長楕円形・隅丸長方形の縦長の平面形をとるものが多く、円形・楕円形の平面形をとる小規模な土坑との差が大きい。後期になるとほぼ楕円形で似通った規模の土坑となり、時期が新しくなるにつれて数多くつくられることが指摘されている。また、西大路土居遺跡では弥生時代前期末～中期初頭の土坑群に溝状の平面をもつものがある。これらは土壙墓との指摘もなされている。
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『岩吉遺跡Ⅲ』1991年
㈶鳥取市教育福祉振興会『西大路土居遺跡』1994年

(5) ㈶鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003年

図　　版

図版 1

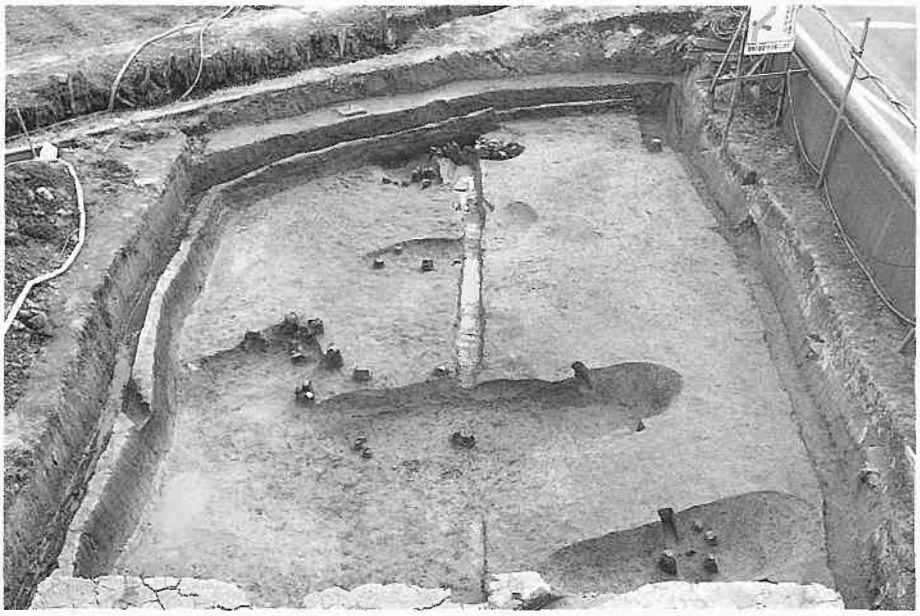
調査地近景
（調査前・北東から）

調査区全景
（南西から）

図版 2

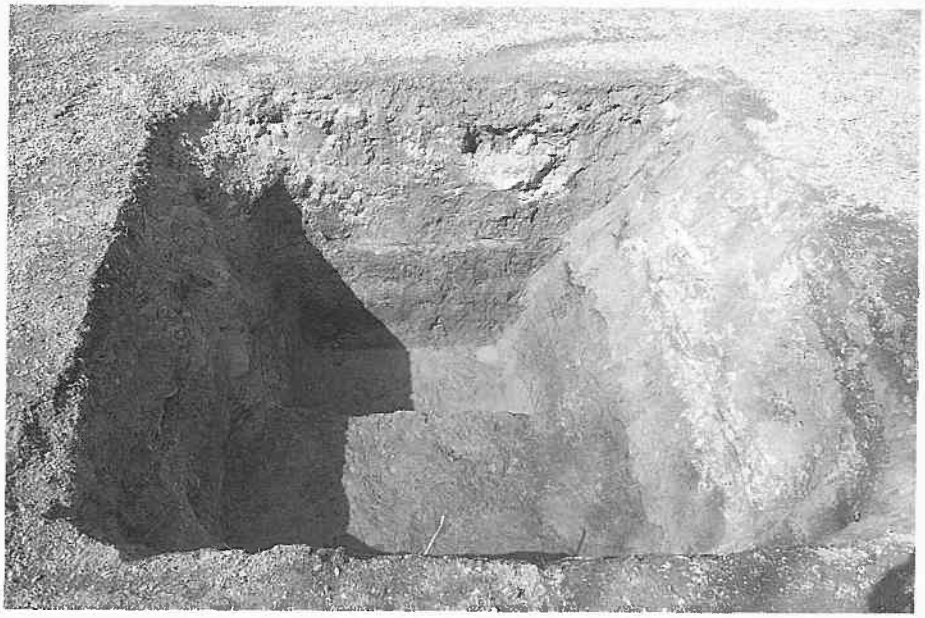
A区全景
（南西から）

B区全景
（北東から）

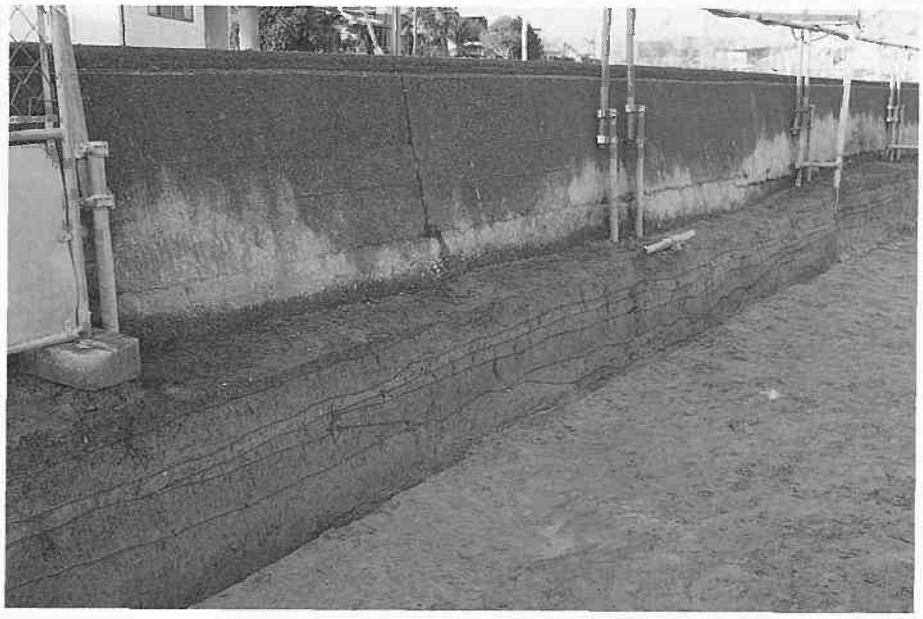


B区東端土坑群
（北東から）

C区全景
（南西から）

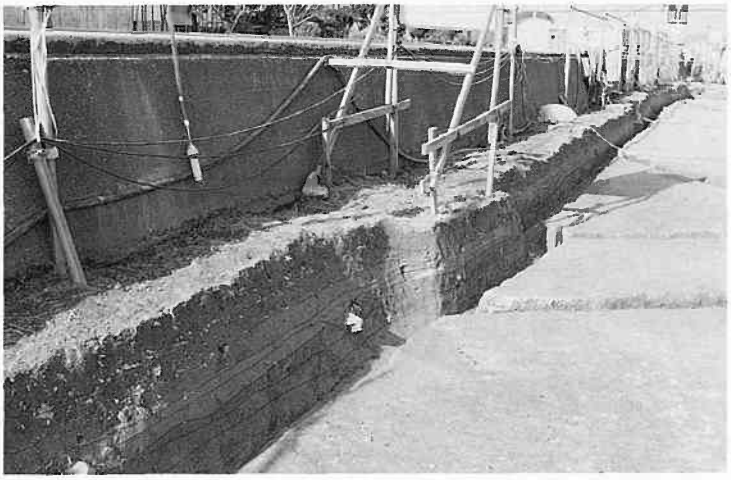


D区（トレンチ）
（南東から）

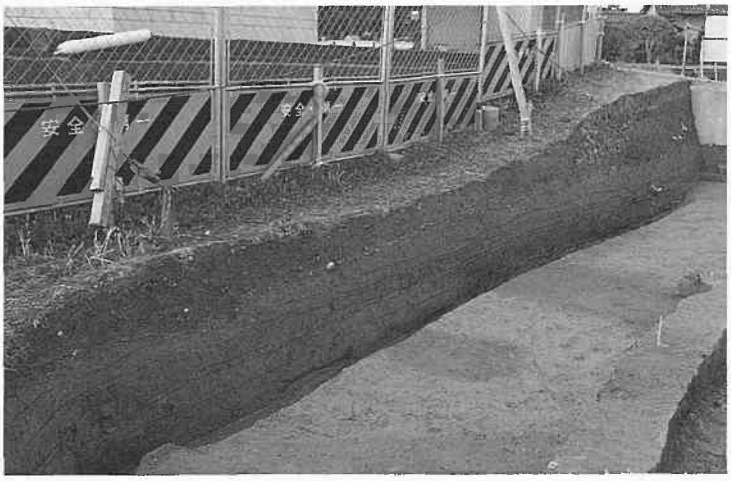


A区北西壁面
SD-01付近
（南から）

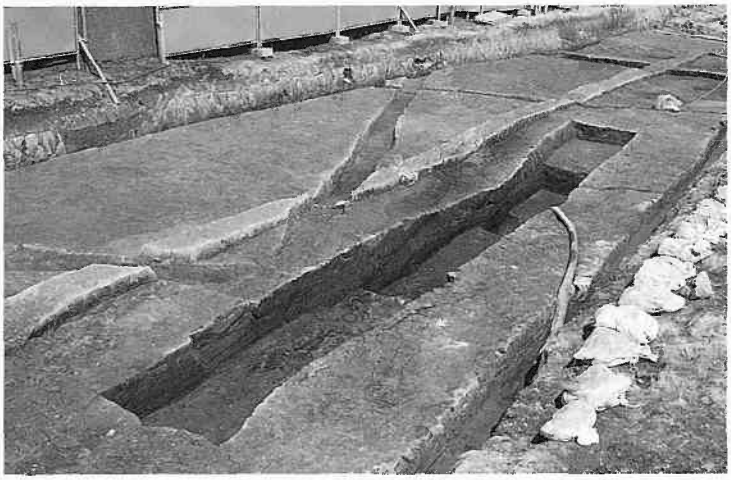
図版 4



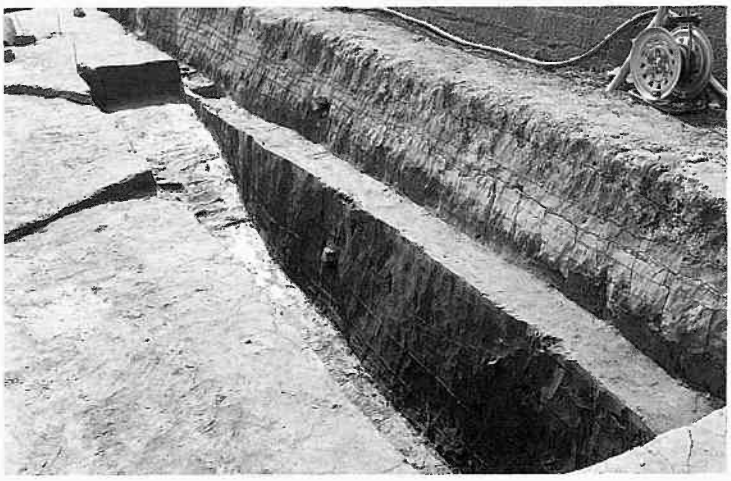
B区北西壁面
（南から）



C区北西壁面
（南から）

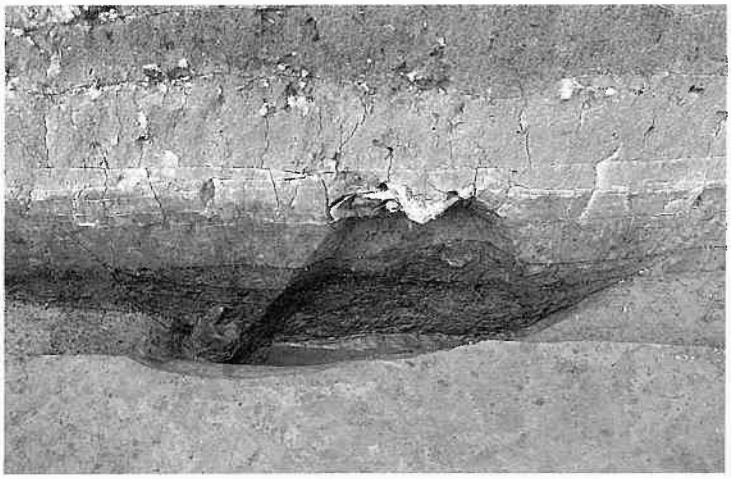


B区B２トレンチ
（南から）



B区B３トレンチ
（東から）

SK-01断面
（南東から）

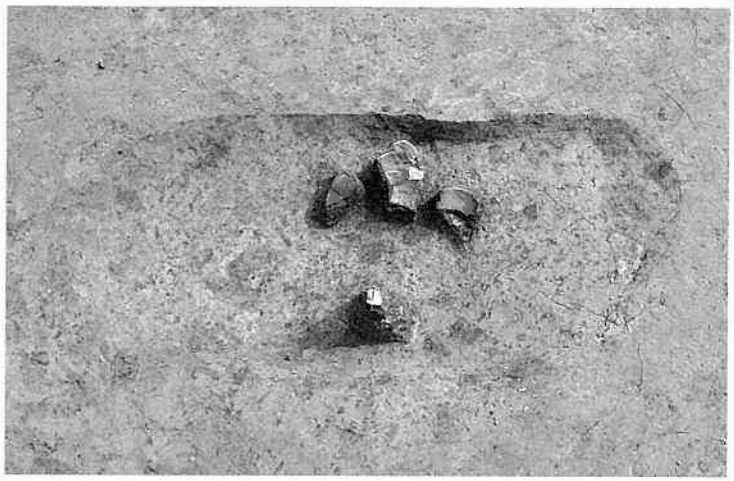


SK-02検出状況
（南東から）

SK-03検出状況
（南東から）

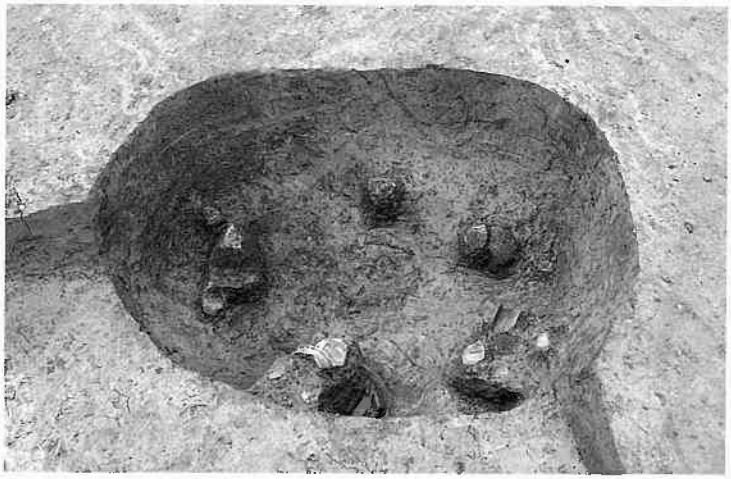
SK-04検出状況
（南東から）

図版 6



SK-05検出状況
（北西から）

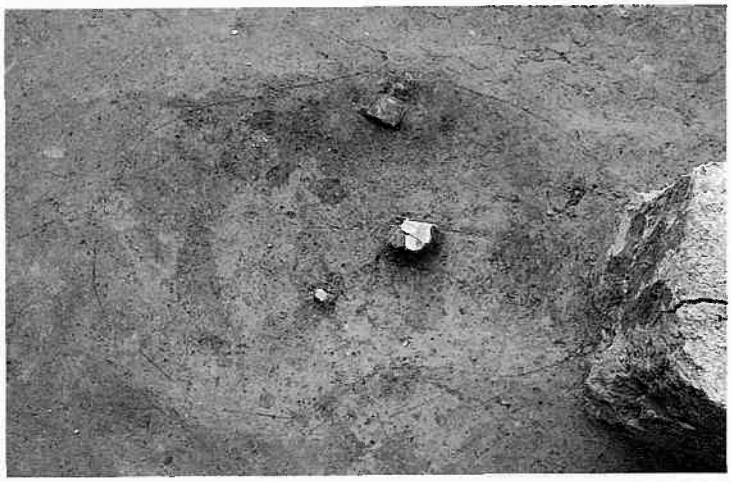
SK-06断面
（南東から）



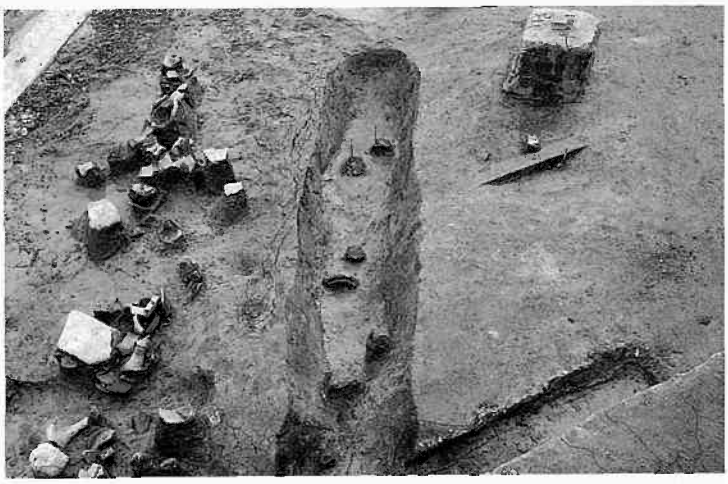
SK-06検出状況
（南東から）

SK-07検出状況
（北西から）

SK-08検出状況
（南東から）



SK-09検出状況
（北西から）



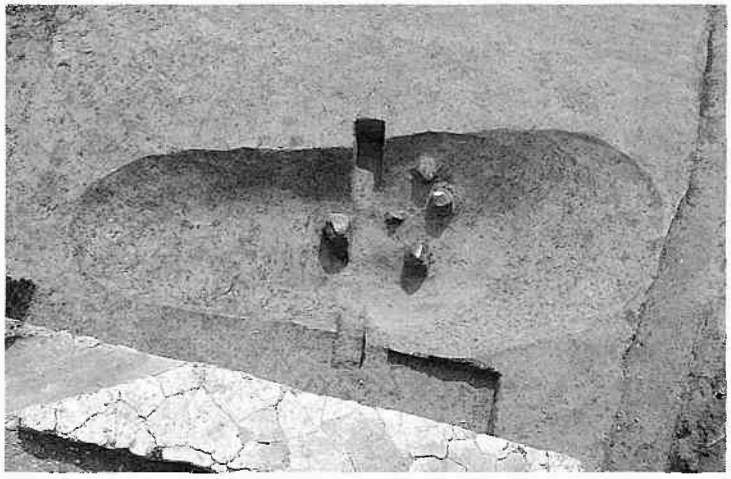
SK-10検出状況
（北東から）

SK-11検出状況
（北東から）

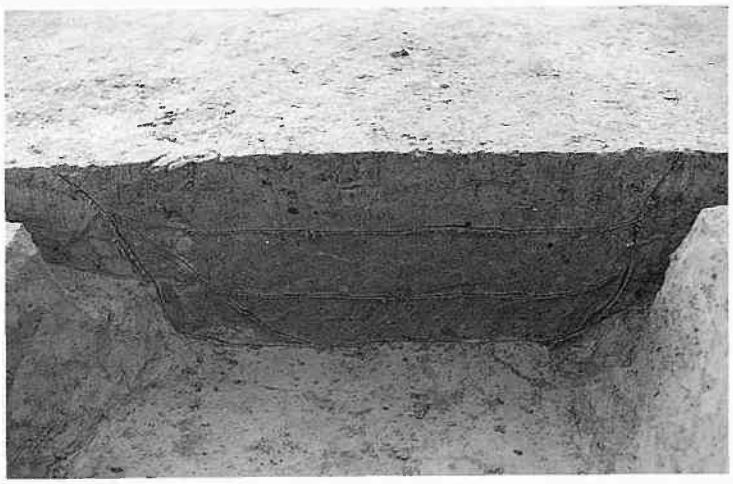
図版 8

SK-12検出状況
（北東から）

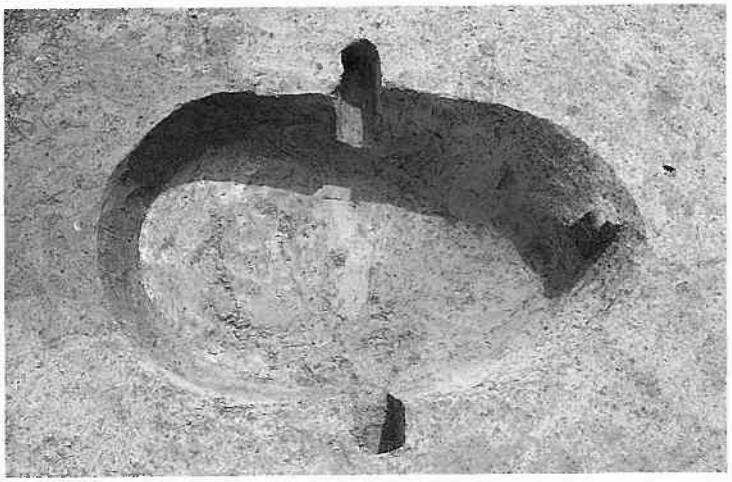
SK-13・14・15
検出状況
（北東から）



SK-16検出状況
（北東から）



SK-17断面
（南東から）



Sk-17検出状況
（北東から）

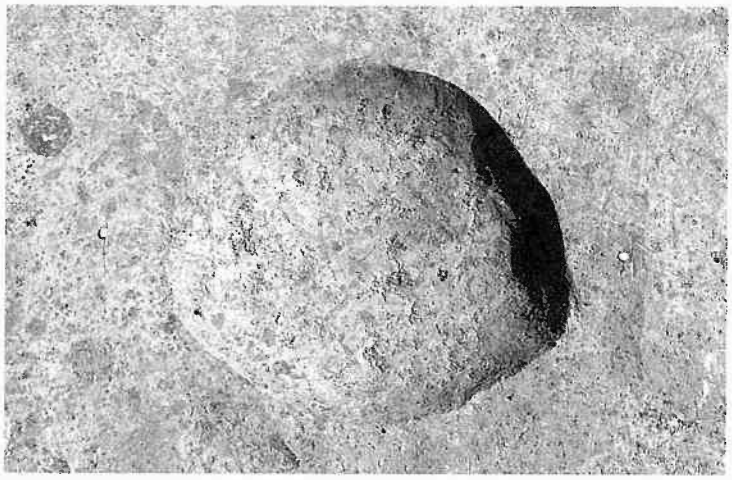
SK-18検出状況
（北東から）

SK-19検出状況
（北東から）

図版10

SK-20・21
検出状況
（北東から）

SK-22検出状況
（南東から）



SK-23検出状況
（南西から）

SK-24検出状況
（南西から）

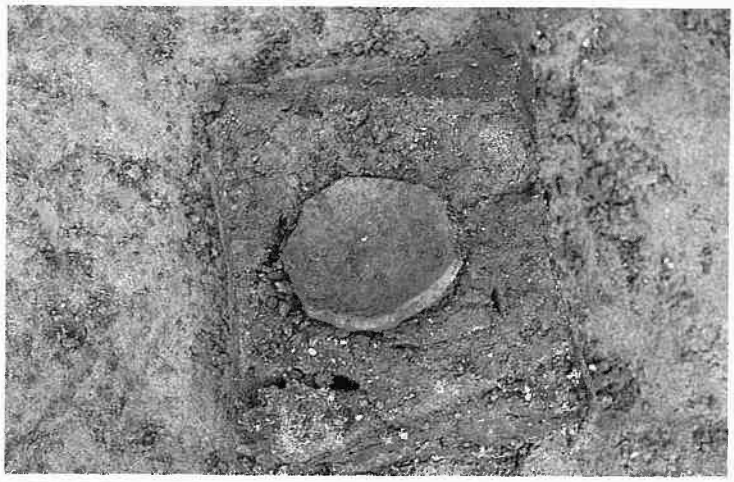
SK-25検出状況
（西から）

土器群検出状況
（北東から）

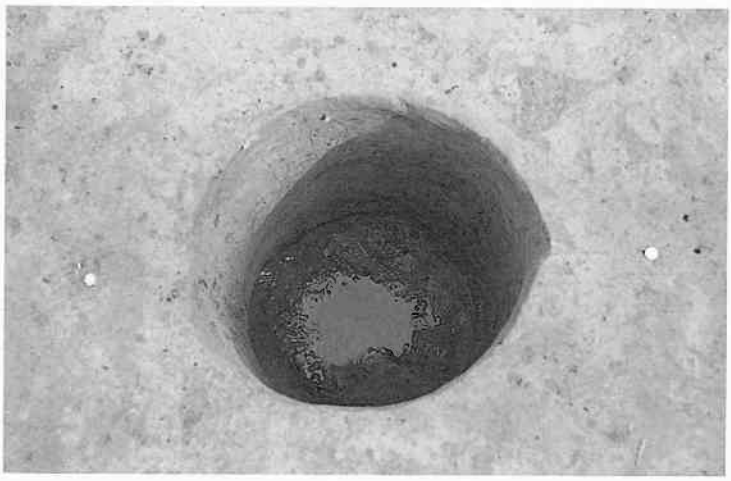
SD-01検出状況
（南西から）

図版12

SD-01完掘状況（南西から）



SD-01遺物検出状況
（南西から）



P-01検出状況
（南東から）

1

2

SK-03出土遺物

1

SK-06出土遺物

2

SK-07出土遺物

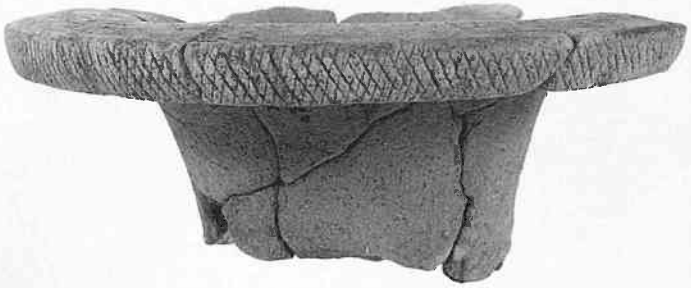
1

3

SK-10出土遺物

2

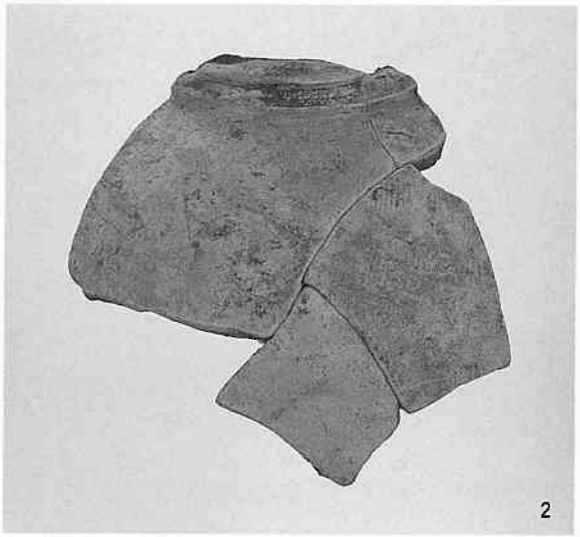
SK-11出土遺物

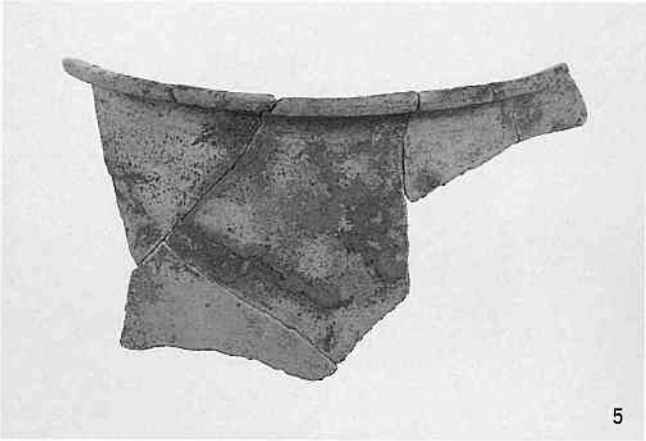


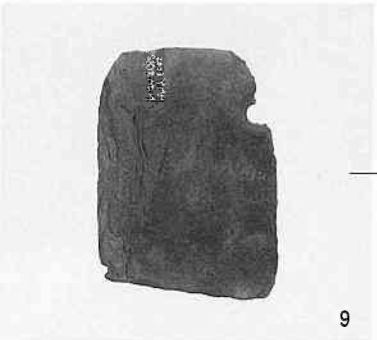
1

SK-12出土遺物

図版14



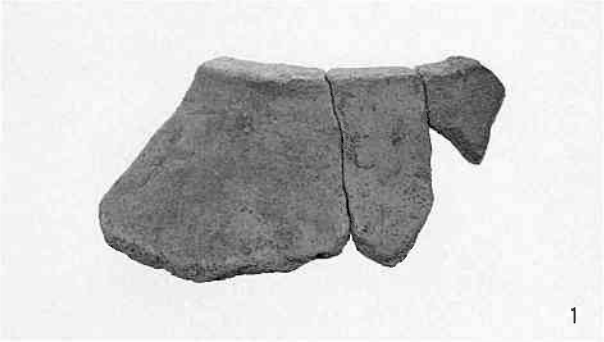


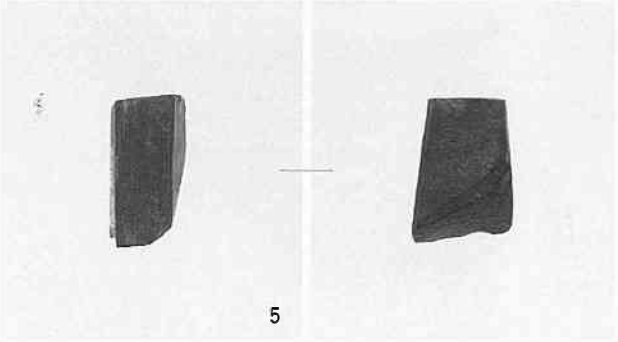


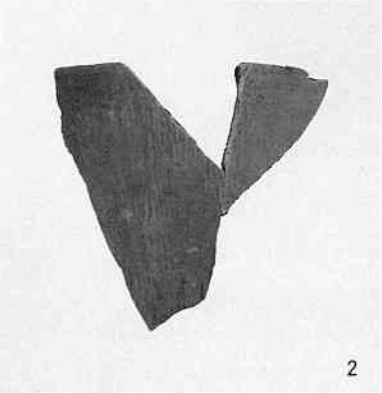
SK-12出土遺物

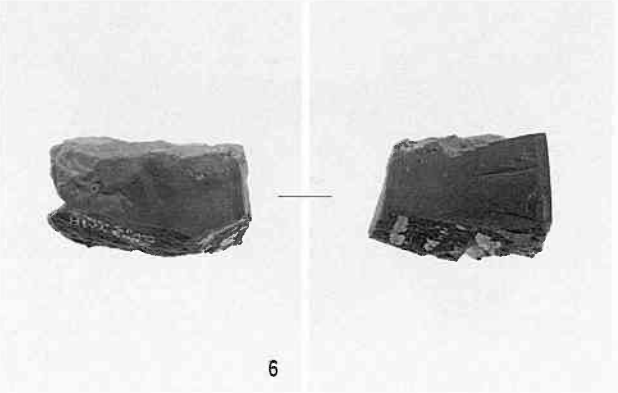
SK-13出土遺物

SK-14出土遺物



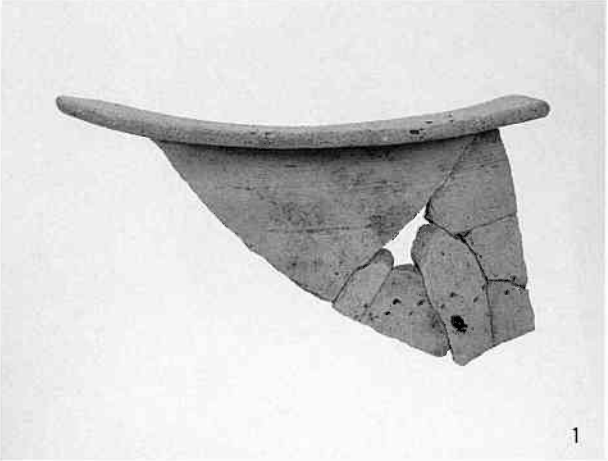






SK-15出土遺物

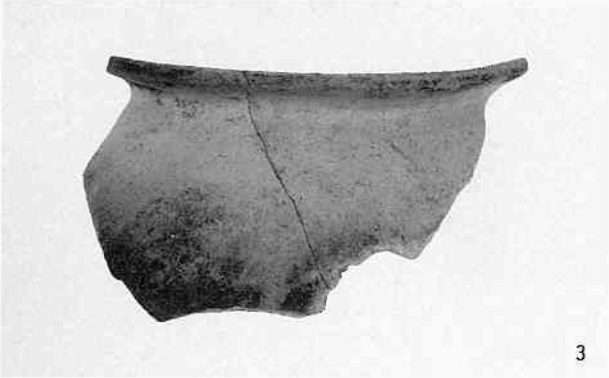
SK-17出土遺物

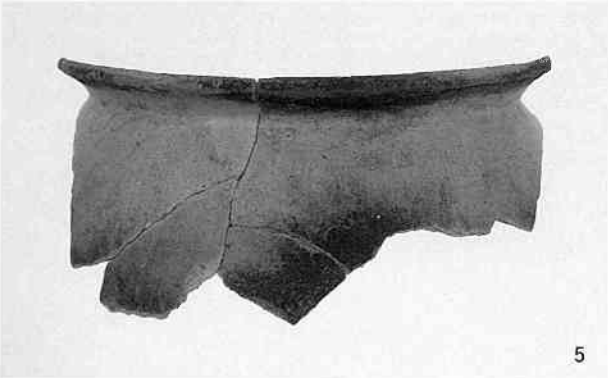


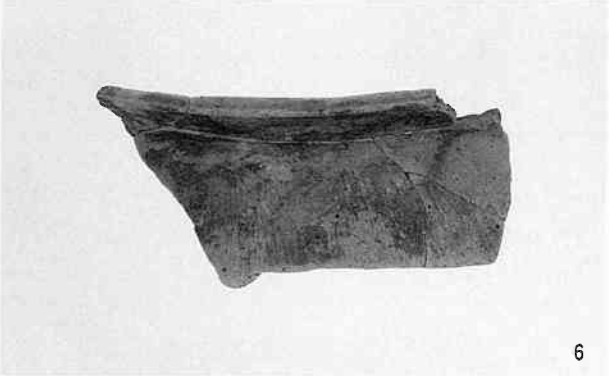
SK-19出土遺物

図版16

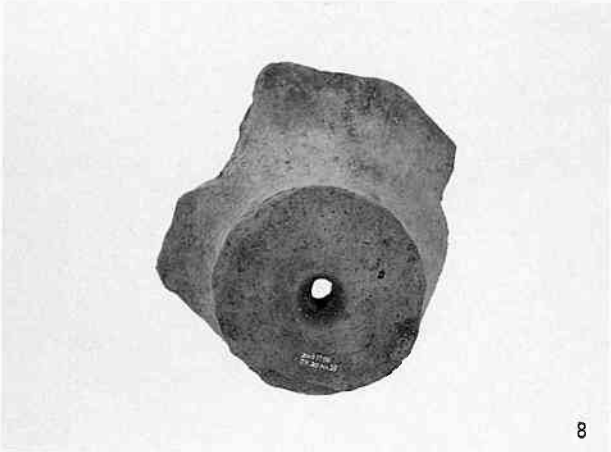
SK-19出土遺物

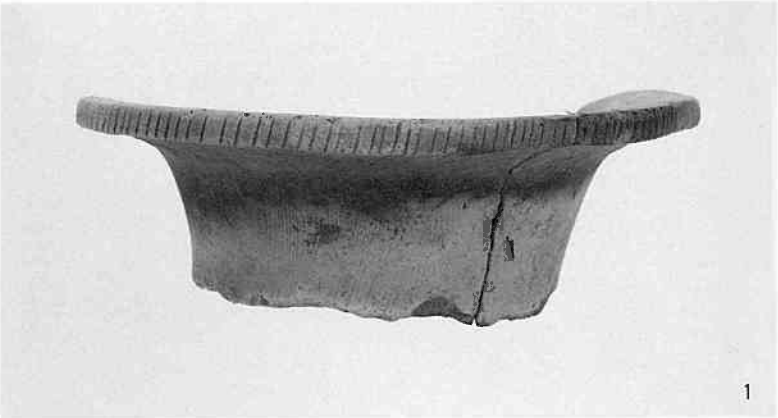


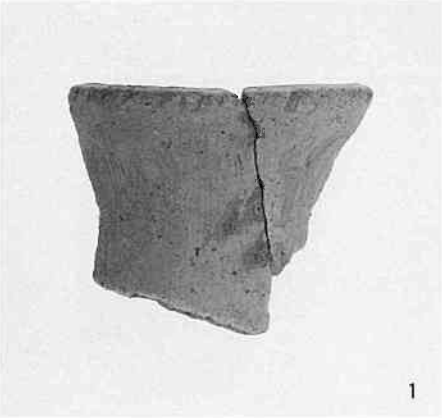




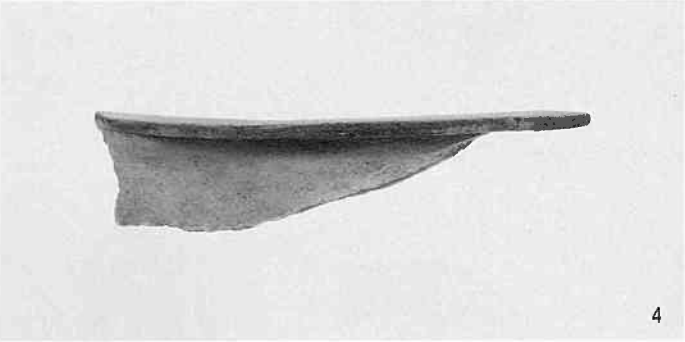
SK-20出土遺物

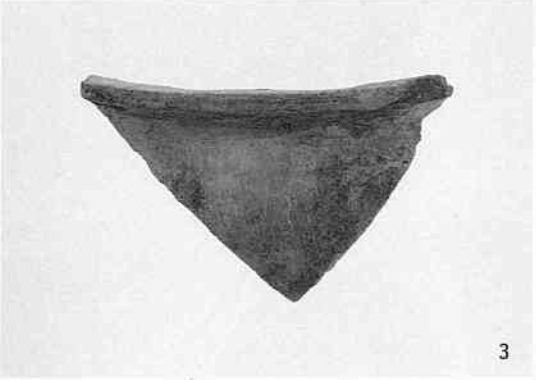


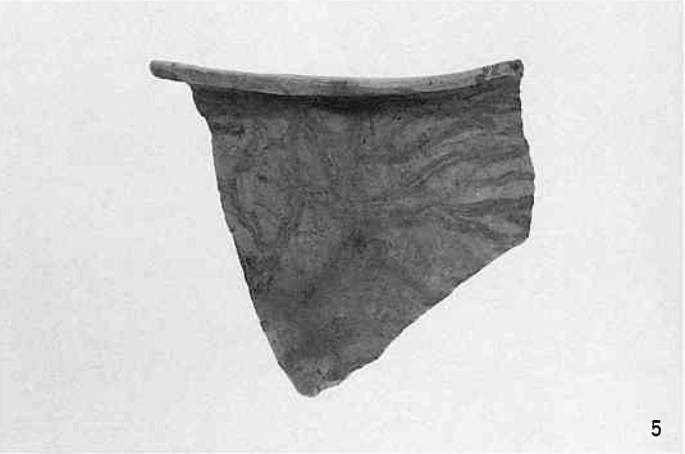


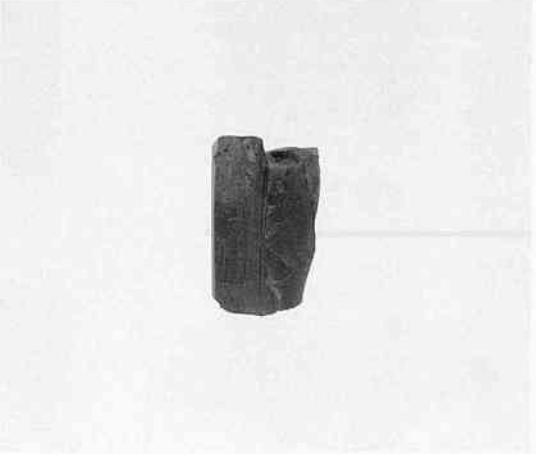


SK-21出土遺物



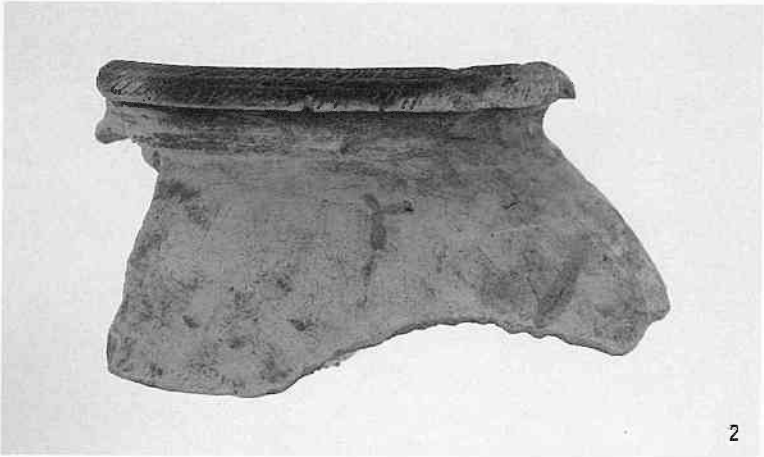




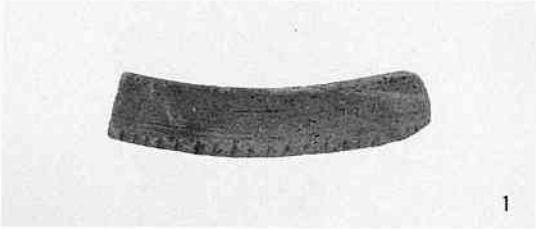


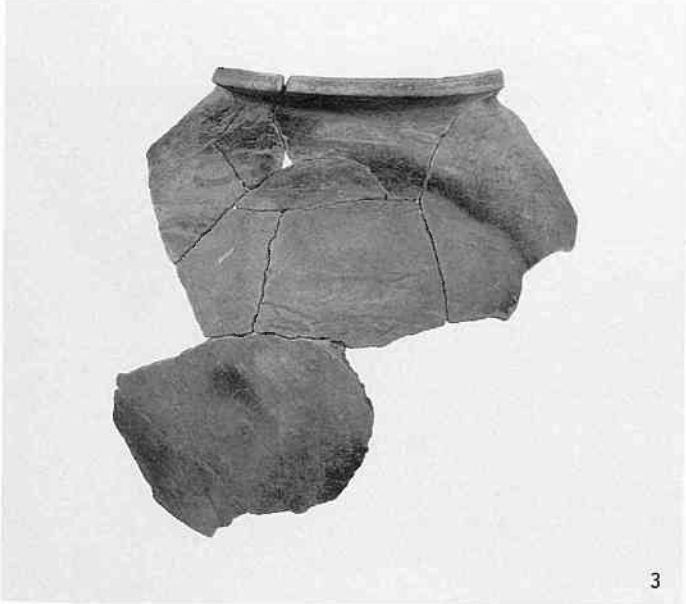
SK-22出土遺物

図版18

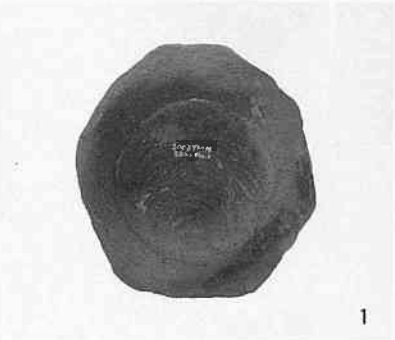


SK-24出土遺物

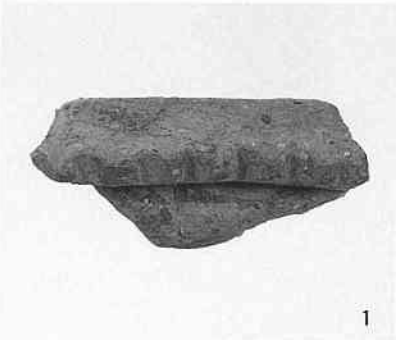




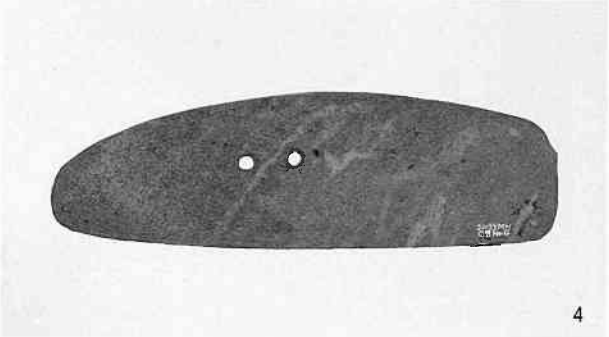
SK-25出土遺物



SD-01出土遺物



B区遺構外出土遺物



C区遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やまがはないせきⅢ
書名	山ヶ鼻遺跡Ⅲ
副書名	一般県道高路古海線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷口恭子
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　　TEL　(0857)23-2140
発行年月日	西暦　2004年7月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
山ヶ鼻遺跡（やまがはないせき）	鳥取市古海（とっとりしふるみ）	31 201		35° 25′ 15″	134° 12′ 20″	20031224 ～ 20040330	のべ 718㎡	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山ヶ鼻遺跡	集落	弥生時代 中期 古墳時代 中期 後期 平安時代 鎌倉時代	土坑 溝状遺構 ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦質土器 土錘 紡錘車（土器転用） 石庖丁 石包丁未製品 石鏃・敲石 碧玉製管玉 玉未製品	○弥生時代中期中葉の土坑群を検出。 ○碧玉製管玉および玉未製品出土。 ○石庖丁および石庖丁未製品出土。

山ヶ鼻遺跡 Ⅲ

―一般県道高路古海線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査―

平成16年7月30日　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印刷所　勝美印刷株式会社